

東方妖狐伝～雪空～

駿河葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家の掃除に従事していた八雲藍。

遠くに浮かぶたくさんの雲を見て、あの日の悲劇を思い浮かべた。

目次

一話	予兆	1
二話	悲劇	8
三話	人助け?	17
四話	再開	22
五話	夢現つ	31
六話	看病	44
七話	お願い	52
八話	姉との接触	56
九話	侵入	62
過去 episode 《雪》	家出するの?!	68
過去 episode 《雪》	お父上、ねえ!	68

過去 episode 《空》	寺子屋の先生	74
過去 episode 《空》	誰?	80
過去 episode 《空》	メイドさん	92
過去 episode 《空》	いざ! 紅魔館へ	100
過去 episode 《空》	戦闘: 痛かった	105
過去 episode 《空》	手懐けと重症	113
過去 episode 《空》	泊まり	127

二十一話	喧嘩ー?!	271
二十二話	花火大会のお誘い	279
二十三話	料理	285
二十四話	駿との接触	291
二十五話	主人と式	296
二十六話	封印 2人の犠牲	
301		
二十七話	ガチギレ	306
二十八話	人格の目覚め 2	310
二十九話	死の代償	316
三十話	儀式	322
走馬灯 episode	あの日の思い	327

走馬灯 episode	家出 逃走	
337		
走馬灯 episode	小春の思い	
345		
走馬灯 episode	逃亡生活	
352		
走馬灯 episode	巫女との対面	
		358
走馬灯 episode	巫女との同居	
?		365
走馬灯 episode	巫女の強さ	
373		
走馬灯 episode	巫女の足	

397	走馬灯 episode	392	走馬灯 episode	385	走馬灯 episode	378
	里 の 変 化		家 事 力		神 社 へ	

1
一話 予兆

1
あの日、私は最愛の姉を失った。
1

1
その日から数百年経った秋、私は何時ものように家の前の掃除をしていた。
1

「そろそろ、夕食の準備でもするか」

その時、遠くに厚い雲が見えた。

調理場に行き、冷蔵庫から食材を出し、鍋を火にかけ、野菜やら肉やらをカットしていき鍋に入れ、味噌を溶いて蓋を乗せた。

次は、と考えているその時、

ガシャン!!

「ギニャーッー」

橙の叫び声が聞こえた。

急いで部屋の中に入ると慌てた様子の橙とすれ違った。

振り返ると走り去っていく橙が見え、手に巻き物を持っていた。

「待ちなさい！橙！その巻き物は……」

言う頃にはもう見えなくなっていた。

追いかけてようと家のドアを開けると、ガシヤンという音を思い出す。

部屋の中を見ると、花が生けてあった花瓶が割れていた。

ため息をつき、割れた破片を片付けようと屈むと、

「藍、夕食は出来ているのかしら？」

急いで振り向くと、今にもお腹が空いたと言わんばかりの表情で立っている八雲 紫

が立っていた。

「申し訳ありません。急いで準備しますので少々お待ちください」

「そう 急いでちょうだい。」

私は急いでガラスの破片を片付け調理場に行った。

紫様がテーブルに座ると、私は食事をテーブルに並べ、私と紫様は夕食を食べ始めた。

「そういうえば藍、橙はどうしたの？」

「あつ！紫様、橙がああ巻き物を持って行ってしまつて、追いかけてと思ったのです

が、もう見えなくなつて」

「そう。あとで橙を探しておくわ」

「お願いします。」

夕食を食べ終わり片付けをして、布団に入り目を閉じた。

▽▽▽

藍様の壺割つちやつたー！

どうしよう

どうしよう

あ

藍様が来るー

どうしよう

に、逃げろー

走り出すと藍様とすれ違いざま、何か叫んでいたようだが今の私は立ち止まって聞く

余裕はない。

家のドアを勢いよく開け走って行った。

家まででかなり時間が経った。

森を走っている時手に巻き物を持っていることに気がついた。
無我夢中で持っていた事にも気付かなかつたのだろう。

立ち止まって開くと細かい字でたくさん文字が書いてあった。

「なんて書いてあるんだろう？えつと…」

読もうとすると雨が降ってきた。

急いで巻き物を閉じ走って雨宿りできるところはないかと探す。

いつの間にか人里の寺子屋に着いていた。

そこには雨が止むのを窓から見ていた慧音の姿があった。

私に気付いたのか窓を開け声をかけてきた。

「おい橙！ずぶ濡れじゃないか！早く中へ入れ」

私は寺子屋に入って慧音の所に行くと、慧音が優しくタオルで濡れた髪を拭いてくれた。それが気持ちよくて目を細めている。

「なあ橙、何を急いでいたんだ？それと その手に持っているのはなんだ？」

「あつえつと 家の花瓶を割っちゃって急いで逃げている時に雨が降ってきて、それでここに着いたの」

「その巻き物を私に見せてくれないか？」

巻き物を渡し、慧音がひろげ読んでいくと、だんだんと顔が険しい物へと変わった。

「橙、これは藍が持っていたのか？」

「分かんない。走っている時に持っていることに気づいたから」

「そうか わかった。明日、藍をここに連れてきてくれ話したいことがあるんだ。霊夢と待っているから」

私は頷いて、マヨヒガの家に帰った。



夜明け前に目が覚める。

ゆつくりと身体を起こし、寝巻きから服を着替えて朝食の準備をしに調理場に向かう。

た。

準備も終わり、あとは食べるだけという時
家のドアが叩かれた。

誰かな？こんな時間に

ドアを開けると、申し訳なさそうに立っている橙がいた。

「昨日はごめんなさい。」

「……早く中に入りなさい。ご飯食べよ」

「はい」

さつきまでの顔から、パアアと笑顔になり居間に走って行った。

「そういうえば橙、巻き物はどうしたの？」

「えっと、走っている時に雨降ってきたので、急いで走ったら寺子屋について、慧音先生
が居たので見せたら藍様を連れてきて、話したいことがあるって言っていました。」

「おはよう。藍、ご飯は？」

その時、のそのそと紫様が起きて来た。

「おはようございます紫様。今準備をいたしますので」

私はテーブルに食事を並べた。

「そうだ橙。花瓶の事は謝ったの？」

「はい」

「そう、巻き物は？」

「それは私が説明します。」

そこで橙から聞いたことを紫様に話した。

食事を片付け、橙と紫様と寺子屋に向かった。

二話 悲劇

寺子屋に着くと慧音と霊夢が真剣な表情で座っていた。

椅子に座り慧音に向かう。

「巻き物の事で話して欲しいことが」

「空姉の事か」

「その人の話はいいから、異変の話聞かせなさい。」

「やだわー 霊夢。そんなにカッカしないの落ち着きなさい。」

「では私は、空姉の過去をお話します。」



人里から遠い所にある深い深い森の奥、狐の都と呼ばれる所に『戦狐』と呼ばれる戦

鬪部隊があつた。

その隊の中の零番隊長の父と壱番隊長の母の間に産まれた私は『空』と名付けられた。

二つの隊の隊長の間に生まれたことで、幼い頃から幼馴染みの雪と厳しい軍事訓練を施された。

ちなみに雪の母親は弐番隊の隊長だ。

成長していくと空は、戦闘の天才的センスが目覚め毛の色もピンクっぽい色から、美しい白銀に変わっていた。

雪は回復に特化していて、どんな怪我也直すと言われるほどだった。

毛の色は純白に変わっていた。

その部隊で二人が揃えばどんな戦でも秒で終わるといわれるほどだった。

もちろん「九尾の狐」と言うくらいなので、変化の術も得意中の得意だ。

「おい！空、雪、行くぞ」

「はい ただいま」

こんな会話をして戦に出かける、帰ってきて食事をして、寝る。

こんな生活がある日ガラリと変わった。

ある大きな戦が終わった。

相手もかなりの手練れだったので仲間も負傷する人が多かった。

当然 死者も出た。

これでもかと言うくらい疲れた私は、屋敷に着くと自分の布団に倒れこんだ。

その時、

屋敷の中に元気な声が響いた。

慌てて母の部屋に走っていくと、母が赤ん坊を抱いていた。

その隣には、今にも泣きそうな父の姿があった。

「何をしている。突っ立ってないで早く中に来なさい。」

「名前は『天』よ。抱っこしてみろ？」

「……いい、いい」

聞かれた瞬間私は抱くのを躊躇った。

なぜなら、私のような敵の血を浴びるように戦っている、その血で穢したこの手で、まだ産まれてから数分の純粋な赤ん坊に触ってもいいのだろうかと思ってしまった。

「抱かせて貰え」

私が抱くと天はキャツキャと笑うので、私も嬉しくなり自然と戦の疲れも忘れて、笑顔になっていった。

私はここで誓った。

この子を悲しませるような事を、この子の前で悲しい顔をするのを、辛い思いをさせる事を絶対にしないと。

それからは、戦好きの父も戦はあまりしなくなり、零番隊隊長に当時十歳の私が任命させられ私が戦を任されるようになった。

それから6年後、天は屋敷の外で走り回ったり、湖の周りで遊ぶようになった。そのうちに父に黙って人里の近くまで行くようになった。

16歳になった私は、天の遊びに付き合わされていた。

人里で天は同じような背丈の人間の子供と遊ぶようになった。

勿論、自分が狐だと悟られないように人の姿になって。

私は、紺色の着物を着て自分で言うのもなんだが《絶世の美女》に姿を変え、遊んでいるところが見える近くの家の壁にもたれて見ていた。天は幼い子供に姿を変えた。

楽しそうに遊んでいるようだったが、周りの大人は目が違っていた。

まるで「物」を見ているような目で天を見ていた。それに耐え切れなかった私は天のもとへ歩き出していた。

「帰るよー！」

そう一言告げ森へ早足で歩いていった。

その後ろを小さな足で置いていかれるまいとちよこまかと付いてきた。

「ねえねえ。なんで帰るの？まだ明るいよもつとあの子達と遊びたいのに、かえる…」
「お前はわからなかったのか！周りの大人の目を！あの目は私達が人では無いと悟っている目だ。もう人とは関わるな人間は私達、狐の敵だ!!」

天の言葉を遮り私は怒鳴った。

その言葉を聞いて天は泣きながら森の奥へと走って行った。

私は追っては行かなかった。

この後の悲劇を微塵も想像していなかった。

天と分かれた後、私は都に戻り次の戦の準備をしていた。

武器を磨き、お札をまとめ、火薬を詰める。

そこに心配そうな顔をした母が部屋に入ってきた。

「あなた天と一緒に遊んでいたわよね」

「先程まではいっしょでした？それが何か？先に帰っているのではないのですか？」

「それがどこにも見当たらないのです」

その言葉を聞いて嫌な予感が頭を過る。

私はその瞬間、母の横を神速で走り戦狐の司令塔へ向かった。

「おい！今すぐ搜索隊を出し天を探し出せ！これは一刻を争ういそげ!!」

「ですが、搜索隊は次の戦の相手の所に出ています」

「じゃあ零番隊から参番隊まで全てを出し搜索に当たらせる！」

そう指示を出し、私はなんの武装もせず森へと入って行った。

「天！ 天！ 何処にいる天！いるなら返事をしろ！」

探し始めて数時間経った頃だろうか

前方から人間の声が聞こえてきた。

人がいる所を避けようと体を右に向けると人の話している内容が聞こえてきた。

「これで俺たちは、大金持ちだ！こんな珍しい生き物！この毛皮で着物を作れば高く売れるな」

「ああ、この尻尾を切り取ればいくらになるかなあ」

「なんで！ 助けようとしただけなのに！」

その言葉を聞いた時私の中で何かが切れた。

瞬間、私は怒りに任せてその人間を自身の爪や牙で切り刻み、返り血を浴び白銀の毛は、深紅色に染まっていた。

体の大きい方の人間は四肢を切り取り、もう一人は虫の息でいずれ死ぬだろうと思いついて放つておいた。それを確認すると私は天の方へ歩いた。

「帰るよ天」

「空ね……え……尻尾、が……」

怯えたように喋っている天を不思議に思い、後ろを振り向く。

私の回りのだけが血の海になっていた。

その瞬間、背中から尻尾にかけて激痛が走った。

自分の尻尾が一本切られていた。

苦痛に顔を歪めるが天が産まれた時、天の前では笑顔でいようと決めていたので天に
笑顔を向け、

「帰るよ」

天の右手を左手で優しくつなぎ、空いている右手で体の大きい方の人間の頭を痛みを
堪えるかのように強くつかみ、引きずりながら歩く。

天には背を向け、顔を見られないように都へと向かった。

都に着くと母と父が待っていて、私達が見えると走ってきた。

「何処に行っていた。怪我は…!」

「どうしたっ…」

二人とも私を見ると動きが止まった。止まった理由は明らかだったので、そんな二人
を安心させようと言葉を発した。

「ただいま戻りました。私はともかく、天には怪我はありません。そしてこいつが天を
さらい、売りさばこうとしていたので切り刻みました。」

「さらおうとしていた者の事はどうでもいい。お前尻尾が八つしかないのだが」
私は天の手を放し屋敷へと歩き出した。

「待ちなさい！私はともかく」ではありません！天に怪我が無かつたのは幸いではありませんが、あなたの怪我はどうなのですか！今すぐ雪のもとへ行きなさい！」

「ですが…私も戦の準備をしなくてはいけないので、し、失礼、し…ま…」

その時私の足は限界を迎え仰向けに倒れこんだ。

視界がぼやけ、今にも閉じそうな目に何かを叫んでいる両親の顔が映った。

その時意識を手放した。

三話 人助け？

天視点

――

「お前はわからなかったのか！周りの大人の瞳を！あの瞳は私達が人では無いと悟っている瞳だ。もう人とは関わるな人間は私達、狐の敵だ!!」

――

――

いつもは優しい空姉が大声を出したので、びっくりして走り出した。

酷いこと言う空姉なんか大嫌い。

そう思ったものの何処へ行けばいいかなんてわからなかった。

森の中は暗く夜のようにだった。

「う、うわああああああ」

「助けてくれ――」

「あははははは あは美味しそうな人間ね。私、丁度お腹空いてたの」

私はすぐに妖怪が人間を襲っているんだと思い助けようと走った。

その場には二人の人間と、金髪の子がいた。その金髪の子に私は切りかかった。

それに驚いたのか後方に飛び暗い森の奥へと消えていった。

「大丈夫ですか?」

「あは…はは。妖怪に襲われて死にそうになったかいはあるぜ」

「そうだなあ。良い売りもんが見つかったんだからな」

「え…」

人間が一步ずつ私の方に近づいて来たので、無意識のうちに一步下がる、

その刹那

バキバキ ボキ

「キヤー!」

私は落とし穴に落ちた。

気付いたら網の中に入っていたのだ。

それを見ていた人間が小声で何か言っているのを見て私は叫ぶ

「なんで!!? 助けようとしただけなのに!」

その瞬間、私の視界が真っ赤に染り、怒り狂ったように人間を切り刻む空姉の姿が目

に入った。

「才前ヲ、私ノ妹ニ何ヲシヨウトシタ？ 売リサバク？ 何ヲフザケタ事ヲ？」

その顔は憎悪に満ちていた。

口調は冷静だが行動は異常。

それからあつという間に、1人は動かなくなり、もう1人はピクピクと痙攣しているようだった。

「帰るよ天」

そう言われ立ち上がろうと顔を上げると、目に入ってきた光景に言葉を一瞬失った。

空姉の足元に広がる血の海と、少し離れた所にある本来ならば空姉の腰の辺りに生えているはずの尻尾だった。

「空ね……え……尻尾が……」

それを伝えても空姉は、私に向けている笑顔を崩さなかった。

そのまま手を引かれ都に歩いて向かった。

私達が歩いた後は一筋の血痕が続いてた。

その跡が空姉の物なのか、人間の物なのかはわからない。

それがなぜか怖く感じて握っている手の力を強めると、その気持ち伝わったのか優しく握り返してくれた。

都に着くと真つ先に母が飛びついてきた。

「何処に行つてたの!でもよかった。」

「でも空姉が…」

そう言うと、空姉は私の手を放し歩き出してた。そんな空姉に母は怒鳴つてた。

何を言っているのかはわからなかったが、私はただ立っていることしかできなかつた。

最愛の姉が目の前で倒れたとしても。



「ちよつと待ちなさい。今の話を聞くとあんたの姉は…」

「藍しやまく。眠くなって来ました。」

いつの間にか夜になっていた。

どうりで橙が眠くなるわけだ。

「もう遅いし、この話の続きはまた後日にしましょうか。」

「そうだな。ではまた」

そんな会話をして私達は分かれた。

家までの間は無言。

家に着くと、私は縁側に腰掛けた。

紫様も座つて二人で月を見上げていた。

その時なぜか大粒の涙が流れてきた。

「うう……」

止めようと思つても自然に流れてくるのだつた。

それを見ていた紫は、ただ黙つて背中をさすつてくれた。

そんな二人を少し離れている所で、今にも眠気に負けそうな橙が見ていた。

その門は無残に壊されていた。

中庭には大きな氷の柱が突き出っていて、近くにある池は赤色に変わって、その周りには狐の兵士が倒れていた。

屋敷の中に入って襖を開けると、大きな氷柱で壁に貼り付けのような状態にいる狐がいた。

その時、藍が膝から崩れ落ち泣き叫んだ。

「いやああアアアアアアアア!!!」

「落ち着きなさい、藍。」

永琳は急いで壁から降ろし脈を確かめる。

「まだ息があるわ、これならなんとか治せるかも。」

永琳が薬を飲ませていくと、傷がゆっくりと塞がっていった。

少ししたら荒かった呼吸もゆっくりになり、意識も戻った。

「あ 貴方は？天！良かった」

その人は藍を見るなり首に抱きつく。

「母上も、何があつたのですか？母上をこんな目に合わせたやつは誰ですか。私が塵にしてください。教えてください。」

「あ…貴方には、無理よ。」

最初何かを言おうと口を開くも、半ば諦めたように目を伏せる。

「何故ですか？」

「まあ落ち着きなさい。彼女が貴方の母親か、初めまして、私八雲紫と申します。」

「まあ、この子がいつもお世話になっております。この子の母でございます。」

「ちよつと、そんなことしないで誰にやられたか言いなさい。ここまで強い『氣』は初めてよ」

「これは……。空が」

「空姉が！なんでそんな人じゃなかったのに。そうだ雪さんは何処に」

「空を止めに湖の方に行つたわ。でも、貴方には無理よ。あの人が倒せなかったんだもの」

「まさか父上までも……雪さん！」

藍は部屋から飛び出しひとり走って行く。

紫達は急いで藍の後を追った。

母には万が一の時のために慧音についてもらつて、2人を置き、湖に向かった。

霧が深く、ゆつくりと歩くと二人の人影が浮かび上がってきた。

一人は立っていて、もう一人は地面に座り込みもう一人の方を見上げていた。

「ちよつとあなた達、聞きたい事が」

その声に気付いたのか一人が近づいてきた

それは、

足を引きずるように這いながら近づいてくる所々乱れた着物をまとった雪だった。

「雪さん！大丈夫ですか？」

「に……逃げろ……藍」

その声は掠れていて、やつと聞き取れるほどだった。

そのまま、雪は前のめりに倒れた。

背中には鋭い刃物で抉られたような傷があり、その部分は赤黒く、所々に白い部分が

見えていた。

「雪さん！雪さん！」

「この怪我は、これを飲ませれば……藍？」

「雪さんは助かるんですよね？」

「傷が……再生しない?!」

「まさか！」

全員が残った人影に目を向けると、それを待っていたかのように、深くかかっていた霧が晴れて、もう一つの人影がはつきりと見えてきた。

その場にいた全員が息を飲んだ。

今まで倒してきた者達の返り血を浴び、深紅色の着物をまとって、狂ったような笑顔
を顔に貼り付けている空の姿があった。

空の後ろには黒い靄がかかっていた。

その姿を見た瞬間、全員の方が固まったように動かなくなった。

その時、こつちに気づいたのか空が藍に近づいてきた。

「て……………ん？」

空は何かを求めるように手を伸ばしてきた。

藍は恐ろしい声を発する姉から離れようと足を動かすも、目は空の異様な表情に釘付
けになっていた。

なぜなら、目の前の姉である空が狂ったような笑顔を見せて、でもなぜか笑いながら
涙を流していたのだ。

「空…姉？」

藍が伸ばされた手をとろうと自らの手を伸ばす。

キイイイイイイイイイイ

高い音が響く。

その場にいる全員が耳をふさぐと、空が笑い始め、何かに操られるように狐の都の門

に向かつて飛び出した。

その今にも見えなくなりそうな背中を追おうとする。

紫に腕を掴まれた。

「放してください紫様！今追いかけないと」

「駄目よ。」

「何故ですか今見失ったらまたあの時みたいにな…」

「藍さん。雪さんを永遠亭に運ぶわ。付き添ってあげて。」

「でも空姉は?…」

「付き添ってあげなさい。家や橙のことは任せてちょうだい。」

「急がないと手遅れになるかもしれない」

雪は苦しうに呻いていたと思ったら、激しく咳き込み、抑えていた手のひらは赤く

染まっていた。

「任せて」

「私は神社に帰って色々準備してるわ」

「母上は?!」

「私が連れて行くわ」

そう言い紫は持っていた扇子で目の前を切るとそこに『スキマ』が現れた。

そこに入るとあつという間に永遠亭の近くに着いた。

私は雪さんを支え、永遠亭へと急いだ。

後ろを振り向くと、あの時のように一筋の血痕が続いていた。

思い出さないように首を左右に振って、前を向きなおした。

門を掃除していた鈴仙が慌てたようにこちらに走ってきた。

「師匠！その方は？」

「あとで話すわ。急いで部屋の準備をしてちょうだい。」

永林が指示すると、鈴仙が永遠亭に入っていった。それに続いて私も入った。

部屋に着くと永林が真剣な眼差しでこう言った。

「藍さん。部屋の外で待っていてくれるかしら。」

「分かりました。でも、雪さんは助かるんですよね?！」

その質問には答えてくれなかった。

「大丈夫ですよ。師匠ならなんとか」

「でも、もしもの事があつたら」

「藍さん…信じて」

そう言うのと、永琳と鈴仙は部屋に入っていき扉を閉めた。

一人なった私は、心配と恐怖で手足が震えて泣き叫びそうになった。

少しして扉が開き、準備を終わらせたのであろう鈴仙が部屋から出てきて隣にくる。

雪さんの苦しそうな声や、叫び声が聞こえてきて、いてもたってもいられなくなった時、鈴仙が肩に手をかける。

「一人ではない」そんな安心感で手足の震えは止まり、私は祈るように扉を見つめた。隣にいる鈴仙が頼もしく思えた。

鈴仙視点

さつきまでは晴天だったはずの空がいつの間にかどんよとした曇り空になっている。

「そろそろ掃除も終わらせるか…」

そう呟くと前方にスキマが開いた。

目を凝らして見ると、師匠と藍さんが走っていた。

私は急いで駆け寄って事情を聞いた。

師匠はまだ落ち着いてたのだが、藍さんの焦りようは今にも暴れだしそうな勢いだ。

師匠の指示を聞き私は急いで準備をした。

扉を開けると師匠が部屋に入ってきた。

応急処置が終わると師匠が私に言った。

「治療は私だけでいいわ。あなたは、藍さんのそばにいてあげなさい。目の前で家族が倒れて重傷だなんて、ショックも相当なものよ。だから行きなさい」

「でも……わかりました。何かあつたららお呼び下さい。」

私は部屋を出た。

最初に目に入ったのは、向かいの壁に寄りかかり今にも倒れそうに震えている藍さん、次に耳に入ったのは、苦しそうな声だったり叫び声だった。

「大丈夫ですよ」と声をかけようとしたが、そんな藍さんを見てなぜか黙って隣に並んだ。

藍さんに私は近づき、少しでも安心させようと思い、藍さんの肩に手を置いた。

真剣な表情で扉を見つめる藍さんに何もすることができず、ただ隣にいることしかできなかつた。

五話 夢現つ

目を開けると見たこともない空間にいた。

「……は？どこだ？」

真つ暗で一寸先も見えなかった。

辺りを見回すと暗闇の中に青白い筋が見え、私はそれに向かって歩いた。

その筋を覗き込むと、ベットに横になる雪さんの姿が見え、その周りに父と母が座つてた。

母は泣き崩れ、父は寂しそうな笑顔を雪さんに向けた。

父と雪さんはスウーと透けていった。

その時、母は立ち上がり自身の首を搔つ切つて倒れた。

すると、母が立ち上がりスウーと透け父、雪さん、母は私に近づいてきた。

その瞬間、筋が消えてしまった。

私はまた辺りを見回すと少し離れた場所に赤い筋があった。

私はそれに向かって走った。

それを覗くと、辺り一面が真っ赤に染まり沢山の死体が転がっていた。

その中に、血の雨を浴びて笑っている空姉と私の姿があった。

「空姉」

声をかけるも聞こえてないようだ。

すると、空姉が笑いながらこちらに近づいてきて、後ろで藍が陣を組み背後には魔法陣が出現していた。

私はいつの間にか筋の中に入っていることに気がついた。

空姉が一步ずつ近づいてきていた。

後ずさると後ろから叫び声が聞こえてきた

ハッと後ろを振り向くと血だらけの紫がいた。

「もう止めて！あなたは一体なんなの！」

「う……うるさい！そこ、をどけ」

「いやよ！絶対にどかない。私にとって大切な……」

「紫様逃げて！……え？」

私は紫の後ろにいる者達を見て声が出なくなり、その場に座り込んでしまった。

そこには、動かないの霊夢、咲夜、橙、母上、雪さんの姿があった。

「あの時わたしが……」

「その話をするなああ！」

紫が空姉に捕まり、空姉が紫の首に触れ、腕を振り上げると紫の首が……

「—————」
紫が言葉にならない悲鳴をあげた。

「紫様あああああああ!!!」

自分の声で目を覚ました。

「藍さん?!大丈夫ですか?」

声のする方向に顔を向けるとビツクリしたような表情の鈴仙がいた。

「とてもうなされていたようですが」

「いえ、大丈夫ですよ。ところで私は?」

「いつの間にか廊下で寝てしまっていたので、空いていた近くの部屋に運ばせて頂きました。服の着替え持ってきたので着替えて下さい。そのままだと風邪を引いてしまうかもしれないので、着替えが終わったら呼んでください。」

そう言われて汗だくだったことに気づいた。

待たせるのも悪いと思い、着替えて鈴仙と共に永琳のところに行つた。

「あ！起きたのね、大丈夫だった？あまりにも酷くうなされすぎて熱を出して」

「すいません。あの、雪さんは大丈夫なんですよね」

「ええ、一命は取り留めたわ。でも…」

「でも？」

「傷に特殊な術がかけてられていて、その術が内臓や脳、神経まで及んでいたの。それで何かしらの後遺症が残ってしまったかもしれないの。」

「そんな」

「でも、記憶には影響はないと思うけど、いつ意識が戻るかはわからない。いったんあなたは帰ったほうがいいわ。紫も心配しているかもしれないし」

「分かりました。何かあったら教えてくださいいなね。」

「お送りします。」

鈴仙と一緒に永遠亭を出た。

竹林を抜けると慧音が妹紅と話していた。

「藍！雪さんは？」

「ご心配おかけしました。まだ意識が戻らないみたいです。」

そこから鈴仙と分かれて、家に向かった。

家に着くと縁側に座っている橙の姿が見えてきて、なんだか懐かしい気がしてきた。私に気が付いた橙が走ってくる。

「藍様ーどこに行つてたんですか？昨日からどこにもいなくて、帰つてきたと思つたら紫様ともうひとり藍様にそっくり尻尾の人が来て」

ん…？私にそっくりな尻尾？ まさか！

「あつ、おかえりなさい藍。あなた本当に良い主人に出会つたのね」

そこには笑顔で掃除をしている母がいた。

「母上?!なんでここに？怪我は大丈夫なのですか？」

「怪我？ああそういえば、1日で治つてしまいましたよ。」

私はそれを聞いて安心してしまい、地面に手をつき座り込んだ。

その様子を橙は驚いた顔で見ている、そんな橙に私は笑顔を向けた。

そこから私は人里において食材を買い、ついでに博麗神社に向かい、永遠亭でのことを話した。

「じゃあ、その雪が意識を取り戻したら私にも教えなさい。聞きたいことがタツプリとあるんだから」

そのまま博麗神社を後にする。

家に着いて夕食の準備を始めた。

母と並んで調理場に立つのは久しぶりだったので、なんだか嬉しかった。食事の準備が出来たと同時に紫が帰ってきた。

「紫様おかえりなさいませ。」

「藍、大丈夫なのね。よかった」

私達は久々のみんな揃つての食事を始めた。

そこで永遠亭であつたことを話すと、聞いていた母は泣きそうになつてた。その後私は片付けを済まして布団に入ると、疲れと眠気が襲ってきた。

それから数週間だつたある夜。

いつも通り布団に入りウトウトしてきた。

ダンダンダン!!

「藍さん! 藍さん!」

誰かが家のドアを叩いている。

なんだこんな時間に

やっとウトウトしかけていたのに

今にも瞑つてしまいそうな目を擦りながらドアを開けた。

そこには、息を切らして立っている鈴仙がいた。

「藍さん！雪さんが、意識を取り戻しました。すぐに伝えたほうが良いと思って」

「本当に?!ちよつと待つていて下さい。」

そう鈴仙に告げると私は部屋に走った。

半ば乱暴に襖を開けて紫様と母を叩き起こし、橙をおぶつて、永遠亭と急いだ。

永遠亭に着くと私達は雪さんの部屋へと走った。

扉を開けると、窓から月を見上げている雪さんがいた。

私は飛びつく様に雪さんの元へ。

その時雪さんの身体が全身包帯で巻かれていることに気づいた。

「そんなに慌ててどうしたの？少し落ち着きなさい。」

誰をも魅了する透き通った声でそういった。

永遠亭についてやっと起きた橙と鈴仙はその声に聞き惚れていてペタンと床に座り

込んだ。

その姿を見て雪さんはクスクスとわらった。

その儂げな姿を見て橙と鈴仙は倒れてしまった。

さすがに焦ったのか雪さんはベッドから降りようとすると、苦痛に顔を歪めた

「つた！くううう…ゲホッゲホッ」

「大丈夫ですか?!」

苦しそうに咳き込んだ雪の手は赤黒く染まっていた。

そこに永琳が沢山の薬を持ってきた。

それを雪に飲ませると少しラクになったのだろう、咳が治まり呼吸もゆっくりになった。

「雪さん無理しないで下さい」

「ゴメンゴメン。ハハハ」

雪さんは乾いた笑顔を見せた。

それを見て私はなぜか胸が痛くなり涙が流れてきた。

雪さんは私の頬に触れ親指で涙をぬぐう。

「そんな悲しい顔をするな。藍は笑顔が一番似合うぞ！笑え笑え。」

「うん。うう…」

雪さんは泣くなど言いながら私の頭を撫でてくれた。

手からは包帯で覆われてはいたが、とても温かく感じた。

「包帯かえるわね」

それを見ていた永琳が雪の手をとって、丁寧に血で汚れた包帯を取っていった。

その包帯で覆われていた雪の手が火傷を負ったように赤くただれていた。

それを見て私は、思わず目をそらしてしまった。

「雪さん」

「ん？どした？ほらまた暗い顔になって。だから笑ってって藍が泣くと私も悲しくなってくるから」

雪はそういつて紫に手招きをした。

「もう良いのかしら、感動の再会は」

「ええもう十分よ。藍、おばさん、倒れている二人を運んであげて、ずっと床に寝かせているのはかわいそうよ。」

「藍。少し席を外してくれる？その橙のこともあることだし。」

私と母は倒れている橙と鈴仙を抱えて部屋を出た。



上半身に走る何度も刀で斬られるような激痛で目が覚めた。

その時の私はとても息が荒く、自分で自分を落ち着かせようと深呼吸をするも、あの時の空の狂った笑いが脳裏にべったりと残っていて、思い出すだけで手が激しく震え、頭を鈍器で何度も殴られているような頭痛がする。

ガチャ

そこに、誰かが入ってきた。

私は一瞬身構えるも、はらの奥底からこみ上げてくる吐き気に手で口元を抑える。

「大丈夫ですか!？」

部屋に入ってきたその兔が、私の背中に手を当てて優しくさすってくれた。

「ゴメンなさい、大丈夫よ。あなたは？」

「私、鈴仙・優曇華院・イナバと言います。鈴仙と呼んでください。今師匠を呼んできます。待っていてください」

そういつて鈴仙は走って行ってしまった。

一人になった私は「名前長つ!」とか思いながら、窓から見える綺麗な満月を眺めていた。

「ああ起きたのね。よかつたどこか痛いところは？今鈴仙に藍のところに行かせたから後少しでくると思うわ」

「私は？今まで何を」

「空との戦闘の後、気を失つてこの永遠亭に運んできたのよ。その間藍は心配して熱を出したり…あなたよっぽど大切に思われているのね」

その話を聞いて私はなんだか嬉しくなった。

あんなに小さくていつも空の後ろについてきていたあの藍が……

私は急に襲ってきた吐き気に口を抑える。

手は血で汚れていてまたあの激痛が走った。

「ゲホッ」

「少し待っていて、薬を持ってくるから」

永琳が部屋を出るのと入れ違いに鈴仙と藍が入ってきて、藍は勢いよく私の所に駆け寄ってきた。

「そんなに慌ててどうしたの？少し落ち着きなさい。」

藍の後ろにいた鈴仙と小さな化け猫の二人が床に座り込んだ。

どうしてかは分からなかったけど、その姿が面白くて失礼と分かっても、クスクスと笑ってしまった。

バタン

とうとう倒れてしまった。

なぜ倒れたのかはわからなかったけど、私はびっくりして、ベットから降りようとすると吐き気と激痛がこみ上げてきた。

私が呻くと藍が心配そうな顔をしていた。

そこに、永琳が薬を持ってきてくれてその薬を飲んだ。

そしたら嘘のようにあのひどい吐き気が消えた。

この薬めっちゃ効くやん！

「雪さん無理しないでください」

私はそんな藍に乾いた笑顔を見せることしかできない。

激痛に耐えていつものように笑うことができないほど私は強くない。

私は倒れた二人を運んであげると藍とおばさんに頼み、紫と二人にしてもらった。

「つくゲホツゲホツゲホツ」

「大丈夫？ そんなにひどかったのね、さっきはそんな風に見えなかったけど。」

我慢していた咳が止まらない。

「ええ。ゲホツ、藍にこんな姿見せられないもの。ゲホツゲホツ、あなたが藍の主人なの？ 一つお願いがあるのだけど」

「何？遠慮なく言ってちょうだい。」

「藍を空に近づけないようにして欲しいの、お願い」

「え？それはなぜ」

「それは…」

ガチャ

藍が戻ってきた。

藍を見た瞬間私は笑顔を作った。

永琳がそろそろ休んだほうがいいと、紫と藍を帰るように言った。

私はまた深い眠りにつこうと横になり目を閉じると、ちょうど睡魔がやってきた。

私はナイスタイミングと思って、一人でクスツと笑った。

六話 看病

私は雪さんのところに残った。

理由は心配だからというよりも、私自身が雪さんのそばにいたかったから。

部屋に入ると雪さんがすうすうと寝息を立てていた。

私はそのベットの横にあつた椅子に座り、雪さんの寝顔を眺めていた。

そうしていると何だか自分も眠くなつてきて、そのまま寝てしまった。

次の朝、窓の外を見るとまだ薄暗く、雪さんはまだ寝ているようだ。
「雪さん」

私は雪さんを見てなぜか心が痛くなつてきた。

こんなに優しくて家族思いの雪さんを、こんな目にあわせるなんて。姉に対する怒りが沸々と湧いてきて勢いよく立ち上がった。

ガタン！

「んんん藍どした？」

どうやら雪さんを起こしてしまっただけらしい。

「ゴメンなさい。起こしちゃいました？」

「良いのよ、起きるの手伝ってくれる」

この声。

気を抜いて聞いたら私も倒れてしまうなど思いながら、雪さんの背中に手を当ててゆっくりと起こした。

すると、永琳が部屋に入ってきた。

「おはよう。よく眠れたかしら？今鈴仙に食事を持ってきてもらうから、待っていて」

鈴仙が食事を持って来ると、雪さんはパクパクと食べ始めた。

食欲だけはあるんだな、と考えてしまいフフと笑った。

「何笑ってるの？食べないのなら……貰っちゃうぞ！おらっ！」

「わ！何するんですか。雪さんこそ食べないのならもらいますよ！」

雪さんと一緒に食事をしていて、感じることもある。

楽しいとか言うよりもそれは、私の前で『から元気』を出しているような感じだ。食べ終わり永琳がやって来て、何かの検査をするので藍さんは部屋の外へだそうだ。一緒にいても良いじゃないと思ったが、困らせてはいけないと思い素直に従った。

藍が部屋から出て永琳が口を開いた。

「じゃあ検査をするわ。簡単な検査だからじゃあ行くわよ、一つ目

くくくくく

じゃあ最後に、今痛いところはどこ？具体的に教えて」

「えっと、胴体、頭が時々、あと腕かしら？」

「え？」

「どうしたの？何かおかしいこと言ったかしら。」

「いえ、本当にそれだけなの？他は？」

「今言った所だけよ」

「そんな……藍さんもう良いわよ」

永琳が藍を呼ぶと藍が部屋に入ってきた。



私が部屋に入ると、なんだか重苦しい空気が流れていた。

座ると永琳がおもい口をひらいた。

「藍さん雪さん、落ち着いて聞いてね。前言っていたかもしれないけど、傷が特殊で後遺症が残るかもって言ったわよね。」

「それが？」

「その後遺症で雪さんは今……下半身、つまり足が全く動かせない状態なの」

「そんな、なん」

「そんな、なんで？嫌よ！もう歩けないなんて！これから空も元に戻さないといけない

のに、都の子供達と、また鬼ごっこして遊ぼうねって約束したのに。永琳さん、治せるんですよね？もう一度歩けますよね」

藍の言葉にかぶせるように雪は叫ぶ。

最後の方は永琳に祈るように言葉を発する。

「脳に術がかかっている、今は足だけだけど、いずれは全身が麻痺して寝たきりになる可能性も」

「どうしてそんなことに」

「そんなの嫌！嫌嫌嫌！そんなものなら、こんな空を助けにもいけない、歩けない足なんて……切り捨ててやる！」

雪さんはそう言って自分にかけていた布団をはぎ、近くにあったナイフで自分の足に向けてナイフの切っ先を何度も何度も突き立てた。

「雪さん!!止めて!」

雪の周りは真っ赤に染まっていた。

藍や永琳にも返り血がかかっていた。でも戦狐の再生能力は異常なほどに優れている。特に雪は素晴らしくたちまち傷は塞がっていった。

「うううう。……」までしても何も感じないなんて」

雪さんはそう言って床にナイフを投げ、泣き崩れてしまった。

「あくまで『可能性』の話よ」

「え？」

「じゃあ、治す方法が？」

「あるにはあるんだけど、方法も方法で……この方法を使うとすると、雪さんか、空のどちらか一方が命を落とすかもしれないの」

永琳さんの衝撃的な告白で私達は究極の選択をしないとイケない。

「永琳さん、空を助けて。私はこのまま死んでもいいから」

雪さんが信じられないことを口にした。

「何言ってるんですか?!死んでもいいなんて、そんなに簡単に言わないで!!」

「藍」

自分でもこんなに大きな声が出るなんてビックリした。

「藍さま?」

扉を見ると、橙が顔を覗かせていた。

「橙どうして?」

橙が部屋に静かに入ってきた。

手には重箱を持っていて、目は大きく開かれていて、雪さんの周りが真っ赤なのに驚いているようだ。

雪さんは橙に笑顔を向け、橙に手招きをした。

「あなた、橙っていう名前なのね。おいで、その手に持っているのは何？」

橙は私に重箱をわたすと頬を赤らめて私の後ろに隠れた。

なぜ橙が恥ずかしがっているのか分からなかったが、重箱を開けると少し形が崩れる稲荷寿司が入っていた。

「これ橙が作ったの？」

「うん。紫様達といっしょに」

そうか、頑張って作ったんだろうな。

大変だっただろうな。

怪我しなかっただろうか？

ん？なーんか重箱が軽くなったような気が…

「これ以外といけるわね」

橙が頑張って作っている姿を想像している隙に、雪さんが稲荷寿司をパクパクと食べていた。

しかも、もう半分以上も無くなっているし。

「ちよつと雪さん何食べてるんですか、さっき食べたばかりですよね。

てかどんだけ食べるんですか？太りますよ」

「お稲荷さん食べて太るんだったら本望ですよ。ふー食べた食べた。橙ちゃん」
「なに？」

「ごちそうさまでした。美味しかったよ」

橙は雪に褒められてとても嬉しそうだ。

ふと私は雪さんの事を見ると首元に汗が流れていた。

「この部屋は暑くも寒くもなくちょうど良いのになぜだろう？」

「あの雪さん。汗かいてますけど暑いんですか？窓開けましょうか？」

「えっ？あ、だ、大丈夫よ。なんでもないわ。どこも何も！」

手をブンブンとふって否定する。

とてもわざとらしい。

「そろそろ良いかしら。雪さんの検査を始めようと思うんだけど」

「じゃあ、そろそろ私は帰ります。また何かあったらすぐ呼んでください。では失礼します。橙行くよ」

「じゃあね。橙ちゃんも…またね」

雪さんは笑顔で手を振っていた。

私は橙と永遠亭を出た。

七話 お願い

藍が帰った後私は永琳に思い切つて頼んでみた。

空の事である。

空の事を考えると手の震えと頭痛がする事について話した。

本当は隠しておきたかったが。

しやあない

「あの、永琳さん。相談つて言うか、お願いがあるんですけど」

「なになしら？」

「そ…空の事なんですけど、私、空の事を考えると手が震えたりひどい頭痛がして、これを抑えられる薬つてないんですか？ 貴方はどんな薬でも作れると噂を聞いた事があるのですが」

永琳は手を口元に持つて行き、少し考え込むと、ゆつくりと口を開く。

「確かに、私はどんな薬でも作れるわ。過去には不老不死の薬も作った事があるし、まだ作った事はないけど、どんな難病でも直せる薬だつて作れるわ。」

「じゃあ」

「良いわよでも、一つ条件があるわ」

「条件？」

「空との戦いには参加しない事」

「は？何を言ってるのよ」

「おそろく私しか空に対抗できない。」

「あなたならわかっているはずよ?！」

「どうしてよ。私は戦うために頼んだのに」

「だからよ！前に藍から聞いたけど貴方には母親と弟がいるのよね。なら……」

藍、余計な事言つて

「もう居ないのよ」

「え？」

「もう居ないの!」

少しの間変な空気が流れた。

「ごめんなさい変な事聞いて、さつき大丈夫だった？」

「ゲホツ、ありがとうございます。こつちこそ、大きな声を出してすみません。」

「藍にはまだ隠すつもりなの？」

永琳は雪に葉を渡した

「はい、藍はへんに心配性だからゲホッ」

永琳は一瞬心配そうな顔をしてそのまま部屋を出た。

なんであんな事言ってしまったのだろう。

どうしてあんな感情的に？

藍には見せられないわね

ベツトに横たわり、目を瞑ると母と一緒にいる秋斗の姿が浮かび涙が出てきた。



藍視点

あの時なんで汗なんかかかいてたんだろう？

まあいつか。

今度聞いてみよう。

「藍さま？聞いてましたか？」

「え？あ、なんだっけ？」

橙が頬を膨らませてピョンピョンと飛び跳ねる。

「もーちゃんと聞いててくださいよ。あのですね。永遠亭にいた人って藍さまのお姉さんなんですか？」

「雪さんは私のお姉さんじゃないんだけど、お姉さんの存在かな？」

「藍さまはお姉さんとかいるんですか？」

「うん。いるよ」

「どんな人なんですか？」

「えつとねー」

小さい時に、私を置いて出て行ってしまった姉の顔を思い出す。

だが、おぼろげな記憶しかなかった頃なので、姿は思い出せるのだが、顔が出てこない。

「おい！お前達聞きたいことがあるんだが、顔が出てこないか？」

「はい？いいですけ…ど…?!」

八話 姉との接触

私は目の前の人物に目が釘付けになった。

なぜならば小さい頃から一緒にいた父を殺し、尊敬している雪さんに消えないかもしれない傷を負わせ、さらには都を滅茶苦茶にした姉がすました顔で立っていたからである。

「なんでここに」

「どうしたんですか藍さま？」

橙と視線を合わせるためか、しゃがんで橙を見る。

「おい化け猫名前は？……橙っていうのか？なあ橙ちゃん、雪って言う狐知らねえか？」
「雪さんに何する気？」

まさかと思った、でもこの尻尾……見間違えるはずが無い。

声や喋り方、雰囲気は違っても、自分を守ってくれた時に切り落とされた尻尾を今も鮮明に覚えている。

なんでこんな所に…

「ちよつと聞いて…」

肩に手をかけようとする、その手をウザったらしく払われる。

「なあお前、今は橙ちゃんと話してるんだよ。わかんないかなー？今のところお前には用は無いんだよ。で、教えてくれるのか？」

橙が恐怖で首を横に振った。

ゆつくりと空が橙に手のひらを向けた。

空の手が黒い炎に包まれる。

橙の瞳が大きく開かれ、瞳の色が微かな光も感じられない漆黑へと変わっていった。

「え……い」

「んっ」

「どうして？橙言ったらダメよ！ムグッ」

突如現れた真っ黒な着物に包まれた人間に口を塞がれ手足を抑えられた。

その人間の瞳は橙と同じ漆黑だった。

「お前は黙ってるよ。で？なんだって」

「え……いえん……て……い」

「永遠亭か。わかった……もういいぞ」

そう言って空は手を何かをはらうように横に振った。

その瞬間、藍を抑えていた者の首が飛んだ。

地面に抑さえつけられていた藍に大量の血がかかり、藍の身体は真っ赤に染まった。

「永遠亭かどこだっけ？」

「ま……よいの……ちく……りんのお……く」

「そうか。ありがとな。もういいぞ」

「橙まで殺す気?!」

「そんなことするかよ。お前の大切な猫なんだろう？」

そう言って空は、今自分たちが歩いてきた道を歩いて行つた。

「橙！大丈夫?!」

「ら……んさま?」

「橙。今から急いで霊夢を呼んできて」

「は……い」

橙に霊夢を呼んできてくるように言付けて、私は永遠亭へと向つた。



藍さまと永遠亭を出て話していた。

「藍さま？あの人って藍さまの前話してたお姉さんなんですか？綺麗な人でしたね！」

「・・・」

「藍さま？聞いてましたか？」

藍さまは聞いてないようだった。

ゴメンゴメンと謝って私の質問に答えてくれた。

あんな綺麗な人がねー

羨ましいな

私にもあんなお姉さんの存在の人がいれば良かったな

「おい！お前達聞きたいことがあるんだがいいか？」

その瞬間、藍さまは驚いた表情を見せた。

藍さまの視線の先には、深紅色の着物をまとって小さな箱を持った女性が立っている。

私は初めて雪さんにあつた時のように目が釘付けになつてしまひ動けなかつた。
でも：雪さんと会つた時と少し違う気がするけど：

「橙下がつてて」

何でだろう？

その女性が近づいてきたその瞬間、背後から途轍もなく冷たい『氣』が襲つてきて、その女性の質問に思わず首を横に振つてしまった。

そうしたら、女性が私の目の前に手のひらを向けた。

指の隙間から見える女性の顔は妖艶な笑みを浮かべていた。

その瞬間意識が途切れた。

気づくと真っ赤で、血の匂いに包まれた藍さまが私の身体を揺すっていた。

「橙。今から急いで霊夢を呼んできて」

「は……」

癖で返事をしてしまったが

博麗神社？ 遠いなーまあしょうがないか。

私は博麗神社に向かった。

まだ、頭がクラクラするんだけど。

「珍しいわね、あなた一人なんて」

「藍さまに霊夢を連れてきてって」

「雪が目覚めたの？」

「雪さんは目覚めてるけど、なんか真っ赤な着物を着ている人が着て」

「空？」

「とにかく永遠亭に行ってみれば」

私と霊夢は永遠亭に向かった。

その道中雪さんのことを話しながら行った。

九話 侵入

誰かに頬を軽く叩かれて目が覚めた。

「藍かな？」と思つたが違つた。

体を起こしてみると、信じられない光景が広がっていた。

なぜならここに居ないはずの空が笑顔で、小さな箱を持つて立つていた。

じゃあ頬を叩いていたのは誰だろう？

首を向けると思わず涙が出てきた。

そこにはもう居ないはずの弟の秋斗が座っていた。

「あ……きと？」

「姉貴、久しぶり」

秋斗は逝つてしまつた時と同じ、好青年の姿で座っている。

「おい雪、何してるんだ？行くぞ準備しろ」

「貴方達！何をしているの勝手に入っちゃダ…モゴモゴ」

永琳さんが部屋に入ってきた。

その瞬間、永琳さんの口が何かに塞がれた。

それは稲荷寿司だった。

見ると空が壁に凭れながら、箱に入っていた稲荷寿司を口いっぱい頬張っていた。

「ははくいくほ」

「え、なんて？」

「早く行くぞって言ったんだよ」

「この稲荷寿司うまつ！じゃなくて貴方達！なんで勝手に入ってきたの。」

”大切な家族を迎えに来た”って言う理由だけではダメなのか？」

私は人の前だつてのに、秋斗の首に腕を回し大粒の涙を流しわんわん泣いた。

目が腫れるであろうほど泣いた。

バタン

「雪さん！空姉が」

真つ赤な藍が慌てたように入ってきた。

「お前さっきの。何しに来やがった。なぜ雪を知っている？それになぜ空姉と呼んでい
る？その呼び方は天しかしいのに」

私は自分が着ているものの袖で涙をぬぐいながら空に尋ねる。

「空？誰だか分からないの？」

「ああ知らん。雪お前知ってるのか？」

私は『天』という名前を口パクで伝える。

その瞬間、空は持っていた箱を落とし床に座り込んだ。

「嘘だ。嘘だ嘘だ！あいつがこんな所にいるわけがない。確かにあの時」

「本当なのよ。新しい主人に出会って名前を貰ったようね。『八雲 藍』それが今の名よ」

「お前、本当にか？」

「はい」

藍は空にすごい勢いで抱きついて、空の胸で静かに泣いていた。

空も嬉しそう笑っていたが、その顔の裏には哀しみの表情が隠れているように見えた。

「空？その声そろそろ直したら？」

「ああ？変えてなかったか？じゃあ戻す」

空はそう言って小さく咳払いをした。

「この声が一番いいな」

空はさつきまでの男の声をやめ、元どおりの女の声に自分の声を戻した。

もうどんだけ変化の能力高いのよ！

「その声なんで変えてたの？」

「ん？お前は知らなかったか？ああそういえば寝てたなあ〜」

「あああの時ね」

「どの時ですか？」

「是非聞かせてもらいたいわ。その話」

「ちよつと貴方達！私の事を忘れてたでしょ！」

紫はスキマから、霊夢は扉から二人ともほぼ同時に声を発した。

「これはこれは博麗の巫女様？どうしてここに？それと…紫か久しぶりだな」

「ここに？じゃないわよ。あんたの後ろに誰がいるの?!教えなさい！」

「今の代の博麗の巫女様は、小柄で可愛いもんですね〜。先代はもつとデカかったぞ」

「まあまあ…藍。あの時なんで私達が出たのか知りたい？」

「是非」

「長くなるけど良いか？」

「はい」

「かなり前だなー。お前が人間にさらわれた後助けて、都に帰った後の話…」

おっとその前に、秋。じゃあな」

「じゃあね空さん、姉貴。また会えるかわからないけど」

「何言ってるの空？秋斗はここに……？なんで？秋斗！秋斗?!」

「今さっきまでは『黄昏時』だから私の力で秋を連れ戻していたんだ。

秋に起こされた方がお前は喜ぶ思ってる。」

「また会えるのよね」

「ああ。必ず」

「そう。じゃあ藍、あの時何があつたのか話すわね」

過去 episode 《雪》 家出するの?!

私が次の戦の準備をするために、薬品の棚をガサゴソガサゴソあさっていると、おばさんとおじさんが私を呼んでいた。

「なんででしょうか？今戦のついで！どうしたの！空？しっかりして！」

おばさんとおじさんの方に首を向けると、二人が血だらけの空を抱えていた。

私は空に駆け寄り傷を確認した。

出血が酷い。

このままでは妖怪だとしても、出血性ショック死の可能性が高まってしまう。

「雪ちゃん。空の事治せる？」

「治せるかは分からないです。ここまでの怪我はやったことが無いので」

「お願いできる？」

「やってみます」

呪文を唱え始めると、空の傷がゆっくりとふさがって行った。

「空、お願い。起きてよ、空」

だが呪文を唱えると、傷がふさがると同時に雪の右手から肩にかけて赤い亀裂がビシビシと入っていった。

その亀裂からは血が流れ出てくる。

「ゆ……きゅー」

空はゆつくりと目を開けた。

その目は虚ろで何を見ているかわからなかった。

「空！大丈夫？」

「空！なんてことをしたんだ！……後で私の部屋に来なさい」

おじさんは焦っているような、怒っているような声で怒鳴る。

「回復にはかなり時間がかかります。半日待つてください」

「あなた！……ま、まさかあの儀式をやるうってんじや無いでしょうね。そんな事許さな

いわよ！空はまだ16なのよ。いくらなんでも」

空に覆いかぶさるようにしながら、おばさんはおじさんの事を見上げている。

「この都にはそう言う儀式があるんだ！しようがないだろ！俺だってこんな事をしたく

は無い！」

「なんの儀式ですか？」

「雪ちゃんは知らなくて良い事よ」

あっさりとは流されてしまった。

その後、私は空を救護室に運び看病をしていた。

看病と言っても側に居るだけ、戦狐の再生能力は高く、致命傷の傷もしつかり処置をすれば、1日で治ってしまう。

「ねえ雪。腕大丈夫?」

痛みで頭が沸いたのか分からないが、子供のように甘えているような声色でびっくりする。

私は慌てて空の頭を両手で包むように優しく持ち、軽く動かし、頭に傷がないかを確認する。

「なに? そんなにまじまじ見られると恥ずい。離して」

手で私を押ししのけようとしているのだが、背中にかけて激痛が走っているのか、あまり力が入っていない。

「それより雪、腕私が治す」

「つ…私の腕よりも自分の体。空何してきたのこんな怪我して」

「何も…してないよ」

話している中で、甘えるような声からいつもの喋り方に戻る。

「何もしてなかったらこんな怪我しないでしょ。さっきの騒ぎは何?」

「天がな、攫われた」

「攫われた!？」

「もちろん助けたよ。その時切られた」

「切られた?! 武装も何もしなかったの?」

「ああ。」

「ああ。…じゃないわよ! 何で武装しないのよ。この後どうするの? おじさんあの儀式をやるうと思ってるわよ。このままだと…」

「あの儀式って?…あれか。なあ雪お前は私が死ぬのは嫌か?」

「嫌に決まってるでしょ。耐えられないわそんな事、当たり前でしょ! なんなら私も死んでやるわよ」

「分かった。何かそこらへんにある紙をとってくれあと書くものも」

私が紙と筆を渡すと、空は描き慣れたように都と人間の里の方の地図をサラサラと描き、儀式についての説明を詳しくしてくれた。

よく地図なんか覚えてるなと思ひ、少し尊敬してしまった。

「あの儀式は体の一部を失った戦狐に施す、都ができた時から続いている忌まわしき儀式だ。戦狐の力を封じ、都の危機になった時に封印から解き放ち、生贄に捧げ危機を救うものなんだ」

「それじゃあ、あなた封印されちゃうの?嫌だそんな事」

「最後まで聞けつて。この儀式は都の者たちで行われるだろう。だから、この都の者をやめればこの儀式の対象から抜けられるんだ。」

「都を出てくき?」

「そう言う事になるな。今からその準備をしてくるから、父上には何か適当にやってくれ」

「私も行く」

「は?」

「私も行く!空が出て行くつていうのなら」

「駄目だ。お前にはおばさんと赤ん坊と一緒にいないと。分かっているのか?」

スーと救護室の襖が開き、母が現れる。

「雪?空?さっきの騒ぎ何があったの?」

「母上?!なぜここに?寝てなきや駄目じゃ無いですか」

私の話も聞かずに空の事をじつと見る。

「空?あなたなぜ尻尾が八本しか無いの?」

母は空に首を傾げながら目を細めて問いかける。

「それは」

空は状況説明のように、話の要点だけを伝える。

「天が攫われ、助けた時に切られた。儀式が始まる前にこの都を出て行く」

空の隣に座り考え込む。

数分したらパッと頭を上げる。

「そう……なら私も行くわ!」

「どうしておばさんが?! だってあなたは弐番隊隊長ですよね」

母は一応この都の弐番隊の隊長だ。

「いいのよ。出て行ったとしても子狐二人だと大変でしょう。こんな身体で弐番隊隊長なんて言えないわ」

「空? なら私もいいでしょ?」

「でも……わかりました。じゃあ二人は準備を進めてください。私は、父上に話をつけてきます。」

空はそう言って立ち上がると、早足でおじさんの部屋に向かった。

その背中は大きく頼もしく見えた。

過去episode 《雪》お父上、ねえ!

父上の部屋に着くと、何やら机で書き物をしている。

「父上、よろしいでしょうか」

「きたか。お前儀式の事は知っているな。最後の願いを叶えてやろう。一応、父親としての最後の仕事だ。」

「私は……都を出て行きます。都を出て、大切な人を守っていきます。」

父上の口がっり上がる。

「ハッハッハッハ！十六の子狐ごときが都の外で何ができる。できる事と言っても、せいぜいのたれ死ぬ程度だろう」

「黙れ」

「なんだと?」

目元がピクリと動く。

「何が父親としての最後の仕事だ!あなたは私の事を自分の子供とは見ていない。せい

ぜい、便利な兵器とでも思っていたんでしよう。あなたが自分の子供としてみているのは私では無く、天だけだった！」

「そんな事無い！産まれた時から今までずっとお前は私の娘だ！」

「そんな嘘つかなくていいですよ」

私が言うと、机に拳を叩きつけ、眉間にしわを寄せる。

「父上、本音が顔に出ていますよ」

「ふざけた事を言うな！」

「私の能力を忘れましたか？ああ、知らないのか。父上、自分の子供の能力を把握してから物を言うようにしましょう。」

「なんだその口の利き方は！お前の能力なんて……まさか覚醒したのか。」

「ええ。かなり前に、そんな事にも気付かなかったのですか？落ちぶれたものですねえ」

父は顔を歪めて黙る。

私は言葉が続ける。

「それにひきかえ、今の零番隊長は有能ですね。あれ？今の隊長って誰だっけ？あつ私か！どうやって戦に勝ってきたと思いますか？」

下を向きだまりこむ父。

「相手の心理、心力、精神を操ったんです。この目でね。私は覚醒した能力で相手の顔や

仕草を見るだけで色々わかつちやうんですよね。だから自らの手を汚さずに戦に勝ってきたんですわ。敵の兵士同士に殺し合いをさせていたんですから」

私は自分の目を指差す。

すると父は私から視線を外した。

「あれ〜? どうしました? 何も言う事がなくなりましたか? そりやあそうですよ。自分の娘に追い詰められる。ねえ、どんな気持ち? どんな気持ち? アハハハ!!」

「……………」

「何か言うことは? 無いんですね。では私はこの都を雪とおばさんと出て行きます。そうだ! 天には言わないように、言ったら……分かりますよね?」

父に背を向けると背中にドンツと『気』が飛んでくる。

後ろを振り向くと、父は私の方に掌を向け達成感に満ちたような表情で立っていた。

父の部屋を出ると、雪とおばさんが準備を終えて待っていた。

どこか心配そうな表情だったが、私が笑顔を見せると安心したように雪も笑顔になった。

「もういいの?」

「はい。では行きましょうか」

「行くのはいいけど、あてはあるの?」

「ない！」

「そんな元気に言わなくても…」

「空姉？どこに行くの？」

「ここは天が来るのは想定外だった。」

父の部屋に行く前に部屋を覗いた時は、母上と一緒に寝ていたはず。起きているなんてありえない！

「天ちゃん、これから出かけてくるけど待てる？」

「嫌だ、一緒に行く！置いてかないで」

何かを察したのだろう。雪に泣きつく天。

でも天に関わっている暇はない。雪も困りきっていた、その時おばさんが口を開いた。

「天ちゃん。これから私達はお仕事に行ってくるの」

「お仕事に？」

「そう。だから、待っていてくれる？」

「うん。絶対帰ってきますよね。じゃあ、空姉。これ！」

「なんだ？これ？」

「翠玉のブレスレットです。私の宝物なんです」

「なんでこれを?」

「それを持つて必ず帰って来て私に返して下さい。そうしたら空姉、必ず帰って来ないといけないんですよ。」

「分かった。必ず帰る」

私はそう言つて天に背を向け歩き出した。

「天。ごめん」

私は天だけに聞こえない声で呟いた。



「そういえばあの時どうやって藍を説得したんだろう」

「それなー。あとから聞いたんだけど、小さい時に雪もあんな感じだったらしい。」

「それであんなスピーディーに流したんだって。」

「あの空姉、ブレスレットなんて、渡しましたっけ?」

「ああ、空今返せば？」

「そうだな」

空は自分の腰に掛かっていた袋から、小さな巾着袋を取り出して藍に渡した。

渡された巾着袋を開けてみると翠玉のブレスレットが、入っていた。

「話の続きを」

「ええそうねじゃあ、都を出て行った後、私達は人里の近くに住むことにしたの」

「私達女三人だと怪しまれるから、私が男に化けていた。何もしないでいるのも周りに不信感を与えるから、寺子屋で先生をする事にしたんだ」

「それで男の声だったんですね。じゃあ慧音の事知っていますか？」

「ああ上白沢慧音先生だろ」

「今度呼んできますね」

過去episode 《空》寺子屋の先生



人里に下りてまず家を建てた。

立てたと言っても術で作っただけ、見た目は周りの家よりは少し大きいぐらいだが、中は空間をいじってかなり大きく広げた。

大きさでいうと、有名な稗田家のお屋敷ぐらいだろう。

四人で暮らすには大きすぎたかな？

数年ぐらいたった頃、雪の弟が産まれた。名前は秋斗。

少しビビリで心配になったが寺子屋では良い感じだったので安心した。

でもおぼさんは秋斗を産んだ時に、何だかの病にかかったそうだ。

「じゃあ雪、おばさん行ってきます。秋行くぞ！」

「はい」

「行ってらっしゃい」

私と秋斗は寺子屋に向かった。

今日は入学式だそうだ。入学式がなんなのか知らないが、六歳ぐらいの子供が寺子屋に入ってくる式らしい。

私は新任の先生として上白沢慧音先生の助手をする事になった。

助手と言っても、暇なときに手伝うくらいの簡単な仕事で、毎日あるわけでもないの
でとてもラク。

「これからよろしくお願いします」

「ああよろしく。あと、寺子屋の子供たちは襲わないでくれよ。」

「え？」

「君と秋斗くんだけ？ 狐の種だろ」

なぜ分かった？

こいつ何者？

「なぜ？ 貴様も妖獣……いや、半人半獣ってところか」

「なぜ分かった？」

「俺の能力で少しあなたの事を見たらすぐ分かりましたよ。」

「君の能力って?」

「それはまた今度。さあ、時間じゃないですか? 行きましょう」

「君達は悪い狐か?」

狐だって事も分かられたのか

こいつは敵に回すと面倒くさそうだな

私が未熟なだけかな?

「そもそも私達は人は食べません。なので私達を信じてください。あなたの事も信じますので」

「分かった。」

そうして、わたし……俺は慧音先生と教室に向かった。

教室に着くと、人間の子供たちが目をキラキラさせて待っていた。

慧音先生が黒板の前に立つと子供達が静かになった。

「今日から君たちの担任をする。上白沢慧音だよろしく。こっちは、空だ」

「よろしくお願ひします」

「では早速先生達に質問とかあるか?」

「はい。先生の好きな食べ物は何ですか?」

「何でも好きだぞ！」

「好きな食べ物は、お菓子とか甘いものなら好きだ」

そこからは好きな花だとか、いろんな事を聞かれた。そんなに気になることなのか？
と思いつつも笑顔で答えていった。

ある子供が好きな人のことを質問すると慧音先生の表情が一変して顔が真っ赤に、

「そ、それは…せ、先生はいないぞ！」

「付き合ってる人も好きな人もいないかな、今のところは」

慧音先生は3分くらい顔を手で覆ってびよこびよこしていた。

「そろそろ終わるぞ。じゃあ明日からここで勉強してもらおう。忘れ物のないようにな」

「さようなら」

「空さん、帰ろー」

「ごめん秋。先帰ってくれるか？雪にも少し遅れるかもって伝えといてくれ」

「はい。早く帰ってきてくださいね。」

私と慧音先生は明日の授業の準備を進めていた。

「慧音先生はいつ帰るんですか？」

「ん？もうすぐ帰るぞ！それがどうかしたか？」

「俺先生とかやったこと無いので何か教えてくれないかなと思ひまして。」

「そうだな、でその変化を解いて本当のお前を見せてくれないか？」

「なんで？」

「君は自分のことは『俺』と言っていたが、君と秋斗くんの事を『私達』と言っていた。私達の時はスツと言っていたが俺と言っている時は、慣れていないような感じだったからおかしいと思って」

すつげー観察眼

「よくわかりましたね。色々理由がありました。男に化けておりました。見せても良いんですけど、人間が来る前ではちょっと、」

「にんげん？」

慧音が窓の方を見ると、白い長髪の間人が歩いて来るのが見えた。

「どうした妹紅。ここに来るなんて珍しいな、何か用か？」

「ああもうすぐ暗くなってくるし、近くに来たから迎えにな」

「慧音先生。それでは私そろそろ帰りますね。秋が待っていますので」

「じゃあ明日からよろしく」

「はい」

「ただいまー」

「おかえりなさい。遅かったね、ご飯出来てるよ」

「おかえりなさい、母さんにも言つてね」

「そうだな」

そう言つて私はおばさんのところに向かった。

ただいま！と部屋に入ると布団の上で横になっているが、おかえりと迎えてくれる。

私はおばさんが大好きだ。

そこで今日の事などいろんなことを話す。

「大変だった？」

「簡単ですよ。何かあつたら力でねじ伏せますよ。」

「そんな物騒な事しないの」

「分かつてますよ。では、失礼します」

自分の部屋に戻り着替えてから私は雪達のところに戻った。

「なあ雪。相変わらずお前料理へつたくそだな。」

「そうですね〜」

「二人とも！言われなくてもわかってるよ」

「明日は私が作るよ」

「空が？でも寺子屋は？」

「早めに切り上げてくる。だから寺子屋終わったら秋お使い頼んで良いか？」

「分かりました。何を買ってくれば良いんですか？」

「そうだなあ、今日が肉料理だから、魚にしよう。」

「分かりました。」

食べ終わって雪が「一緒にお風呂入ろ〜」とか、ふざけた事を笑顔で言ってきた。

嫌だと言ったんだが、結局入る事になった。私は片付けをするからと言って先に入っていてもらい、片付けを終わらせて嫌々浴室向かった。

「イヤ〜久しぶりだなあ、一緒に入るの。」

「そうだな」

タオルを巻いて扉を開ける。

先に湯船に浸かっていた雪がこちらを振り向きアホみたいなことを口にする。

「何でそんなムスツとしてんのよ、喜びなさい。あれ？空」

「何？」

「あなた以外に良い身体してるわね」

「お前、真顔で何言ってるの？とうとう頭いかれたか？」

「そんな事ないよ。とにかく、早く空も入ってよ」

「バカ言うなよ。そんな狭いところに二人も入んねえよ。私先身体洗ってるから、ゆっくり入ってろよ。」

「そんな〜 一緒に入るの楽しみにしてたのに。」

「お前は何をしようとした？あゝ怖！」

私は身体を洗うため雪に背を向けると、雪がびっくりしたような声を上げた。

「空!?その背中はやつ何？」

「今度は何だ？」

「ええ。それ…何かの紋章？」

「紋章？」

「ちよつと後ろ向いて」

私は言われるがまま後ろを向くと、雪がいきなり背中を長く爪で引つ掻いてきた

「痛っ！何すんだよ雪！」

「消えない、紋章が消えない何で？」

「そうか……あの時。分かった。今それは置いといて、」

「置いとかないでよ」

「妹紅ってやつ、知ってるか？」

「まあ少しだけどね。商店街の人達の話だと火を操るらしいの。人里から離れてる迷いの竹林っていう所に住んでて、噂によると不老不死らしいのよ」

「そうか。じゃあ先上がってるな。のぼせる前に上がれよ」

「ちよ、ちよっと」

妹紅か、少し話をしとかないとな。

でも、話した事ないしな無理やりいつても…

噂では不老不死だろ。

絶対負けるだろ！どうしよ…

まあ後で考えるか。

服も着替えたことだし、前買った氷菓子でも食べるかな

一人分しか買ってないけど大丈夫か

ボタン！

なにやら音がして浴室の扉を開ける。

「雪？」

「ハア…ごめん空」

「嘘でしょ?! 言ったそばからのぼせやがって! 立てるか? 秋!! 水!」

「水って? なにしてんの姉貴?!」

「ごめん空、服濡れたでしょ?」

「そんなこと気にするな! とにかく身体拭いて服着ろ!」

「うん」

「何したの?」

バタバタしていたのが奥の部屋まで聞こえたのか、寝ていたはずのおばさんがお風呂まで来ていた。

「おばさん?! いや、何もありませんよ。ただ雪がのぼせただけです。部屋に戻って寝ていて下さい。秋ついてってやれ。」

秋におばさんを運ぶよう言った。

少ししたら雪に袖を引かれた。

「着替え終わったけど…ちよ、立てない」

「何で立てないんだよ。よく服着れたな、ほら背中乗れ! 秋、部屋に布団敷いといて!」

「はい」

雪の方に背を向け、雪が乗るとあまりにも軽かった。

私は一瞬心配してしまい、そのまま思った事を言う。雪が嫌な気持ちになると思い、

逆の事を言う。

「雪お前太った？」

「うっさい！」

部屋まで運び終わると、私は雪を布団におろし服を着替えるために襖を開け服を脱いだ。

「乗ってる時もあったけどやっぱり良い身体してるのよね〜」

「何言ってるの？お前本当に頭のネジとんでんじゃね。何でこんな奴と同じ部屋なんだろう。最悪。死ぬ。」

「死ぬとか言わない。冗談だよ。相変わらず冗談通じないわね」

「ちよつと待ってろ、なんか冷たいの持ってたから」

私は調理場に向かい氷菓子と氷嚢を持って部屋に戻る。

「お！氷菓子！それを私におくれ」

「お前はこつち」

雪の頭に氷嚢を置く。

「冷た！えーそつちが良い」

「ダメ、これは私が食べるの。いただきまーす。うまー！」

「うーずるい。一口！一口だけで良いから」

「ダメ」

「お願い！」

「ダメ」

「おーねーがーいー！」

「んー…しょうがないな。一口だけね」

「うん。あーん」

「は？」

「だから、あーん」

「氷嚢食わせるぞ」

「え、やめて。美味しくないから」

（素の声）

「ん」

雪の口元に氷菓子を持っていく。

「ありがとう。うんおいしい。全部食べるね」

「えー？あーもう良いよって、早っ！食べんの早いな。」

「もう十分、じゃあ空おやすみ」

「おやすみ。」

過去 episode 《空》誰？

起きるとまだ外は薄暗かった。

重い身体を起こし雪を見ると、バカみたいに幸せそうに寝ていた。

見るとだんだんムカついてきたので、水で絞ったタオルを顔の上に置いておいた。

息苦しくなつて死んでしまえ

「さてと、朝ごはん準備するか。」

私はまず味噌汁とおかずを作った。

今日も完璧な出来栄え！

誰かさんとは大違い！

作り終わった頃にはもう外は明るくなっていて、人間の声が微かに聞こえてきた。

最後、ご飯を机に置くと雪が起きて来た。

「おはよう寝坊助」

「おはよう……じゃないわよ。何これ！」

雪はそう言つて起きた時に私がおいた布を投げつけてきた。

味噌汁の入った鍋に入りそうになったので、慌ててキャッチする。

「なんで投げるんだ？鍋に入ったらどうすんだよ！」

「死ぬわあんなことになってたら」

「まあ良いから、落ち着け」

雪に二人を起こしてくるように言い、食事の準備を終わらせたので、秋の寺子屋に持ってくるものを準備してあげた。

私、優しい！

「おはようございます」

「おはよう。いい匂いね雪のとは大違い」

「どうぞ先食べて下さい。」

「母上それはどう言う…」

「いいから早く食べ！秋今日は先行くぞ。ちゃんと来いよ」

「こんなに朝早くに行くの？」

「ああ。今日は早めにな」

「行つてら〜」

私は男の姿になって寺子屋に向かった。人里の人にもあつたがとても優しいような人が沢山いた。

「お早う。朝から早いのね。」

「おはようございます。」

「あなたって何をしていらっしやるの?」

「寺子屋で教師をしています。」

「そうなの?でも、あの辺り妖怪が出るらしいのよ。何人も襲われたって」

「そうですか」

「頑張つてね」

都にいた時に思っていた人間は、争いを好んで起こす奴らだと思っていたが違った。めっちゃいい人だったな

寺子屋に着くと慧音先生が準備をしていた。

「お早うございます。早いですね」

「ああ、君も早いじゃないか」

「最近、この辺りで妖怪が出ているらしいです」

「そうか、君も気をつけろよ」

来る間で忘れてしまっていた朝早く来た本来の目的を思い出す。

「そうだ!あの、藤原妹紅の居場所知りませんか?」

「知って何をするんだ?」

「いえちよつとだけ頼み事をしようと思ひまして。でもそれは言えませんが」

「なんの頼み事をするんだ？それを教えてくれれば、妹紅の居場所を教えよう」

「……背中と目を焼いてもらうんです。」

「背中と目？焼く？何でだ？」

私は背中の中の紋章を見せるために上の服を脱いだ。

「な、なな何をしてる！……何だ？その紋章」

「何かの術なのか何なのか分からないんですよ。これを妹紅さんに焼き消してもらおうんです。」

「分かったから！……いや分かんないけど、早く服を着ろ！子供たちが来たら驚くだろう！」

慧音先生がなぜか頬を赤らめ焦ったように言うので私は服を着た。

「とにかく！教えてもいいが授業が終わって休み時間の時でいいか？」

「はい。」

二人で今日の準備をやつとこさ終わらせると、子供達が続々と入って来ていた。

「先生！おはようございます」

「おはよう」

子供たちが来たので慧音先生は教壇に立つて授業を始めた。

私は教室の後ろで授業を聞いていた。

「~~~~~で、~~~~~であるから~~~~~になります。ここまでいいか?」
「全然わかりません」

「しっかりと聞けば分かります。」

確かに子供の言う通りだ。

算術の授業らしいのだが、子供達には子守唄にしか聞こえていないようだ。

何人かの子供は睡魔に負けてすうすうと眠っていた。

授業が終わり休み時間になると、意味不明な単語から解放された子供たちが楽しそうに遊んでいた。

「怪我するなよー」

「先生。藤原妹紅の居場所なんですけど」

「ああ、そうだったな。あそこの道を真っ直ぐ行くと迷いの竹林があるだろ。そのあたりに住んでるんだ。」

「辺りですか?」

「分からないんだったら、今度の休みに案内してやろうか」

「ご迷惑でなければ」

「そうか、ならその変化は解いてきてくれよ」

「二人きりの時なら良いですけど。人間のところでは…」

「妹紅は私も信頼している。だからお前も信頼してやれ」
「会ってから決めます」

その時、子供達が遊んでいる方から叫び声が聞こえてきた。

「キヤアアアアアアアアアア」

「ウワアアアアア」

「みんなどうした?!」

「先生! 妖怪が!! 先生はみんなを!」

「空?! 君は」

「私の術で何とか、秋! お前もみんなを避難させろ!」

見たこともない真っ白の毛むくじやらで、体格の良い妖怪の前に、どんどんと間合いを詰めていく。

妖怪ががむしやらに腕を振り上げ邪魔をするが、それを避けながら懐に入って私は右手で陣を展開させ、左手で妖怪の頭をつかみ、右手を妖怪にかざした。

すると妖怪がおぞましい声を上げ、私の腹の辺りを掴んできた。

「グオオアアアアア!!」

「ツ…早く!! 巻き込まれるぞ!」

クソツ、腹が…千切れる

「みんな避難したぞ！」

私は妖怪に術をかけ終えみんなの所に戻った。

「妖怪はどうなったんだ？」

「大丈夫ですよ。もう術をかけたので」

「術？」

「慧音先生。私の能力知りたかったんですよ。教えてください」

慧音に向かい笑みを消し、真剣な顔を作る。

「この能力で私は過去に『殺し屋』と呼ばれてたんですよ」

心配そうな顔をしていたので、安心させようと私は慧音に笑顔を向け、妖怪に手をか

ざしてをクルクルと回した。

すると妖怪が声をあげながらクルクルと回りだした。

それを見た慧音はびっくりしていた。

「慧音先生。このまま殺して良いですか？」

「いや、子供達の前だから」

「じゃあ山に戻します」

私が妖怪に向かって手を払うと、妖怪は奇声を発しながら山へと帰って行った。

それを見届けると、身体から一気に力が抜け地面に座り込む。

「ゲホッゲホッ」

「大丈夫か？」

「いえ、大丈夫です。この術を使うと、こうなってしまうんです。今日はもう切り上げたほうが」

「ああ、そうだな。一人一人送ってくるから、君も早く帰れよ。しっかり休め」

慧音は泣いている子供たちをなだめ里の方に行った。

残った私はその姿を見送ったあと、地面に倒れ込みそのまま意識を手放した。

「あゝ、大丈夫ですか？」

過去episode 《空》メイドさん

「あゝ、大丈夫ですか？」

誰かに声をかけられ目を覚ました。

「貴方は？」

声をかけてきた人を見ると、赤を主体としたメイド服着ている赤い髪の女性が見下ろしていた。

「霧の湖にある紅魔館というところでメイドをしています。紅美鈴と言います。」

「私は空と言います」

美鈴と名乗った女性が私に手を伸ばしてくれたので、それをつかんで体を起こす。

美鈴さんは見上げるほど大きな籠に、沢山の食材を詰めていた。

買ったものや、量から見てこいつは人間ではないのだろう。

「えっと、さつきから気になっていたんですけど服と、その姿は？」

そう言われて服を見ると、血がべったりとついていて、服は男物だが姿は倒れている

うちに変化が解けて女の姿に戻ってしまっていた。

私は慌てて自分の体に息を吹きかけた。

すると男の姿に変化した。

「すみません。こんな姿を見せてしまったて」

「お怪我をされたのであれば手当てを」

美鈴さんが肩に手を触れようとしたので、優しく払い笑顔を向ける。

「いえ、大丈夫です。ただ少し身体が麻痺したくらいなので」

「貴方の家まで運びましょうか？」

そう言うとうと有無を言わず私の手を掴んでゆつくりと立ち上がる。

「え、えっと、じゃあお言葉に甘えて。その持つてる物持ちしますよ」

「でも大きいので」

「大丈夫です。小さくしますので」

私は美鈴さんの後ろの籠に向かって息を吹きかけた。

みるみるうちに籠は小さくなり、片手で持てるほどに。

「え？！ 凄い」

私は美鈴さんに支えられ家まで運んでもらった。

その間美鈴さんは、

「お嬢様が気にいります」

だとか、

「是非一度、紅魔館においでください」

とか言ってきた。

「お嬢様が好きなんです」

「いえ、そんなことは」

美鈴さんは一生懸命隠そうとしてるが、全くと言っていいほど隠せていない。

家に着くと雪が飛びついてきた。

顔をよく見ると目がうるうるしていた。

「ゴメンゴメン。この人に運んでもらった。紅美鈴さん。」

「本当にありがとうございます。」

雪が頭をさげる。

「いえいえ、強そうな妖怪が逃げたのでどんな強そうな人がいるのかなと思います。逃げてきた方に行ってみたら倒れているのを見つけて、運んできただけです」

「本当にありがとうございます」

「では、失礼します」

美鈴さんが帰ると雪が私の胸に飛び込んで来て、ワンワン泣きだした。

「良かった。本当に良かった。もう戻ってこないかと思った」

雪にはなかなか帰ってこない私を、戦死したかつての零番隊隊長の雪の父親と重ねてしまったのだろう。

「大袈裟すぎだよ」

涙で顔がグシャグシャの雪をなだめていると、秋が夕飯を持ってやってきた。

「空さん。ご飯作つとききましたので食べて下さい。」

「秋、ありがとう」

「一人で食べれるの？それ反動でしょ。」

「うん、子供達に危害を加えさせる訳にはいかないし、私も一応教師もときだからな」

「じゃあ食べさせてあげる」

「良いよ。もう動くから」

逃げるために立ち上がろうとするも、足に力が入らない。

「良いよじゃないよ、動いてないじゃん。良いから、のぼせた時のお詫び」

「えー…まじか」

私は雪に食事を食べさせてもらう事にした。嫌々だが。

でもその姿を影で見ている秋の目はまるで、道端でイチャコラしているカップルを見

るような目だった。

過去 episode 《空》 いざ！紅魔館へ

次の朝、起きると私はいつもの布団の上ではなく居間で寝ていた。

隣には雪が寝ていて布団がかけられていた。

たぶん秋がかけてくれたんだろう。

今度何か買ってやろう

ダンダン！

「あゝ空さん」

誰かが家の扉を叩いている。

「はい？」

扉を開けると美鈴さんが立っていた。

「朝早くすみません。昨日貴方の事をお嬢様にお伝えしたところ、気になるといので

是非招待したいと」

「はあ、そうですか」

館の主人がなぜ招待をしようと思ったのかわからなくて、キョトンとしていると、

持っていた手紙を渡される。

「では失礼します。今晚お迎えにあがりますので」

美鈴さんが帰った後雪が起きてきた。

「誰だったの?」

「ああ、美鈴さん。なんか招待状だって、でもこれ何て書いてあるか分かんないんだよな」

招待状と渡されたのには、よくわからない文字が並んでいる。

「後でいいじゃん、里の方に「鈴奈庵」とかいう貸本屋があるんだけど、今度一緒に行こう」

「うん。そうだな、今日は休みだし今から行くか。」

私達はご飯を済ませ、男物の服を着て、鈴奈庵という貸本屋へと向かった。

「ここが貸本屋?なんか不気味ね……って言うか休みの日なんだから変化いいでしょ」

「何でも良いから、入るぞ。すいませーん」

入り口にはでかでかと鈴奈庵と書いてある看板があり、長い暖簾をくぐると、奥の方に机があり小さな少女が座っていた。

「いらつしやいませ、見ない顔ですね。何かご入り用ですか?」

「入り用というか何というか、この文字を読みたいんだが、読み方がわかんなくてな。解

読するための本か何か探しに来たんですけど」

「それなら、ちよつとそれを貸していただけますか？」

「良いですけど」

少女にその手紙を渡す。

「これ招待状ですね」

「読めるんですか？」

「ええ少しなら。えつと………要約すると、貴方を紅魔館に招待します。是非彼女さんとお二人で来てください。今日の夜お迎えにあがります。だそうです。」

「彼女？俺彼女なんかいないけど」

「いるじゃないですか、あそこに」

そう言つて少女が指さしたのは、目をキラキラさせてズラ／＼と並んでいる本を見ている雪だった。

「彼女じゃないです」

「こんなやつを彼女にするんだつたら、もっとマシなやつを選ぶつーの

「あらあら、照れちゃつて」

ちよつとムカついてしまい、少女に少し術をかける。

すると少女の名前や年齢、家族構成が頭の中に流れてくる。

本居 鈴 12才

家族構成 両親と三人家族

こいつをこの場で瞬殺してしまおうか

私はこう見えても、器が小さいと何度も言われているんだから。

「ねえ空平!」

雪に声をかけられ我に返る。

私が少女にイラついている『気』を感じ取ったのだろう

「この本すごいよ、借りていこうよ」

「いいですよ」

雪はにこにこしながら本を読んでいる、それを見て少女がクスクスと笑っていた。

「何かおかしい事でも?」

「いや、可愛いなって」

私は耳を疑った。

雪が可愛いだと?

「何か最初は凜とした感じだな思ったんですけど、あんなに本に夢中になっていて何だか子供みたいだなあとと思って」

「そこが雪の良いところなんです。いつまでも遊び心を忘れてないっていうか、見てる

と自然に嫌な事も忘れるっていうか」

「空くそろそろ帰ろく。秋斗達も待ってるし」

「ああ帰るか。では鈴さんまた」

「ありがとうございます。私の名前教えましたっけ？」

「あ……」

「いやいや！街の人がそう言ってたので、じゃあまた！空行くよ！」

私達は急いで鈴奈庵をでた。

雪のフォローで何とか乗り切った。

「……焦ったー！」

「危ないじゃない。何やってんのよ」

「ゴメンゴメン」

招待状の話になる。

「あれ、誰と行くの？」

「え？ああ聞いてたんだ」

地獄耳め

「一緒に行こうよ」

「お前彼女じゃないから。お前は……いや、いや」

「なんなのよー空あ、それじゃあ私はあんたの何なのよ」

『命よりも大切な家族』

そうは口が裂けても言えなかった。

「もう家に着くからこの話は終わり。秋くただいま」

「お帰りなさいーい」

美鈴さんが玄関に座っていた。

秋が出したのだろう、お茶とお菓子を食べていた。

「何でここに美鈴さんが？」

「お迎えにあがりました。でもまだ帰っていないようなので待たせて頂きました」

「こんな所ですみません」

「いえいえ中がとでも広いのでびっくりしました。」

早速本題に入る。

「あのー美鈴さん、私彼女いないんですけど」

「いらっしやるじゃないですか」

美鈴さんは雪を見た。

その視線に気づいた雪はキラキラと目を輝かせた。

「私も行っていいんですか？」

「大歓迎です。お嬢様は珍しいものが好きなので
『珍しいもの』という表現は、天がさらわれた時に言われていた言葉なので、少し嫌悪感
を抱いてしまう。」

雪は絶対に行かせたくないと思った。

「……お前は来るな」

「大歓迎ですよ？」

「こつちの事情です。雪、おばさんどうするんだよ」

雪は残念そうな顔をした。

「そっかー、じゃあ行つてらっしゃい」

「美鈴さん準備は特にないので行きましようか」

美鈴さんと家を出ようとすると、部屋にいた秋斗がとびだして私を引き止める。

「空さん！行かないで！お願い」

「なに〜？寂しくなっちゃった？」

「今日は…絶対ダメ。あの、ね、姉さん」

半ばバカにしたような言い方をする雪だが、秋の能力を詳しく知っている雪は秋から話を聞く。

「ちよつとだけいいですか？美鈴さん」

美鈴さんは雪と一緒に奥へと行ってしまった。

その間私は秋とおぼさんの食事を準備した。

準備を手伝ってくれている秋に何を聞いても、震えてなにも言わないので、まあ大丈夫だろうと思いい準備を終わらせる。

「さあ行きましようか」

「その袋は？」

「秘密です」

「じゃあ行つてきます」

「ダメ、空さん今日は……」

秋は私がこの後怪我をすることを察知したのだろうが、私はそんなにやわじやない。死ぬことはないだろう。

「大丈夫だ秋、必ず帰ってくる」

私は美鈴さんと紅魔館に向かった。

ずっと箱が気になっていたが、何度聞いても教えてもらえなかった。

過去 episode 《空》 戦闘：痛かった

「ここがお屋敷です」

「ここが紅魔館か」

美鈴さんに連れられて来たお屋敷は、とてつもなく大きく、血で塗られたように真っ赤だった。

「どうぞお入り下さい」

中に入るととつても広い広間や、長い廊下が続いていた。

その広間に、十数体のメイド服を着た妖精がいる。

「さあお嬢様のところに案内しますよ」

美鈴さんは私の手を引いて、大きな広間のような所の真ん中を突っ切っていった。

周りから、「何あのイケメン」

だとか、「かっこいいだとか」

聞こえてくる。

よせよ、照れる。分かってるよそんな事。

「着きましたよ」

連れてこられたのはある部屋の前。

美鈴さんは身なりを整えて、丁寧にノックをし、さつきとは違う凛々しい声で

「お嬢様、例の方を連れてきました。」

「入れ」

少女の声が聞こえて来た。

もつと敵つく怖そうな奴がこの屋敷の主だと思っていた。

が、可愛い子がこのドアの向こうにいるようだ。

部屋に入ると豪華な椅子に腰掛ける少女と紫色のダボつとした服を着ている少女が

優雅にお茶を飲んでいた。

「お前が空か。まあ座ってくれ、私は誇り高き吸血鬼レミア・スカーレットだ。こっちは

パチユリーだ」

目の前にいるのが吸血鬼？

超可愛いじゃん。

でも隣のパチユリーさんだっけ？

何か無愛想な人だな。

「レミアアさんと、パチユリーさんですね、分かりました。レミアさんは珍しい物が好

きだと聞いたのでこれを持ってきました。」

私は一輪の花を差し出した。

「それは！」

パチュリーさんが座っていた椅子から立ち上がり、私の持っている花に顔を近づけた。

「これは？」

「私が宝石で作った薔薇の花です、この珍しい花でしたらあなたも喜んで下さると思つて」

「これを私のために？」

「はい！招待してくれたお礼です」

私が笑顔でそう言うのと、レミアさんの顔が少し赤くなったような気がした。

気のせいだろうか。

まあ、雪を来させなかったから、代わりの花なんだけどね

「気に入ったわ！貴方、この屋敷で執事をしない？」

は？

いきなり何を言っているんだ？

「何言ってるの無理でしょ」

「私が気に入ったのよ、空！貴方どうなの？」

「私ですか？」

私はかなりの間考えた。

雪や秋、おばさんの事を考えると断った方がいいと思っただが、レミリアさんの純粋無垢な眼差しで見られると断るにも断れない。

どうしようかと思っていると部屋のドアが開いた。

「お姉様？」

レミリアとそんなに背丈の変わらない、よく似た子が扉から顔を出しレミリアを呼ぶ。

「フラン？何でここに居るの？早く地下に戻りなさい」

先程の幼い声とは打って変わって、低く大人びた声に変わる。

「レミリアさんこの方は？」

「…妹のフランドール・スカーレットよ」

「あなた私と遊ばない？」

「私の客人よ。勝手におもちゃにしないで」

おもちゃとか、ちよつと酷くない？

「うるさいな…もういいや」

フランはそう呟くと腕をのぼし、手のひらをレミリアに向ける。

その瞬間、私はとてつもなく嫌な感じに襲われた。

言葉で説明出来ないがとても嫌な感じで、フランが何か邪悪な事をしようと思ってる事は、術を使わなくてもわかった。

私はそれを止めようと、フランの手を掴み下ろした。

「まあまあいいじゃないですか、フランドールさん？ 私は空と言います。よろしく願います。」

「危険よ！」

「大丈夫です。子供の扱いには慣れてますから。これでも教師をやっているんですよ？ 何して遊ぶの？」

私が聞くとキラキラとした眼差しで私をみはじめた。

「空！一緒に来て！」

「ちよつとフラン！待ちなさい。」

レミリアの制止も聞かずフランはすごいスピードで屋敷の外へ出て行った。

あまりの早さに、私はついていくので精一杯だ。

外に出ると子供のように笑い始め、その瞬間すごい勢いで私に向かって多くの弾幕で攻撃してきた。

私はびつくりしたが紙一重で避けられた。

「避けた!! あはははは!!」

「こんな遊びでいいんですか?」

「いいの! 私のおもちやはいつの間にか壊れちゃうんだもん。でも空! あなたは簡単には壊れない!」

「少しだけですよ!」

私が構えるとフランは一瞬で間合いを詰めてきた。

私はフランの手を掴み一回転させる。

ボキッ、と嫌な音が私の耳に入る。

「ヒギヤアアアア!!!」

やり過ぎたかと思いき一瞬だけ罪悪感に襲われたが、突然右肩に違和感を感じ、激痛に襲われた。

右を向くと右腕があるはずのところに右腕がなかった。

「アアアアアアアア!!」

あまりの痛さに視界が滲み、痛みに耐えるために歯を噛み締めたときに、頬の内側を少し噛み切つてしまい、血の味が口の中に広がった。

「あはは取れた取れた!!」

「お前！……返せ」

口の中の血を吐き捨てて言葉を続ける。

「なんで？」

私はフランに手をかざし、高速で腕を動かしているんな術を組み、フランから自分の腕を取り上げた。

「はい！遊びはもう終わり。そろそろ戻らないとお姉様に怒られてしまいますよ。」

そう言っつて私はレミリアさんのところに帰ることにした。

すると、さっきかけた術が効いてきたらしくフランは倒れ、地面に向かって真つ逆さまに落ちていく。

そこに、騒ぎに気付いた美鈴さんが飛んできてフランを受け止める。

「空さん！大丈夫ですかっつて、腕が?!すぐパチュリー様のところへ」

「私は自分で行きますので、フランドールさんを運んであげてください。」

私はそう言っつてレミリアさんのところに戻った。

戻るのも一苦労だ。

あの時のようにだんだん体が麻痺してきて、壁に手をつけてしか歩くことができな
い。

片手を壁につけ、口に片腕をくわえて歩く姿は異常だろう。

壁には赤い手形が続いていた。

後で謝らなきや

「ひふれい」

口に自分の腕を加えていたので、はつきり喋れない。

「空！腕が、パチエすぐに」

「ちよつと腕かして！」

私が腕を渡すとパチユリーさんは呪文を唱え始めた。

するとみるみるうちに腕がくつついて痛みも無くなった。

腕がくつつくのと同時に足から力が抜け、ドスツと尻餅をついた。

「凄い。雪より早い」

パチユリーさんの回復魔法のスピードに感心していると、レミアさんが私の前にしゃがみこむ。

「本当にごめんなさい。妹がこんな事をして、あの子は少しおかしいの」

秋が『見えた』のはこの事か。

私が腕を取られたのが『見えた』から、私を引きとめようとしたのか。

「…何でレミアさんが謝るんですか？私がフランドールさんと遊ぶと聞いたんですよ？あなたは何にも悪くないですよ？」

「お嬢様？空さんの着替えをお持ちしました。」

後ろの扉がガチャツと開き、美鈴さんが雪から受け取ったものを持ってきてくれた。

「美鈴、今すぐお風呂を準備してちょうだい」

「お風呂ですか？」

「空は今、血でベツタベツタでしょこのまま着替えてもダメ」

「レミリアさんちよつと待ってください。技の反動で体が少し麻痺してるので少ししたら麻痺も治るので」

「では運びますよ？」

あの時のように美鈴さんに運ばれて浴室に到着した。

「少しここで待っていてください」

「分かりました。運ばれてる時に麻痺もだんだんおさまってきたので」

「忘れ物よ美鈴」

レミリアが私の着替えを持ってきた。

どうやら部屋に置き忘れてしまったらしい。

「申し訳ありません」

「良いのよ、ねえ空。あなたさっきの話なんだけど、どうなの？」

さっきの話？

ああ、執事にならないかって話か

「それはまた今度にしますよ。こんな私にも家族がいるので」

「そう、残念」

レミリアさんは諦めてくれたらしい。

よかったよかった。

「空？気になってることがあるんだけど良いかしら。美鈴が待つてきたのつてあなたの着替えよね」

「多分そうだと思いますが」

「いや、中に入っていたものが女物の着物だったから」

女物の着物、その言葉を書いた瞬間雪のあざ笑うような顔が頭に浮かんだ。

「……………美鈴さん着替えて雪から受け取りましたか？」

「はい！雪さんがもしもの時にあれだからこれ持つてつてと言いましたので」

このまま嘘もつき通せないだろう。

「レミリアさん私は実は…」

私は澁々変化を解いた。

男の姿は黒髪の細いがしつかりしている体、女性の姿は白髪のロングの華奢な体。

なので、レミリアさんはとても驚いた様子だ。

「あなた女だったの？」

「本当の姿は見せるわけにはいきませんが、この姿なら人間じゃないレミリアさんにも見せられます。」

「準備終わりましたらどうぞ入ってください？」

私はレミリアさんとの会話を一旦やめ美鈴さんが準備してくれたお風呂に入った。

浴槽はまたとてつもなく大きく、

「銭湯か！」

と突っ込みたい広さだ。

私は掛け湯をした後にゆっくりと湯船に浸かった。

「フ〜〜気持ち〜」

「着替え出しておきますね〜」

「有難うございます」

秋の能力は『先のビジョンを見る事ができる程度の能力』多分、いつも出かける家族のビジョンを見ているのだろう。

今日行くときに私のビジョンを見て、引き止めたのだろう。

「そろそろ上がろう…うわっ！」

「何しました?！」

私は浴槽の床に足を滑らせて転んでしまった。

まだ麻痺が残っていたらしい。

美鈴さんは慌てたように浴槽の扉を開けた。

「あなたその背中どうしたの？」

「しまつ、これは何でもありません！気にしないでください。」

「良いから見せなさい！」

そう言つてレミリアさんはずんずんと浴室に入つてきて私の腕を掴んだ。

「これは」

私はレミリアさんの手を振りほどいて、陣を背中に展開し紋章を隠した。

すぐに浴室から出て雪が美鈴さんにもたせた着物を着た。

見ると美鈴さんが私をじつと見ていた。

「美鈴さんどうかしましたか？何か付いてますか？」

「いい、いえ何でもないです。」

「貴方に見惚れてたのよ。紺の着物に白い髪はよく映えるわ」

「お嬢様！」

美鈴さんの慌てた姿は、とても可愛い。

「そうなんですか？」

「はい、とつても綺麗だったので」

「じゃあ戻りましょうか」

私と美鈴さん、レミリアさんと一緒に広間に戻った。

「レミリアさん」

「何かしら？」

「貴方は不思議な人ですね。初対面なのに……貴方にだったらこの背中の紋章の事教えてもいいかも知れませんね」

「そうか、座ってくれ。美鈴！席を外してくれないか？」

静かに部屋を出て行く。

「これは家族にも話してない事なんですけど、この紋章の意味分かりました？」

レミリアさんは手を軽くあげ、首を横に振る。

「これは私の原罪の証なんです。」

「原罪？」

「私は生まれながらの呪われた子供だったんです。その証拠に私の能力は誰にもくつがえません。なのでフランドールさんが自身の能力を使えなかったんです。」

「空、貴方の能力は？」

「相手の心理、心力、精神を操るんです。子供の頃は記憶を少し見る事ができる能力だっ

たんですけど覚醒したんですよね。それで私は過去に『殺し屋』と呼ばれました。」

「やっぱり貴方ここに住まない？」

「それは私が妖狐の種だからですか？」

「あら、分かってたのね」

「分かりますよ。能力使えばすぐにね」

「そう、残念」

肩をすくませて一瞬悲しそうな顔に、その顔を見た時フランと戦った時の違和感を感じたのを思い出した。

過去 episode 《空》 手懐けと重症

「レミリアさんとフランさんって、姉妹なんですよね」

「そうよ」

顔を伏せる。

やっぱり上手くいってないのかな？

まあ私が言ったことじゃないけど

「妹さんとはよく話をしていますか？」

「してないわね。あまり外にも、ここにも出したくないから」

「話さなきやダメで…私にも妹がいるのですが、何年か前から一切会っていないんです

よ」

レミリアさんは驚いたように顔を上げて私の顔を見る。

同じ姉の立場として親近感を覚えたみたいだ。

「フランさんに今から合わせていただけま…」

「ダメよ」

即答かよ

「まあ、無理矢理にでも連れてってもらいますけど」

私がレミリアさんに近づいていくと、どんどん後ずさりをしていく。

壁まで行ったら膝裏に手を回し、勢いよく持ち上げ廊下に出て走り出す。

「ちよ、ちよつと！下ろしなさい!!」

手足をバタバタ動かし抵抗するので、落ちないように自分の方に寄せるも、顔を殴られそうで怖い。

「フランさんのいる部屋はどこにありますか?」

「分からないのに走ってたの?!」

「はい!」

走っている間に諦めたのだろう、やれやれと溜息をついてから部屋の場所を教えてくださいました。

そこはこの屋敷の1番下、つまり地下室にいるという。

妹をそんなところに閉じ込めて、一体どんな能力なんだろう?

不思議に思いながらも、レミリアさんの案内に従って進むと、見た目からしてめっちゃめっちゃ重そうな扉があった。

開こうと取っ手に手をかけると、バチツと青い火花が散った。

「パチエが結界を貼り直したみたいね」

「結界……ですか」

そこまでして抑えなくてはいけないものなのか

レミリアさんがゆつくりと扉を開ける。

部屋の中を見た私は、あまりに殺伐としている光景に言葉を失う。

「フラン」

部屋にある唯一の家具のベットのの上に座り、何もなただ黒いだけの天井を見つめ続けている。

「フランさん！」

ハッと我に返ったみたいで、ゆつくりとこちらを向く。

「お姉様？……貴方だあれ？」

ベットから降りて私にどんどん近づく。

その表情は先程とは違い、無垢な瞳で私を見つめる。

「私ですよ？さつき貴方が腕をちぎったじゃないですか」

目を見開く。

「空？」

「はい、そうですよ」

やっと分かったか

それにしても姿一つ変わったくらいでここまでわからなくなるものなのか？

「また遊んでくれるの？」

「フラン！さつきあれほど遊んだで…」

「お姉様には聞いてない」

殺気がスゲエ

漏れてるぞー多分館の外まで

「もう一回遊びましょう」

「ちよつと空あ?! 貴方何言ったかわかってるの?!」

フランは嬉しそうに空中で飛び回る。

「レミリアさん」

「え？」

レミリアの耳元に口を持っていく。

「私がフランさんを術で大人しくさせるので、手出しはしないで下さい。貴方にかかってしまったら厄介ですのぞ」

「あの子は普通じゃない。次は命を落とすかもしれないのよ、わかっているの?」

小声ながらも、レミリアさんからは怒りの感情がひしひしと伝わってくる。

「任せてください。フランさん!!今から行くの:」

レミアアさんから視線を移すと、もう目の前にフランさんが、
ドゴオオン!!!

大きな音とともに背中が壁にめり込み、痛みが身体中に走る。

「速攻:…ですか」

「だって~私のことを無視してずっと話してるんだもん。わたし:」

話し終わる前に、フランの後頭部を手で掴み、私が居たバキバキに割れた壁に思いつきり押し付ける。

掴んでる手に伝わるなんとも気持ちの悪い感触、すぐに放し空中に下がる。

「アハハッ!やったなあ?」

顔面が崩れながらも向かってくるその様子は軽く化け物だ

いや、もともとか

「こつちこつち~!顔を治さないと前見えなくないですか?」

「大丈夫だよ。匂いと音で、オラッ」

掛け声とともに、大量の弾幕が張られる。

それらはまっすぐ私の元に向かって飛んでくる。

「オットツ:…危ない危ない。あたりそー」

弾を避け、柱を足場に残りの弾を見ようと顔を上げると、耳元で囁く声が。

「空、後ろ」

後ろを向くも、もうすでに腹に腕が回り、締め付けられる。

千切れる！千切れるから！

やば、中の物でてきそう…

「アハハッ！アハハハハハハハ！！もうゲームオーバー?!」

「なにを…?!」

驚いたことに、目の前や左右にもフランが現れた。

「キュツとして…ドカーン！」

後ろで意味不明なことを言ったと思ったら、次は腹に大きな衝撃が。

「嘘…だろ」

過去 episode 《空》泊まり

衝撃で帯が解けて出てきたのは、白く細い腕。

そこからどんだん赤い染みが広がっていき、足を伝って床に点々あとをつける。

痛すぎて声でない

なんか笑いがこみ上げてくるわ

そろそろやばいかも

背後に手を回わし、フランの腕を掴み思いつき引き引く。

ちやうど肘のところをつかめたので、回して関節を外す。

痛みで力がゆるくなる。

「抜けたっ！」

「ああ〜！せつかく捕まえた…のに…」

フランはゆらゆらと降下していく。

床に座り込んだのと同時に、分身していた3人も戻る。

「嘘でしょ、あのフランがどうして？」

あまりに衝撃的な戦いっぷりに圧倒され、黙っていたレミアがやっと口を開いた。
「フランさん」

私はフランに近づいていき、優しく包み込むように抱きしめる。

「ねえ？何するの？どうして……放してよ」

「放しません」

暴れるも、私のかけた術の影響で、十分の一も力を出せていないだろう。

頭を優しく撫でる。

「貴方はその能力？を持っていて、一人でひとりぼっちだったんですね」

「放してよ！」

「私も同じです！」

私の言葉を聞いたフランさんは、抵抗するのをやめた。

「私もこの能力のせいで小さい頃は仲間外れにされてました。でも今はみんな仲良しです」

「どうして？なんで仲良くなれたの？」

「それは……」

急にこみ上げてきた何かに、手で口元を押さえて咳込むと、大量の血が吐き出された。床に跳ねてフランにも多少かかってしまった。

「空?!」

「平気です。それよりも」

持っていたハンカチでフランの顔を拭う。

「私がみんなと仲良しになれたのは、力を自分の意思でコントロールし、自分の暴れたいつていう気持ちを理性で無理やり押さえつけたからです」

私の言っていることがわからなかったみたいで、きよとんとした顔で私を見る。

「まあ要は、自分にされて嫌なことは相手にしない。相手が良い気持ちになる方法を考える。この二つを頑張れば仲良くなれます」

話している間も腹から血が止まらなく、床にどんどん血が広がる。

「努力すれば認めてもらえます」

フランのことを抱え上げベッドに寝かせる。

「ぜひ明日から実践してみてください。では、おやすみなさい。フランさん」

私がフランさんから完全に手を離すと、ゆっくり目を閉じ眠ってくれた。

よかったー!

眠ってくれたか

眠ってつてくれなきゃこつちが永遠に眠ったままになるところだったわ

「さあ! 図書館へ戻りましょう」

「その前に！そのお腹」

「ああこれは…」

息を吹きかけるとその傷がどんどん消えていく。

「私は簡単に死にませんよ。フランさんに風穴開けられる前に術はかけといたので」
「で、でも。やつぱり…」

そろそろめんどくさくなってきたので、レミリアさんの腕を掴み部屋を出る。
そのあとは、フランさんについて詳しく聞きながら図書館へ戻った。

図書館では、パチュリーがたくさんの本に囲まれながら紅茶を飲んでいた。

「あらおかえり…ってなにその血まみれの服は。さつき着替えたばかりでしょう」
なぜか服の心配をし始めたパチュリーさんに、今何をしてきたのかを簡単に説明した。

「そう、じゃあ貴方はこれから帰るの？」

「そうなりますね、ではお騒がせ…」

「待ちなさい!!」

帰ろうとしていたら、図書館の入り口に仁王立ちで構えているレミリアさんに止められた。

「あなたのそれ、塞がってないでしょ」

レミリアさんは私の腹を見た。

「は？レミイ？何を言ってるの？」

パチュリーさんは話についてこれてない。

「やっぱりバレちゃいました？」

私は着物の帯を解きながら、能力の説明をした。

「私は会った人、話した人などに瞬時に術をかける事ができるんです。パチュリーさんには少し術をかけたんですけど、レミリアさんにはかかかっていなかったようですね」

着物の帯を解き終わり腹を見せる。

パチュリーさんは目を見開いてびっくりしていた。

それもそのはず、私の腹には先程フランに開けられた風穴がそのまま空いていたからだ。

「でも大丈夫です。これくらいなら三日で治りますよ」

「パチエ。これ治せる？」

「表面だけなら今治せるけど。内臓の損傷が激しそうね」

「だから大丈夫ですって…」

「大丈夫じゃないわよ！さっきの戦闘で負った傷なら、フランの姉である私の責任よ。」

それにさつきまで呼吸をする度にヒューヒューって」

フランの部屋からここまで歩いて来る間じゆう、私が呼吸をするたびにヒューヒューと音がなっていたのだ。

「ヒュー？呼吸器官にも異常があるのかしら？いや、直接喉に？とにかく完全に治るまで2日はかかるわ」

ええー?!

ふ、2日もおー?!?!

「あなた今日はここに泊まってなさい」

「それはお断りします。家には雪も秋だっているんです。」

断るとレミリアさんが深く考えこむ。

ちようどその時間帯だったのか、美鈴さんが陽気な声で入ってきた。

「お茶とお菓子お持ちしました！」

美鈴さんの姿を見たレミリアさんは、考えが思いついたと言わんばかりに表情が明るくなる。

「丁度良かったわ。空の家族にことわってきなさい」

「え？何をですか？」

今の言葉で話しの流れを理解するのは不可能だ。さすがにキョトンとしてその場に

立ち竦している。

「空がこの紅魔館に2日泊まることを」

「分かりました」

いや、早すぎない？

さすがメイド長と言うかなんというか：

「よろしく。ちよつとあなた」

レミリアさんが声をかけた方には掃除をしている妖精がいた。

その妖精は呼ばれたのは自分だと気づき、走って来た。

「お呼びでしょうか」

「私の部屋の隣に使っていない部屋があったわよね。そこに空を案内して頂戴」

「かしこまりました」

なんか話がトントントンと進んでいき、私はこの小さなメイド妖精の後についていくことになった。

過去episode 《空》きっかけのお茶

美鈴視点

いやーびつくりしたな

お嬢様つたらいきなりばらすんだもん

はずかしー

「美鈴！席を外してくれないか？」

「かしこまりました」

空さんとお嬢様が二人で何を話しているのかとても気になるが、私にはまだ仕事が残っている。

明日の朝食の下拵えだ。

メイド妖精に頼んだのだが、多分やっていないか、中途半端にしているか。

厨房を見ると、思った通りメイド妖精はいなくて、下拵えの準備もしていないし、食材を出してもいない。

「やっぱりかあ」

私はため息をついて準備を始めた。

毎日やる事だが、毎日献立を考えるのはとてもきつい。

準備を終わらせるとお茶の時間になっていた。

準備の間、地下で何やらドタドタやっていたようで、振動がここらにも伝わってきた。

私は大図書館にキッチンワゴンにお茶とお菓子の乗せて持つて行った。

私が大図書館に着いてみなさんに声をかけるとお嬢様がニヤリと笑った。

しかも私を見て！

どんな無茶を言われるのかと思ったら雪さんに空さんが紅魔館に泊まる事を伝えてこいだそうだ。

紅魔館をでて人里の方に向かった。



「遅い…まさか本当に？でも、空が死ぬわけないし」

雪は爪を噛み、深く考え込んでいる。

「僕のビジョンは外れない。今頃腹に…」

秋斗は自分が見えたビジョンを頭の中で何回もリピートして今後の対処と、空の心配をしている。

ドンドンドン

「こんばんわー」

扉を開けてみると美鈴さんが立っていた。

「美鈴さん空は？」

「それが……」

話を聞くと空が遊んで怪我をして、その傷を治すために2日かかるので泊まるそう
だ。

一緒に遊んだのがその紅魔館の主の妹で、治すのが魔女だそうだ。

屋敷に魔女がいるなんてどんな所よ紅魔館って

それに、遊ぶって…主の妹…?

もう何が何だか訳わかんない

「やっぱり…じゃあこれ持つてつてください。」

私は10センチくらいの長細い丸い木の筒を渡した。

「何ですか?これ」

「秘密です。これを少量空に飲ませて下さい。これをお湯に混ぜて飲ませればいいですから。」

「では、失礼します」

美鈴さんが帰った後秋斗が聞いてきた。

「さっきのつてあれだよね?」

「そうよ。空が大つ嫌いのあれよ。これを飲んで『彼』が起きれば完全復活できるけど」

「後が怖いけど」

「だけど、長い間痛みで苦しんでほしくないの」

私はあれを飲んでバタバタしている『彼』を想像しながら眠りについた。



(この部屋か…)

この紅魔館は外側も内側も真っ赤だったが、まさか部屋の中まで赤いとは、見ているだけで目がおかしくなりそうだ。

「ここを使ってください。」

「あつ、ありがとうございます」

「失礼します」

私は荷物を部屋の隅に置くとベッドに横になった。

思っていたよりもふかふかで心地が良かった。

少しの間横になっていると、パチユリーさんとレミアさんが部屋に入ってきた。

「気に入ってくれたかな?」

「はい。これフカフカできもちいいですね」

「じゃあ始めるわね」

パチユリーさんが私の腕に注射針を刺そうとした瞬間、部屋の扉が開いて美鈴さんが入ってきた。

手には見た事あるような…無いような筒とポットを持っていた。

「失礼します。お嬢様、これを雪さんから預かってきました。これをお湯に入れた物を空さんに飲ませて下さいと」

「それは何？」

「さあ？飲ませてつていうことは飲み物には間違いないです」

「じゃあ美鈴お湯いれて」

お湯にその筒に入っていた粉を溶かして私に渡してきた。

なんでも雪がこれを飲ませろと言ってきたそう。

「いただきます…ブフー！ゲホゲホ！」

私は思わず吹き出してしまった。

「ちよつと！何なのそれ!？」

「ちよつと貸して、これは……」

しばしの沈黙。

「昆布茶。」

「昆布茶だどー!?こんなものを飲ませてあいつは私を殺す気か!」

「何かの毒かと思つたじゃない」

「毒ですよ！私にとっては」

「毒じゃないならいいわ」

パチュリーさんがほっとした表情を見せ、私の腕に注射針を静かに刺した。

「イテツ」

「これで良し。この薬は体の自由を奪うけど」

「何て薬を打ったんですか!」

非難の声を上げるとパチュリーさんが私を制止する。

「その代わり! 怪我や損傷を80%ぐらい再生させる事が出来るわ。あなたは薬の効果が消えるまで2日ぐらいおとなしく寝ていなさい。少ししたら歩けるぐらいにはなるわ」

「今から…2日? ずっとですか? 暇!」

「私が話し相手になるわ。こうなったのも姉の私の責任だから」

「何…か、眠くなってる」

私は異常な睡魔に襲われ眠ってしまった。

「眠ったかしら?」

「あの薬って眠くなるの?」

「多少はね。こんなに効くとは」

「私達もそろそろ行きましょう」

私はあの時のような悲劇を微塵も想像していなかった。

「もう少し…もう少ししたら俺が支配してやるからな。空」

過去episode 《空》お手合わせ←←

小鳥のさえずりで目を覚ます。

最初に真つ赤な天井、次に私を見下ろす顔が見えた。

「起きたかしら?」

「お早うございます、レミリアさん。私はどれくらい眠っていましたでしょうか?」

「1日半くらいかしら」

「じゃあ一昨日の夜からだから…もう昼ですか。」

「昼ご飯にしましょ」

レミリアさんの後を、壁に手をつきながらついていった。

昨日より体は動くようになっていたが、まだ少し動かし辛いところはある。

何度も転びそうになってしまった。

「おはようございます。お嬢様、空さん。昼食の支度は終わりましたのでどうぞ!」

「ありがとう。」

「できた？」

「はい。空さんも早く座ってください。」

私は美鈴が引いた椅子に座った。

目の前にはとても豪華な食事が並んでいてレミリアがパクパクと食べ始めた。

美鈴さんから箸を受け取って食べ始める。

その料理は雪が作ったものよりも100倍美味しかった。

レミリアさんにとっては当たり前らしいが、いつも味が分からなくなるような料理を食べている私にとってはご馳走だ。

雪の料理には慣れてしまったが

「美味しい」

「ありがとうございます。」

レミリアさんの横に立っていた美鈴さんが深々とお辞儀をする。

「美鈴さんは食べないんですか？」

「私は先に済ましていますので」

「そうですか」

私はこのしあわせのような時間を過ごした後、大図書館に行った。

やっぱり本が沢山あるところは落ち着く

本の背表紙を軽くなぞりながら本棚と本棚の間を歩いて行くと、『戦狐』と書かれています本を見つけた。

勝手に読んでいいものなのかと思っただが、

「まあいつか」

部屋のあるソファーに座って読み始めた。

初めは九尾の狐について、次に戦狐の成り立ちや歴史、戦績などがかいてあった。

「これは…」

そこに書かれていたものは私の戦績。

十六で隊長になり、それから戦績は負け無しだった。

自分の能力を使って勝っていたのだが、改めて見るとなんか照れる。

「勝手に読まれては困るわ」

本に熱中していて気付かなかったが、パチュリーさんが後ろに立っていたようだ。

時間を確認するともう夕方だった。

「かなりの間真剣に読んでたわね」

「すみません。懐かしいものがあつたものですからつい」

軽く謝りながら、目の前のテーブルに本を置く。

「懐かしいってその戦狐のやつ?ん?……あなたまさか!この本に載っている空狐?」

「そうですけど?」

「えー!?」

「えーっ!?つて、もうお気づきになられているのだと思ってました。」

「じゃあ、あなた十六歳で負け無しのあの隊長?」

え?ちよつと待って、本当に照れるからやめて

「はい……そんな呼ばれ方してたんですね。戦場と都以外には出なかつたもので……」

「負け無し?!」

声が出た方を見ると美鈴さんが目をキラキラさせて立っていた。

「何よ美鈴どうしたの?」

「いえ 戦狐の鞭の零番隊長って相当強いじゃないですか!」

「よくご存知で、本にも零番隊とは書かれていないのに」

「じゃあ飴の副隊長って……雪さんですか?!」

「そうですけど」

困惑しながら答えると、美鈴さんは目をキラキラさせて私を見始めた。

「私、死ぬまでにお二人と戦ってみたかったんですよ」

「戦うのはいいんですけどここ数年本気を出してないんで、つまんないと思いますよ。多分。治ったらいいかもですけど」

「治ったらいいんですか?!」

「私は反対ね」

パチュリーさんが速攻反対するも、後ろから飛んできた声にかき消される。

「いいじゃない!面白そうね、それ」

後ろではレミリアさんがこちらに歩いてきているところだった。

「レミイ、本気?」

「治った後に条件付きでね」

しまった

この流れだと一昨日みたいにトントン拍子で話が進み、戦わなければいけないなくなる。

「私はいいいんですけど、雪が……」

「雪さんは戦うのは嫌いなんですか?」

「雪の父親は戦で死んだので戦うのには抵抗があるみたいで、小さい頃の訓練もあまり乗り気じゃなかったっていうか、嫌々っていうか。」

「そうですか」

美鈴さんは肩をすくめて残念そうになった。

「戦うのは雪に聞いてからですけれどこれなら見せますよ」

私は両腕の前に出し息を吹きかけ、右は白、左は黒の炎を作り出す。それを合わせて灰色の炎にし、それをいろんな形に変えてみせる。

鳥や犬、兎などの動物達を何匹も作る。

みんな驚きすぎて、その動物達に目が釘付けだ。

「熱くないの？」

「白い方は熱いですけど、黒い方はそれ程では」

「黒い方は何に使うの？」

「料理程度ですかね」

「料理もできるのねあなた」

大体のことはできるが、改めて言われると照れる。

「夜お作りしましょうか？得意なのはオムライスですかね」

「夜はそれにして頂戴」

「では美鈴さんも座っていてくださいね。みんな一緒の方が美味しく感じますよ！」

私は夕食の準備を始めた。

準備と言っても材料を出して刻むだけ。

調理に入るのは夕食のちよつと前、出来立てを食べて欲しいからね。

過去episode 《空》本音と復讐

「出来上がり！」

この完璧で鮮やかな色、いい香り。

これならレミアアさん達をびっくりさせられるだろう。

まだ動き辛くて指を少し切ってしまったが

私は清々しい気持ちでレミアアさん達がいる部屋に入って、テーブルに並べた

「出来ましたよ！食べてみてください！」

皆ほぼ同時にオムライスにスプーンを入れ口に運んだ。

口に入れて飲み込んだ後も誰も何も言わないので心配になってきた。

「皆さん？お口に会いませんでしたか？」

「空、これどうやって？」

「どうやってって。」

「オムライス食べたことないのかな？」

「普通に卵割つてといて、ご飯を混ぜて炒めて、卵焼いて、盛って乗せて？」

「そんなに簡単な味じゃないですよこれ！どうやってもこの美味しさはだせません」

「美味し過ぎるわ」

なんだ、美味しすぎて言葉が出なかったのか

「有難うございます。喜んでもらって光栄です。」

私は皆さんに向かって執事のように深々とお辞儀をした。

美鈴さんが禁忌の質問を口にする。

「雪さんはお料理お上手なんですか？」

「めつつつちやまずいですよ！もうケーキに塩入れて作ったような、見た目はいいんで

すけどねー」

「逆に食べてみたいわね」

「同感」

「そうだパチエ、空の怪我はどうなったの？」

「そうねうちよつと見せて」

パチユリーさんは私の服をあげ腹の傷を確認した。

するとびっくり仰天。

何もなかったかのように少しの傷も残っていない、痛みも無くなっていた。

「これなら戦えるわね」

「よっしゃー！」

勢いよくガッツポーズを決める美鈴さん。

「でも美鈴さん私と雪と戦いたいんですよね。そしたら二対一になっちゃいますよ？」

「パチエあなたでれば？」

「嫌よ。めんどくさい」

「ルール決めればいいでしょ」

「ルール？」

「じゃあ戦うのは空と美鈴、後ろでのサポートが雪とパチエ、戦う方はサポートの二人には攻撃を仕掛けてはいけない。サポートの二人は攻防力、回復の魔法意外使ってはいけない。あと殺すのも無し。どちらかが負けを宣言するまで続けるか、私がストップをかけるまで続ける。これでよくない？」

「ちよつと整理しますね」

① 空、美鈴は一对一。サポート側に攻撃が当たった場合攻撃した方が負け

② 雪、パチユリーはサポートのみ

魔法は 攻防力増加、回復のみ

戦う側に攻撃した場合攻撃した方が負け

③ 殺すのは無し

④ どちらかが負けを宣言するか、レミアがストップをかけるまで続ける
と、いうことでいいですか？」

「ええ」

「じゃあ私は帰って雪に話をつけてきます。パチュリーさん、怪我の方はもういいですよね？」

「いいわ。こんなに早く治るなんてびっくりよ」

私は部屋に戻り荷物をまとめ使った部屋を綺麗に掃除をして紅魔館を出た。

家に向かっていると商店街の方からガヤガヤと声が聞こえる。

何をしているのかと聞くと『おまつり』の準備だそうだ。私は『おまつり』を知らないので今度みんなで行ってみようと思う

「雪ー秋ーおばさんーたっだいまー」

返事がない

「誰もいないのー?」

部屋の中を探すとおばさんの部屋に雪とおばさんが寝ていた。

一瞬間な予感が頭をよぎったが安心して胸を撫で下ろした。

「空?」

「ごめんなさい。起こしちゃいましたか?」

「いいの。ちよつと雪どけてくれる?起きれないのよ重いし」

雪を抱えて横に下ろしおばさんを抱き起こした。

下ろしたときに雪が起きてしまった。

「うーん空あ?」

「永眠してろ雪。秋は?」

「遊びに行つたよ。それより!空怪我つて」

「ん?治つたよ」

雪をスルーして、服を着替えに部屋に戻った。

脱ぐと傷が完全に塞がれていて元どおりになっていた。

少ししたら遊びに行っていたらしい、秋が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり…秋！それどしたの!？」

雪の声にも私も玄関に向かう。

私が玄関に向かうと秋が帰ってきていて、顔にぶつけたようなあとが残っていた。

「なんでもないよ」

「なんでもなくないでしょ!」

「なんでもないんだと、本人が言ってんだから。ほら秋、まず上がって冷やせ。あと雪」

「なに?」

「いや……後にするよ」

戦闘の話を持ち出す勇気が出なくて、私はおぼさんの部屋に戻った。

「おぼさん」

「どうしたの?そんなに深刻そうな顔して」

私はおぼさんに紅魔館であったこと、戦いのことをこと細かく話した。

真剣に聞いてくれるおぼさんのような人がいる私は幸せ者だと思った。

「そう…直接雪に話してみたらいいと思うけど」

「そうですけど…：…なんか傷つけてしまっそうっというか、触れちゃいけないことに触

れそうです」

おばさんの目がさっきまでの優しい目から一変して、真剣な目になる。

「雪はそこまでひ弱な子なの？ 私よりもずっと長く一緒にいたあなたなら分かるはずよ。自分を信じなさい」

おばさんに背中を押され私は雪に正直に言うことに、

家の中を探してみると縁側に雪が座ってお茶を飲んでいた。

「雪」

「何？ そんな顔して」

「紅魔館でちよつといろいろ話してて」

雪はキラキラした目で私を見てた。

この笑顔を壊したくない可能ならば留めておきたい

「戦う事になった」

私が言葉を発した瞬間、雪の表情が曇る。

「それで美鈴さんが雪とも戦いたいって」

少して、お茶を一口飲んだ後口を開いた。

「…分かった。けど空、そんな事を話すのに気を遣ってるの？」

「だっておまえ」

「父上の事はいいから」

雪の顔から笑顔が消え悲しそうな顔を見せた。

私はこの顔が嫌いだ私から離れて行ってしまえば怖い。

「だけど、雪には手を出させない私が守るから！」

私が生徒の時から戦に行く時、雪を安心させるために行っていた言葉を言う。

いつもなら「うん」で終わるのだが、今日は違った。

「守られるだけじゃ嫌なの！あなたばかり傷ついていくのを見たくないの！いつもそう！天の時も、訓練の時も、初陣の時だって全部あなたが傷ついている。私にだって守らせてよ……」

雪の力強い眼差しに私はひるんでしまった。

雪がこんな事を思っていたなんて知らなかった。

いつもは雪に指一本触れさせてたまるかと虚勢を張っていたが、これのせいで辛い思いをさせていたとは

「ごめん……ツ?!」

雪がいきなり抱きついてきて、バランスを崩して倒れてしまった。

その拍子に雪が飲んでいたお茶がおもいつきり首にかかった。

「つつー！」

「謝らないで。私が……私が強くなれば……今度紅魔館で戦うって言ってたわよね。出る

わ

少し怯えているような顔で言う雪に、私は頭を包むように抱きしめる。

「いいのか？ 本当に。私は雪が傷付いて私のようになってしまうのが…」

「私が出れば空も楽しいでしょ」

「じゃあ紅魔館に行つてレミリアさんに話して来る」

「私も行つていい？ どんな所か見て見たいのよ」

「空さん、姉貴おやすみ」

「「おやすみ」」

「私達も寝るか」

「私まだ家事残つてるから先寝てて」

「うん」

私は《早足に》部屋に向かった。

その理由は一つ《昆布茶の復習》だ!!

よくも私にあんなものを飲ませやがって！

どんな事になるかわかつていて私に昆布茶を飲ませたことは、この悪夢の刑だ！

『『恐忌相哀』』

私は雪の布団も敷いておき悪夢を見せる魔法を敷布団にかけた。

「死ね雪」

かけ終わり自分の布団に入りワクワクしながら寝た。

過去episode 《空》人格の目覚め



「さあー寝よ」

私は布団に入った。

異変に気がつく。

それは布団に入って目を瞑ると異常な眠気に襲われたからだ。

「何？」

布団から出ようと思っても体が動かない。

これは空の術の特徴だ。

術にかかる瞬間は何も感じないが、かかった後少しすると異常が出て、身動きや声な

どを出すことができなくなるのだ

(ちよ、そ……………ら)

空を呼んだが、強力な睡魔に押され、ついに眠りについてしまった。

……は？

私は真つ赤な空間に出た。

これは『彼』の術と一つ

『罪恐過幻影』

これをかけられると厄介だ！

名前の通り相手の恐怖や罪悪感に漬け込み、幻影として映し出し相手の恐怖を煽る技だ。

「私の罪」

周りを見渡すと赤黒い筋が見える。

それを覗くと私と空の初陣での光景があった。

私の思い出したくもない過去。

空の運命を変えた戦い。

――

「雪！そっち右から来てる！」

「え？キヤアア」

足元に広がっている血の海に足を滑らせ、その衝撃で狐神器を手放してしまった。

「こんな雑魚に負けるとは、妖怪は妖怪らしく人間様の世界の裏側で生きていればいいんだよ！」

その人間は勢いよく刀を雪の首めがけて振り下ろした。

「っ！……………え？」

雪は来る衝撃に耐えるため目を瞑る、恐る恐る上げると、

「—————」

空が声にならない悲鳴をあげていた。

「空!!」

空が私と人間の間立っていた。

私に向けられるはずだった刀は空の背中に吸い込まれるように入っていた。

「雪には……………雪ニハ指一本触レサセナイ」

空は背中を切られて腕に痙攣が走っていた。

空はその手を高速に動かし陣を展開した。

一瞬空がこちらを振り向いた。

空の目は紺碧色になって、空は狂った笑顔を顔に貼り付けていた。

「『狂操斬死』」

空が告げるとその人間は勢いよく走り出し、仲間を自らの刀で斬り殺していった。

その表情は自分の仲間を切っていることと、操られていることの悔しさと涙を流していた。

その時初めて空の事を怖く感じた。

「キャハハハッ!あははは!!」

空の狂った笑い声が戦場に響き渡っていた。

「空」

「俺は空じゃない。『駿』だ」

「駿」

――

「もうやめて！あれは私のせいで…私のせいで空は!!!」

私は顔を手で覆って狂ったように叫んだ

「駿！謝るからだからもはやめて！」

布団から勢いよく飛び起きた。

空はすうすうと眠っているようだった。

「空！ねえ！」

「ん？何？雪？どした？」

雪が動揺したような表情で私を見ていた。

雪の身体は汗びっしりよりで桶の水でも被ったかと思うほどだった。

「どうしたんだよ一体」

「だって空『罪恐過幻影』を」

「『罪恐過幻影』？そんな物かけてないよ？」

「え？じゃあ何いまの？」

キョトンとした顔で見られる。

「私は『恐忌相哀』だぞ？かけたの」

まだ雪はキョトンとした顔を崩さない。

「でも術をかける瞬間一瞬意識が飛んだような……まさか」

私は『恐忌相哀』をかけた、するとすーっと意識が遠のいていき完全に意識を失って

倒れた。



倒れていた空が起き上がると目が紺碧色になっていた。

「雪々？ お前何をしたかわかっているのか？ 俺が昆布茶嫌いだってしてたよな」

「ええ」

「な〜んでそんな事する〜の〜か〜な〜？ 雪」

駿は雪の首もとに爪を突き付けた。

突き付けられた喉からは血が流れて来た

「そ、それは！ あなたに少しの間戻れば怪我も再生するかと」

「まあいつか。次やったら…」

駿は雪の頭に手を置き下を向かせ耳元で囁いた。

「そんな」

「…うるさいな空！」

駿は頭を抑え苦しそうに唸り出した。

「駿もう出てこないで………雪！駿に何もされなかったか?!これは…その喉、」

空は私の肩を抑え真剣な眼差しで見えてきて、空の手には力が込められていて指先が肩に食い込んで痛い

空はハンカチで私の喉を優しく抑えた

「う…ん。何も………あ」

「何だ!？」

「何でも」

「そ、そうか」

空は紙に何かを書き、黒い炎で幻獣を創り出した。

「紅魔館に手紙を出したんだ。明日決闘をする。雪も狐神器準備しろ。ついでにわたしのもの」

「でもあれは封印したって」

過去に狐神器を使わないように空が封印したのだ。

「いいんだよ。これで最後にするから」

私には空の言っていることは意味がわからなかった。

過去episode 《空》 槍とお札



深夜に食事の下ごしらえを厨房でしていると、窓の外から空さんに酷似した気を感じ、窓を開ける。

黒い靄に包まれた手紙が窓のすぐ真下に落ちていた。

すぐにお嬢様に届けに走る。

「お嬢様？空さんからお返事が」

「来たか。内容は？」

手紙の内容は、

明日、正午より決闘を行う。

雪と私で本気で戦うのでよろしく。

的なことが書かれていた。

「あと、パチュリーさんに場所を準備してほしい。絶対壊れないものを、壊れても目立たないようなところを。だそうです」

パチュリー様は持っていたティーカップを置き、頭に浮かんだ疑問を口にする。

「絶対壊れないものをお願いってそんな無茶な。ちよつと戦うだけでしょ」

確かにその通りだ。

パチュリー様がどんな場所を準備してくれるのか楽しみだ。

三人で明日の場所について考えていると、扉がゆっくり開き妹様が顔を出した。

「お姉様。私も見たい、空が何で強いのか知りたい」

そういえば空がフランに術をかけたとか言っていたわね。

術をかけているときは暴れることはないと言っていたような

「いいわよ」

「レミイ?!」

「ちよつとあなた。フランにお茶を出して頂戴」

「は……い」

メイド妖精は最初は生き生きとしていたがフランと聞いて顔が真っ青に、カップに注ぐときメイド妖精のではガクガクと震えていた。

しょうがないことだ、今までも地下から出てきてはメイドを殺していたフランだもの。それを見てフランがメイド妖精のもとに近づいていった。

フランは震えているメイド妖精の手を取り：

「大丈夫？」

フランの呟いた衝撃の一言にみんなは目を見開いていた。

「大丈夫？無理してない？」

「だ、大丈夫です。ご心配有難うございます」

「どうして？」

パチエは驚きを隠せないでいる。

「フランの部屋に空に無理やり案内させられて、そこでフランに術をかけたらしいわ。かかっている間は暴れることはないそうよ」

「そんな人に勝てるのでしょうか」

「どうかしらねー」

「勝つても負けても楽しければいいんですけどね」

「美鈴が戦うの？いいな〜」

「美鈴が前から戦ってみたいって言ったのよ。あなたは先日戦ったでしょ」

「術ねー。これが？」

「ん？どゆこと？」

「何でもないわ。よし、明日の準備するか」

パチエが本を開き魔法陣を展開し場所の準備を始めた。

「明日が楽しみね。フラン」

「うんお姉様」

何年ぶりだろう。

私とフランは二人で並んで椅子に座った。

パチエが準備をしているところと、美鈴が逆立ちをして腕立てをしているところを見ていた。



「ここら辺に封印したはず。」

「アハハ！」

私は大きな石を前に代々言い伝えられて来た言葉を呟いた。

「我的家人 狐神器解？密封！」

石から強い光が放たれ石が粉々に吹き飛ぶ。

鋭い光が止むと、私と空の狐神器が石に突き刺さっていた。

空の狐神器は両の先に刃が付いている槍

『狐神器 両斬の槍』

私のは開くと周りが刃になっている扇子

『狐神器 風斬の扇』

この二つは都に昔からある狐神器だ。

「これを持って……………」

この妖気は、この森の中でも上位の方か

「グロアア!!」

「ここで狐神器を使うわけには」

私は考えた末逃げる事に、

かなり走つたな。ここまで来れば安心だろう

私はあのきみの悪い妖怪から逃げてきて商店街まで来た。商店街では小さな店がたぐさん立っていた。だが今の私にはどうでもいい事、急いで家に向かった。

「空持ってきたよ」

「おかえり、どっちもあつたか？」

「うん」

「こつちも終わった。このお札使うのはいいんだが書くのがしんどい」

立ち上がって背中をそらすと、ボキボキツとなつてはいけなような音がする。

「すごい数ね。何枚かいたの？」

「1000」

「マジで？」

「狐神器もあるしお札も準備オツケー。雪寝るぞ」

「今から？」

「明日は雪お前が重要になるからな」

空は私を無理矢理布団に押し込んだ

「わ、分かった。お休み」

私は聞く間もなく眠りについた。



「雪、起きろー!」

「んあ?も少しだけでも少しだけ」

「そんなに起きたくないんなら…秋!雪のぶんもご飯食べていいぞ!」

「起きた起きた!」

雪は布団から飛び起き走って部屋を出た。

「食べ物になるとこうなんだから」

戻ると雪が秋とニコニコしながらご飯を食べていた。

私も座ってみんなが食べているのを見た。

「空さんは食べないんですか？」

「先すましといたから。おばさんは？」

「いいって」

私は朝ごはんを食べている雪と秋を置いておばさんの部屋に向かった。

「おばさん」

「どうしたの？」

「朝ごはんは食べてください。お粥でも持ってきますので」

「いいって……ああ」

急いで調理場に行き、ちゃちゃつとお粥を作って持った。

「ちゃんと食べてくださいね。あとお昼頃から出かけます。鎧ってどこに置きましたっけ？」

「奥の部屋にあるわ。何に使うの？」

「ちよつとね」

私たちの鎧は他の物とはちよつと違うものだ、他の物は全体の装甲が厚くなっているが私のは後ろ、背中側が厚くなっている。

「雪 早くこれ持って行くぞ」

「まだ食べてるんだけど」

「おせーよ。秋留守番しててくれ」

「いつ帰る？」

「決まってる。なるべく暗くなる前には終わらせるよ」
「終わった。準備もしてあるし行こう空」

家を出て霧の湖の奥にある紅魔館に向かった。

過去 episode 《空》：元氣

「ここが紅魔館？ヤバイ！超赤いじゃん、名前の通り！でか！超でか！」

「うるさい」

「だって初めて来たしめっちゃ赤いし」

雪に思わずため息をついてしまう。

そういうえば初めて人里に降りた時も、家を建てて中に入った時もこんな風にはしやいでたな」

館の中に入ると、数人の妖精メイドを引き連れ美鈴さんが歩いてきた。

「お待ちしました。空さん、雪さん」

「美鈴さん！今日はよろしくお願ひします。手加減してくださいね」

「美鈴さん。レミリアさんの所に」

「分かりました」

「雪失礼な事言うなよ。」

「私をどんな奴と思ってるのよ」

「食べ物になると本気になって、料理が下手で、変なところで頑固で、優しい時は優しいんだけど、表と裏が激しくて、強いっちゃ強くて、食べ物になると本気になって、地味に可愛くて、家族第一で、変な気を使われたくない……」

「もうやめて」

雪が恥ずかしそうな、怒っているような顔で言葉を切る。

美鈴さんは笑いをこらえきれていない。

「そんなにないでしょ、しかも食べ物にのやつ二回言ったし」

「美鈴さん笑い過ぎず」

「では、ご案内します」

美鈴さんは目尻に涙を浮かばせながら私と雪を連れて紅魔館にはいった。

相変わらず全てが赤く、もう見てるだけで気持ち悪くなる。

雪はどうかと横を向くと相変わらず目を輝かせていた。

「失礼します。お嬢様」

扉を開けると、レミリアさんはソファーに座り本を読んでいた。

「レミリアさん雪連れて来ましたよ」

レミリアさんは雪を見るなり固まった。

「レ、レミリアさん？どうかしました？……雪お前その術とけ」

「ばれた？ばれないと思っただけどなく」

自分の姿がその人にとってとても魅力的な人に見える術『艶視他覧』。

雪は自分の術を解いた。

するとレミリアさんがやつと動いた。

「よ、ようこそ紅魔館へ。早速だが」

「それなら出来てますので」

「何の？」

雪は紅魔館に来た理由をすっかり忘れていたらしく、私が説明し直すと思いついたよ
うだ。

「空、フランに術をかけたらしいじゃない」

「それはあとで、レミリアさん鎧着て来ますので前貸していただいた部屋を貸していた
だいてもいいですか？」

「ええ、構わないわ」

雪と私は部屋に入って持ってきた鎧を出した。

「それも着るの？それ重いんだけど」

「お前より軽いわ」

「うるさいな。着ればいいんでしようければ」

雪のは柔軟性に特化している。

私のは動きやすさ重視している。

どちらも着物のような形だ。

「着終わったぞ」

「私も、じゃあ行こうか」

私と雪はレミリアさん達のいる部屋に戻った。

「空さん、雪さんすごく綺麗ですね。それで戦うんですか？」

「はい、では始めたいのですが」

「パチエ、転移魔法で飛ばしてくれ」

「いくわよ」

パチュリーさんは魔術本を開き呪文を唱えた。すると私たちの足元に魔法陣が現れ白い光に包まれて戦う場所に転移した。

気がつくと思議な場所にいた。地面は赤黒く、空気もなんかどよんとしている。

「着いたわよ」

「ここですか？」

「ここどこどこ？」

「うるさい」

「パチエ、私は丈夫なやつと頼んだのよ。魔界に飛ばせと言った事はないわよ」

「魔界だと壊れてもいいでしょ」

「そりやそうだけど」

「いいですよ？私」

ちようどいい

「楽しい所？」

「戦う所だから、あんまりはしゃいで怪我するな」

少し歩くと大きな闘技場のような所に着いた。周りにはきみのわるい木々が広がっている

闘技場の真ん中に私と美鈴さん、端に雪とパチユリーさんがスタンバイするとレミリアさんが開始の合図として準備していた鐘を鳴らした。

カーン

「はじめ！」

十話 邪魔

ドツカーン!

「なんだ?、いい所だろう」

「空、お客様よ」

永琳が窓の外を険しい目で見ていた。

自分も外を見てみると、真つ黒な靄をまとった頭に二本角を生やした妖怪が空を呼んでいた。

「そ………ら」

「え?」

私が空姉の方を向くと、そこには恐ろしい光景が広がっていた。

空の表情はあの時と同じ狂った笑顔を見せていた。

空が立ち上がり窓を蹴破って外に出た。

「空?!行かないでよ、あなたまでいなくなったら」

「ゴメ……ん。私……ハ、アノ方には逆らえない」

「あの方？」

霊夢が訝しげにその黒い霧に包まれた妖怪を見ていた。

「ああ、ユ、キ？ 足ナオしてやる」

「え？ 足？」

姉さんが雪さんの足に念を送ると、緑のような色の光が出て雪さんの足が少し動いた。

「どうして？ こんなのに…ありえない」

「はやくしろ」

「待ちなさい！…ぐっ！」

霊夢が止めようと空の服の袖を掴むと、空が霊夢に向かって殺気を飛ばし、全員の動きを止めた。

「姉さん！」

私は姉さんの背中を見届けることしかできなかつた。



「藍、これから紅魔館に案内してくれる？」

「え？」

「紅魔館に？何しに？」

「久しぶりにレミリアに会いたいなーと思ってね」

かわいた笑顔を向ける。

私は雪さんを通して紅魔館に行くことになった。

雪さんの足は動くようにはなったのだが、もと通りではなくカックカクしていたので私が背中におぶって行くことに、

雪さんってこんなに軽かったつけ？

「ねえ霊夢、さっきのつて」

「紫わかった？多分だけど鬼か何かね、違うのならまだいいけど鬼であれば厄介ね」

「雪さん何か知ってますか？」

「いいえ、何も、誰かもわからない」

「着くわよ。…うわっ、いつもの風景」

おぶっていたため下がっていた目線を上げた。

すると真っ赤な建物が見えた。

門の前には緑を主体としたチャイナ服を着て立ちながら寝ているのと、青を主体としたメイド服を着ているのが立っていた。

「起きなさい！美鈴！」

「フエ〜？」

「いい度胸ね……ってあら？珍しいお客様ね。霊夢に紫、藍……？見ない人ですね」

「見ない人？……あつ！」

「え？美鈴知ってるの？」

美鈴が笑顔でこちらに走ってくる。

「雪さんじゃないですか!?!どうしたんですか？空さんは？戻ってきましたか？」

「久しぶりね美鈴、あら？メイドはやめたの？メイド服似合ってたのに」

「はい！今のメイドはこの咲夜さんです。優秀なんですよ、それに」

「とりあえず敵では無さそうね」

咲夜と呼ばれたその女性は私を訝しそうに見る。

「当たり前じゃないですか、ささどうぞどうぞ、お嬢様も喜ぶと思います」

美鈴はウキウキしながら屋敷の中に案内してくれた。

中は相変わらず真っ赤だった。

「お嬢様！失礼しても？」

部屋の中ではあの時と同じく、優雅に座って紅茶を飲んでいた。

部屋に入って藍が私をソファアの上に下ろすと、レミリアが興奮したように私に抱きついてきた。

「雪！」

「レミリアさん！お久しぶりです。お元気でしたか？」

「ええ！空は？空は来てないの？それに、あなたはなんで藍におぶわれてきたの？」

「それは……」

私はレミリアさんに都で起きたこと、永遠亭でのことを話した。

レミリアさんはそれを聞いている時今にも泣きそうな表情を浮かべていた。

「そう、そいつが空を……見つけたら塵にしてやる」

「お嬢様」

「そうだ雪。このメイドは十六夜咲夜。ここのメイド長だ」

十六夜 咲夜

こいつはかなり強い。

レミリアの側近か

「そうでしたか。年は十代後半？能力は時を操るってあたりですか」

咲夜は訝しげな表情を浮かべる。

「さすがだな。相変わらずその目は羨ましいよ。奪ってしまいたい」

「パチュリーさんにフランは？いないんですか？」

「妹様のことまで」

「咲夜、雪はなフランに心を置かれた奴だ。空の事は聞いた？」

静かに首を振る。

「空は私の友人だよ。もちろん雪も」

コンコン

レミリアが咲夜に説明をしていると、ドアがノックされ住人には聞き慣れた声が聞こえてきた。

「レミイ？入っていいかしら？」

「パチエー！ちょうどよかった。入って」

扉から紫に包まれたパチュリーが入ってくる。

「さつき………つて雪！生きてたの？」

「久しぶりねパチュリー。生きてたの？つて、あなたこそ、もう干からびて死んでたのかと、それか衰弱死でも……」

バンツ！

「ゆーきー！」

話を遮るように扉が壊すような勢いで開き、そこからフランが飛び出して来る。

「フリーラン！久しぶり元気だった？」

「うん！空は？」

「それは…」

レミリアはフランに空のことを説明するのを躊躇った。

なぜなら、このことをフランに話したらフランが何をするか分からない。

そいつを見つけるまでこの幻想郷を破壊し尽くすかもしれないからだ。

ただでさえあの時かけられた術の効き目がだんだんと弱まってきているのに。

「ごめんね。空今日いないんだ」

「そう…残念。きたらまた遊ぼうつと」

私がフランとうふふあは話している。

「雪や空がいる時は大人しいのよね」

レミリアがまるで我が子を見るような眼差しでフランを見る。

「いくら強くても、フランがあんなにくつついてるなんてありえない事よ。姉には普通

だけど雪や空にはデッレデレなんて、妬ましいわ」

「お嬢様もデレデレしたいんですか？」

咲夜の予期せぬ言葉にレミリアは首を大きく振り否定する。

「／＼いい、いいや。そそそそーんなことは／＼」

「来てもいいんですよ？レミリアさん」

雪は自分の胸のあたりでニコニコしているフランの頭を撫でながら言ってきた。

「いい、いいわよー」

「そう……藍」

雪さんが思い出したように私たちを見る。

「紫と帰っておばさんと巻物を解読して槍と扇のありかを探して、霊夢さんは空と戦う準備をお願いします。巻物にお札が書かれていると思うので」

「雪さんは？」

「私は………何しよう？この足じや複雑なことできないし」

雪は自分のまだ少し痙攣している足を見ながら呟く。

「ここに泊まっていけばいい。ね？いいでしょ？お姉様」

自分の目の前で苦しそうな顔をする雪を思ったのか、フランが思いつきりの笑顔を雪に向ける。

「いいわよ。咲夜部屋の準備を。私の隣が空いてたわよね」

「はい。準備してきます」

咲夜さんは氷のような冷たい目で私を見て、パッと消えてしまった。

見られた瞬間背筋に何か冷たいものがはしり、一瞬強張った顔を見てフランが小首を傾げた。

「ん？どうしたの？」

「い、いやなんでも。レミリアさん」

「なにかしら？なんでも言つて」

「今日1日だけでもいいので、何か乗るものないですか？足が動かないもので」

「なら、美鈴！来て」

「お呼びですか？」

ひよつこりと顔を出す。

「今日、明日だけでいい雪の足になれ」

「は？」

美鈴さんと二人同時に声を上げる。

「雪のことを抱えて移動すればいいじゃない。どうせ暇でしょ。荷物は私が運ぶわ」

レミリアが荷物を持つと、咲夜がその荷物をつかもうとする。

「いえ、私が」

その手を優しく払い指示を出す。

「いいわ、他の準備の方を急いで」

「抱えてつて、お姫様抱っこでいいんですか？」

「お姫様抱っこつて、キヤ！」

美鈴が抱えると、可愛らしい声を上げた。

「意外な一面……さあ行きますよ」

「意外とかいうな！ 恥ずい！」

部屋に向かう間美鈴さんはニヤニヤしていた。

それを私は至近距離で見ているのでとても腹が立った。

こいつ、殴ってやろうか

なんやかんやで部屋に着く。

「よいしょっと」

「重かった？」

「いえ、軽すぎます。ご飯食べてるんですか？」

「ま、まあね。美鈴、永琳から薬をもらってきてもらえない？」

「…薬、ですか？ 何の……分かりました」

美鈴さんはスンとした顔で部屋を出て行った。

「寝るか」

私は久しぶりの紅魔館のベットで眠りについた。

十一話 悪夢

空

ねえ空

どうして

そんなことに

なったの？



ここは？

ああ…夢か

あ！

「空！こつち」

私だ、いつ頃だっけ？

「訓練に集中しろ！また怒られるぞ」

この頃から空は訓練訓練って

忙しかったな

初陣の後だったかな？

「そんなこと言わないで、これでも飲んで」

私があの時渡したのは昆布茶である。

「ブフーッなんて！……ものを……を」

急に黙って下を向く空を不思議に思い、肩を揺さぶる。

「なーんて物を飲ませてくれるんだ？？なあ雪ちゃんよ」

「あなたは」

空の瞳はいつもと違う色になり、声の感じやしやべり方が変わった。

この時から私は空が怖くなったんだよな

「なんで？」

「い、いや」

駿は狂ったように「なんで？」と繰り返しながら近づいて来た。

「いやー来ないで！」

「おい、答えろよくじゃないと」

駿が顔の目の前に手を伸ばしてきて、

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

いや

この後

私は

空を

きつ……



「………ん、ゆ……さん！」

「空！」

私は勢いよく布団をはいで飛び起きた。
息はととても荒く半泣きの状態だった。

「雪さん?! 落ち着いてください！」

「美鈴！私っ…私は、あああああ」

私は心臓がバクバクでなんかやばい。

汗の量もすごかった。

「大丈夫です。雪さん！落ち着いてください、まず着替えましょ、手伝いますので」

「美鈴、ありがとう。今何時？」

「今はもう朝ごはんの時間です」

だから、何時よ！

私は美鈴に手伝ってもらいながらパジャマから服に着替えた。

「ねえ美鈴。着替えを手伝ってくれるのはいいんだけど、この服は？」

私が着ているのは着物でなくチャイナ服だった。

「似合いますね！やっぱり」

「スースーするんだけど」

「さあ行きましょう」

美鈴に抱えてもらって部屋を出た。

廊下歩いている時、下着が見えていないかヒヤヒヤしていた。

「おはようございませす。みなさん！」

「おはよう。早く座らせてくれ」

「おっはよー！」

「おはよう。」

「みんな揃ってるんですね」

「どうぞ」

咲夜は感情を感じさせられない声でそう言って私の前に朝食を出した。

「いただきまーす」

「珍しいわね、チャイナ服なんて」

「似合いますよね。さすが美人」

「あー、なんかいつもと違うから違和感があるのよね！……うまつー！これ」

「咲夜の料理なんだから当たり前でしょ」

さすがはメイド長だ、それにしても私に対してだけこんなに敵意むき出して酷くな

いっ

っ！
凄いやんでくるんだけど

ここまで拒否されると、私の自慢の豆腐メンタルも傷つくんだけど。

「ごちそうさまでした」

「相変わらず早いよね、食べる事だけ」

「パチュリーさん、後で話したいことがあるのですが」

「ええ、分かったわ。先図書館行って」

「では行きましょうか雪さん」

美鈴に抱えてもらって大図書館に向かった。そういえば、この紅魔館は私が初めて来た時よりも広くなっているような。

「気のせいかな？」

十二話 腕!!

図書館に着くと見慣れぬ赤い髪の女性が本棚を整理していた。

その人は落ち着きがなくあたふたしていた。

私が見ているとこちらに気づいたのか、本を置いて走ってきた。

「美鈴さん！あれ？こちらは？」

「小悪魔さん、この方は雪さんです。」

「どうも雪と申します、小悪魔さん」

小悪魔さんはとても可愛らしい見た目をしていたが、背中に生えた日本の悪魔羽。

この屋敷、やはり凄い

「よろしくどうぞ、何か本をお探しですか？」

「ああ『戦狐』の本ってありますか？」

小悪魔さんは棚がズラ一と並んでいる所をまっすぐ突っ切って行って、表紙が白い本を一冊持ってきた。

「こちらですね」

「これこれ。あの日空さんもこれを読んでいて、この本で雪さんが零番隊の副隊長つてことを知ったんです。」

「こんなのにそんな事がねー…これか」

てきとーなページを開くと、私のページだった。

「えっと、”隊長よりも攻撃は劣っているが、その他の防御力、回復力、特殊能力が特化している” すごくいいじゃないですか」

本の背表紙や表紙を確認する。

「そんな事はないです。作者は…さすがに書いてないか」

「気になるんですか?」

「まあね、ここまで詳しく書いてあると一度戦ったことがあるやつか、都の内部の狐か、それとも…」

「それとも?」

「都に潜入してきた奴か…でも」

「でも?」

「一度戦ったことがあるやつだと全員死んでると言うか…残さず殺してるから。」

その瞬間、小悪魔の顔から笑顔が消え、真っ青になった。

ガチャ

誰かが図書館に入ってきた。

後ろを振り向くと、朝ごはんを食べ終わったパチュリーがお腹いっぱいと言わんばかりの顔で入ってきた。

「来たわよ。話したいことって？」

「この足を治して欲しいんです」

「は？ 冗談でしょ？」

さっきの幸せそうな顔から、一気に顔を歪ませる。

「本気です」

「治せないんですか？パチュリー様？」

「何を言ってるんですか美鈴さん！この大魔法使いパチュリー様ですよ！」

「難しいわ、これは簡単な術では無いわね。フランにかかっているのも同じ様な感じだ
けど」

美鈴さんはキョトンとして、話の内容が理解できていないようだ。

「これはね、普通だったら魔法は何回も重ねて強化していくでしょう」

小悪魔さんは相槌を打ちながら、何やらパチュリーの言葉をメモして行っている。

手元を見ずにあんなに早く書けるなんて、彼女やばいな。

「空の場合は、重ねるのではなくて一回を広げていくイメージ。一枚だからはがすのは簡単だけど、後になかり残って今の私みたいに後遺症として残ることが大半なの」

「めんどくさいんですね」

「そういうことだったのね!」

「こっちが空の術の特殊性について話していると、後ろからレミリアの声が聞こえてきた。

「聞いてたの?盗み聞きなんて悪趣味ね」

「私だけ仲間外れってひどいじゃない。あと、私はそんな趣味は持っていない」
「仲間外れにしたつもりはないけど、知りたいの?」

「お茶をお持ちしました」

「当たり前よ!あ、ありがとう咲夜。ずっと不思議に思ってたのよ、お父様やお母様も力を抑える事が出来なかったのに」

レミリアはいきなりきたと思ったら、お茶を飲みながら語り出した。

「それで、昔紅魔館に空が来た時に背中の中の紋章の意味を…」

レミリアはヤバイ!と、口を手で押さえた。

「背中の紋章の意味ってどういうことですか?!レミリアさん!」

私はついレミリアさんのところに駆け寄り、肩を掴んで揺さぶる。

「あ……ちよつ、えつと……それは」

「意味は何だったんですか?!おしえてください」

諦めたようにため息をつき、私の手をポンポンと叩く。

「はあー、分かったわよ。内緒についていわれてただけだなあ……。あれは原罪の証だそうよ」

原罪……ねえ

あの能力のせい?

だとしたら背中には何も無いはず

「原罪……か、レミリアさんどんな模様ですか?簡単でいいので」

「狐が二匹で円を描いて内側に文字があつて、真ん中に半分が火で半分は氷みたいで、その火と氷の絵の中に片腕がない狐がいて、そんな感じだったわ」

雪は話を聞いて目を閉じる。

頭の中で今まで見てきた都を思い浮かべる。

狐が二匹、火と氷、欠けた身体。

まさか!

「儀式の紋章!それは原罪の証ではありません。儀式の紋章です!」

「儀式?」

「何なの? それ」

「あのーパチュリー様これ」

今まで話について行けず、戦狐の本を読んでいた小悪魔が口を開いた。

「術の解き方ってこれですか?」

小悪魔が開いたページには左上の方に大きな字で、『術の解き方』と書いてあった。

こんなにはつきり書いてあるなんて

「なになに? 全体を見て一番術のかかり方が甘いところに解除魔法をかける」と、意外

に簡単ね」

「やってみるわ」

パチュリーは自分の眼に解視の魔法をかけて雪の足を見た。

すると足全体に靄がかかっているが、一点だけ微かに足が見えるところがあった。

「本当にあつたわ、ここを攻めれば」

パチュリーが解除魔法をかけると靄が消え足が滑らかに動くように

「これで空を!」

「よかつ……」

突然パチュリーが倒れた。

「パチュリー様!?!」

「パチエ！ちよつと」

「どいて！」

雪はレミリアを押しつけてパチユリーの首に片手を当て、高速で陣を展開し回復魔法をかけた。

「雪！どういうこと？」

「やられた！これは空の術ではなかったのよ！」

陣を展開している雪の腕は陣の風圧で包帯がほどけ、もともとただれていた腕から赤黒い血がだらだらと流れ出てきた。

指の先からポタポタと滴り落ち、パチユリーの服に点々と赤いしみを作っていく。

「雪あなた」

「今話しかけないで！」

雪が陣を消すとパチユリーがゆっくりと目を開けた。

「パチエ！」

レミリアが声をかけても、肩を揺さぶってもパチユリーは魂が抜かれた抜け殻のようになっっていた。

「パチエ？ねえどうしたの？」

「少し時間をおいてからにして下さいね。美鈴さんパチユリーさんをお部屋に運んであ

「げてください」

美鈴さんはシュンとした顔でパチユリーさんを抱えて図書館を出ていった。「ふー、良かった。あのまま起きてくれれば良いのだけど」

十三話

まずまずかな？

私は床に落ちている解けた包帯を拾うためにかがむ。

すると腕にビリビリと鋭い痛みが走る。

「痛つ、レミリアさんさつきは押しつけてしまつてすいません」

「いいわ。咲夜、雪に包帯を持ってきて」

「はい、どうぞ」

いつの間にとつてきたのか、咲夜さんは私に包帯を渡してきた。

お礼を言い、受け取った包帯を巻こうと服をまくしあげ腕をうごかすと激痛がはしつた。

「…痛っ！」

「失礼します」

包帯を巻くのに手間取っていると、横から咲夜が白魚の様な美しい腕を伸ばしてきて、包帯を慣れた手つきで丁寧に巻いてくれた。

白魚の様な腕に比べて私のは醜すぎる

「ありがとうございます咲夜さん」

「雪、パチエの事どういふことなの？」

今にも泣きそうな顔でレミアさんはパチユリーさんの事を聞いてきた。

「どういう事とは？」

私は苦痛に顔を歪めながら聞き返した。

痛すぎてもう笑えない。

「言つてたわよね」空の術ではない”つてどういう意味？」

「……これは駿の術なんです。本に載っていたのは空の術の解除方法、それでダメなら駿の術」

「その駿の術って何？」

「分かりやすく言うと……空や他の妖怪たちは妖術。パチユリーさん達は魔術。駿は……多分レミアさんならご存知かと思いますが」

「何なの？」

「駿が使うのは……墮天術」

墮天術と聞いた一瞬、目元がピクリと動く。

「そうだったの。墮天術なら納得ね」

「フランにも術をかけたとか言っていましたけど、それは駿の術かもしれません」

「どうして?」

「レミアアさん達のご両親は力を抑えるために色々試したと言っていましたよ。駿は0から1を作ることはできないんです」

「どういうことなの? 0から1?」

「駿は、何もかかっている状態ではない状態ではなにもかけることができない。何かがかかっている状態でないと自分の術をかけることはできないのです」

「ほ、ほう」

「ご両親に力を抑える為いろいろ試したと言うのならフランに少しは残っているかも。それを利用して駿は術をかけたのかも」

「お嬢様! パチュリー様が」

美鈴が扉を叩くように開ける。

泣きそうだった顔は、美鈴さんの声を聞いてパツと顔が明るくなり走って行ってしまった。

残された私と咲夜さんの間には気まずい空気が流れていた。

「あなたはいかないんですか?」

レミアアさんが行った後、静かにソファアの横に立っている咲夜さんに声をかける。

「はい、私はお嬢様が必要とされればお側につきますし、必要とされなければ違う仕事

を」

「真面目なんです。咲夜さんは……」

一呼吸おいて問いかける。

「主人に家族を殺せと命じられたら実行しますか？死ねと言われたら死ねますか？」

「……殺しますし死ねます。今この会話をお嬢様がお聞きになられていたら最初に間を作ってしまったことを謝罪します」

この人はレミリアの何なんだ？

なぜ殺せる？なぜ死ねる？

本当に人間なのか？

まあ、間を作るのはしようがないか

所詮、人間だしね

「でも、殺すと言っても私の家族はあの方達です。殺せるはずないですけど」

「そうですか……では、私はレミリアさん達の所に行きますので……あ」

「はい？」

「病気には気をつけてください。か弱い人間なんですから」

私はそう一言言って図書館を出た。

十四話 病氣の影



「探せって言われても」

紅魔館からの帰り、私と紫様と霊夢と橙と嘆いていた。

「巻物の方は母に頼めばいいかもしれないが、槍と扇のありかまでは」

「私は神社にこもってお札を書いてるわ」

「急ぐわよ」

紫は隙間を開き霊夢とはそこで別れた。

うちに着くと橙が走り出した。

「たっただいまー」

「お帰り橙ちゃん！藍も紫もお帰り」

「ただいま、母上槍と扇の場所って分かりますか？」

「ああ、都の奥じゃないかしら？そこに封印してたはず。空が……駿が暴走・操られてるのであれば真つ先に狐神器を取りに行くから。急がないと槍以外にも扇まで持つて行かれたら多分勝ち目は無いわ」

今後の重い話は橙の軽快な話で切られた。

「今日の夕飯は何ですか？」

「今日はカレーよ」

相変わらずちつちやいものには弱いんだから

夕飯を済ました後私達は巻物を解読し、お札を霊夢に届け扇を取りに行く明日に備えて寝た。



次の日 紅魔館にて

布団から出て着物に着替え廊下を歩いてた時、向かいから咲夜さんが歩いてきた
「お早うございます」

「お、お早うございます」

まだ咲夜さんの警戒心はとけていないらしい、でもここ最近咲夜さんがおかしい。
たまに咳き込んでるし、なんかだるそう、顔も赤いし。

「あの、咲夜さん」

すれ違う瞬間、腕を掴み咲夜さんを引き止める。

「最近、元気がなさそうに見えるのですが」

一瞬驚いたように目を大きく開くが、すぐにいつもの真顔に戻る。

「・・・私なら大丈夫です。ご心配ありがとうございます」

なんて感情のこもっていない『ありがとう』なんだろう。

咲夜さんはスタスタと歩いて行ってしまった。

図書館に戻って読書をしていると、パチュリーさんが不思議なことを聞いてきた。

「雪あなただ病気に詳しいかしら？」

「まあ、妖怪などの方は少しですが人間の病気であればどんと来いです！」

「最近咲夜の様子がおかしいのよ」

やはりみんなも思っていたのか

「私もそう思ってさつき咲夜さんに聞いてみたんです」

「それで？なんか言ってた？」

「いいえ、でも感情の感じられない声で感謝はされました。心配ありがとうって」

「今度検査でも……」

バンツ！

「パチエー！いる？」

レミリアさんが図書館の扉を荒々しく開け中に入ってきた。

その表情には焦りと混乱が見えた。

「咲夜が！咲夜が！」

「落ち着きなさいよ、何かあったの？」

「用があつて厨房に入ったら咲夜が倒れてて、すぐに美鈴にベットに運ばせたんだけど

熱がでてて、それで……」

レミリアさんの慌てようといったら、もう不安の爆発寸前、やっぱり家族は大切なのだ。

パチュリーとレミリアは大急ぎで咲夜の部屋に向かつていった。

私も本を片付けて急いで後を追った。

「咲夜の部屋」

ベットに寝かされている咲夜は汗が凄く、いかにも苦しそう。時々痰の詰まったような咳もしているし…

人間ってひ弱！

妖獣でよかった！

「パチエ！咲夜は？」

「私もよくわからないけど…おそらく」

「わ、私は…大丈夫ですので。ゴホッ」

起きようとした咲夜さんをレミリアさんが阻止し寝かせる。

「大丈夫なはずないでしょ！パチエ、おそらく何なの？」

「咳と熱…風邪かしら？雪はどう？」

「咲夜さんが風邪?!」

扉の近くに立って見ていた美鈴さんが声を上げた。

「咲夜さん。会話が辛くないのであればいつ頃から咳が出てきたのか等教えてくれますか？」

「咳は二週間前くらいから、熱もそれくらいからあったのですが、微熱だったので。最近

はだるさや食欲がなくなってきた」

「風邪の症状ですね。でも結核の可能性も捨てないで対処したほうがいいと思います。」

「結核？なにそれ？」

「結核とは結核菌に感染して起きる感染症

ほとんどの場合は肺結核。だけど、早く気づいたので対処法がありますよ」

周りを見ると、レミリアさんと美鈴さんは話がわかりにくかったのか、頭の上にマークが見える。

パチュリーさんは何となくだけど分かったみたい。

咲夜は相変わらず苦しそうにしている。

「簡単に言うと、

結核菌に感染して発病すると、最初のは風邪に似た症状が出ます。さらに進むと血痰が出たり吐血したりする。

菌は確実に肺を侵食し、肺の空洞は大きくなり、最後は呼吸困難で死亡する。

つと、こんな感じですよ。」

「何とかわかったわ」

やっと重大なことだとわかったレミリアさんが咲夜に命令する。

「咲夜、安静にしていなさい。命令よ」

「……かしこまりました」

主人には絶対服従。素晴らしい精神！

主人への一途な思い……そこは尊敬します。

これからのメイドの仕事は美鈴さんがやるのだと思っていたが、美鈴さんは仕事は嫌らしいのでレミリアも困っていた。

「私がやりましょうか？」

「で、でも。あなたはあくまでお客様、そんなことをさせてもいいのか」

「大丈夫です。任せてください！ 咲夜さんのようにはいかないかもしれないんですけど、私なりに頑張りますので」

「……分かった。私達もサポートするわ」

「あー！」

私は重大なことを思い出す。

「料理がまあ得意では……」

「美鈴、あなた料理はやってくれないかしら？」

「分かりました」

美鈴は諦めたようにうつすらと笑顔を浮かべる。

「じゃあ咲夜、ちゃんと寝るのよ」

咲夜さんの部屋を出て紅魔館の中を回って色々と調べた。

これで紅魔館のことは大丈夫……なはず！

料理の方も心配ないし、咲夜さんへの看病は私がすることになったし。

明日の準備をするとあつという間に夜になっていたので寝ることにした。

咲夜さんは誰よりも遅く寝て、誰よりも早く起きる……私には無理っぽい頑張る

約束したもん！

おやすみ！

十五話

本当に勘弁して



今日も体がだるい

でも起きなければ仕事が

私は重い体をおこし、いつものメイド服に着替え、厨房に向かった。

下拵えはすでにしてある。

私は調理を開始した。

あとは簡単焼いたり蒸したり、完成したらテーブルに並べて主人を起こしに行くのだ。

「お嬢様、お早うございませす」

「ああお早う」

着替えも終わらせ朝食に。

他の住人の様子を見に廊下を歩いていると雪さんにあつた。

私は彼女が嫌いではないが苦手だ。

見た目は完璧である！が…なんかね

「お早うございます」

「お、お早うございます」

挨拶も（いちおう）したし、厨房へ戻ろうと歩き出すと雪さんに呼び止められた。

「最近、元気がなさそうに見えるのですが」

なぜ？

絶対ばれないと思つてたのに

メイドとして主人のお世話やその他雑務、自分の健康管理も仕事のうち。

メイド長である私が体調が悪いのを知られるようなことがあつたら…メイドの恥だ。

勘？それとも何かを感じ取つた？

「私なら大丈夫です。ご心配ありがとうございます」

ヤバイ…かも、なんかふらふらする

急いで厨房に戻り主人達の食事を見届け、食器類の片付けと昼食の下拵えをやつとこ

さ終わらせた。

「お、終わっ…………た」

バタツ

~~~~~

「咲夜！」

「…あ、お、嬢…様。」

気がつくくと、お嬢様が私を見下ろしていた。

「何があつたの？咲夜！美鈴！急いで来て！」

「お呼びで…って咲夜さん!?どうしたんですか?」

「部屋に運んで！私はパチエを！」

それから私は美鈴に抱えられて自室へ運ばれた。

運んでる間、美鈴が励ましの言葉をかけ続けてくれて美鈴の新しい一面を発見するこ  
とができた。

ベットに寝かされると、パチユリー様達が入つて来て何やら話している。

「私もよくわからないけど…おそろく」

「わ、私は…大丈夫です。ゴホッ。」

これ以上ご迷惑をかけるわけにはいかない。

自分の体に鞭を打つてでも起きなければ。

「大丈夫なはずないでしょ！パチエ、おそろく何なの？」

「咳と熱…風邪かしら？雪はどう？」

なぜ客人にそんな事を聞くのか、私は理解ができない。

お嬢様がなぜ妖獣風情に一目おくのか？

・・・風邪？

この私がそんなものにかかるなんて

ああだるい、

頭も痛いし、

関節も痛い。

もう誰でもいいから治してよ

「じゃあ咲夜、ちゃんと寝るのよ」

え？

まって！

一人にしないでよ

風邪のせいなのか分からないけど

なんか心細いんですよ

お嬢様！

次の日

カチャカチャ

ん？なんだこの音は？

だるいんだから静かにしてよ

「う……」

声が出せないほどに喉が痛い

こんなのは生まれて初めてのことだ

どうしていいのか分からない

「咲夜さん？」

「雪さ、ん？」

声！ガツラガラ

「あつ、起こしてしまいましたか？すみません。朝食を持ってきたのですが食べられますか？」

雪さんはベットの横に座りお粥をすくったスプーンを差し出してきた。

「口、開けて下さい」

、客人に食べさせてもらうなどそんなことは出来ない。

「自分で食べれます」

スプーンと横の台に置いてあるおかゆの入った皿を自分のところに置いた。  
「そうですか」

雪さんはなぜか残念そうに肩を竦ませた。

あなたみたいな美人にそんな顔をされるとこつちが変な罪悪感に襲われる。

そのあと雪さんは立ち上がりキッチンワゴンを押して部屋を出ようと…

「あの一！」

雪さんは小首を傾げてこちらを見ている。

「わ、私が食べ終わるまで…そこにおいてください」

なんでこんな事を!?

私は自分が言つた事を理解できなかった。

なぜこんな事を言ってしまったのか私は自分の事がわからなかった。

「分かりました。咲夜さんは…案外甘えん坊さんなんですね」

やめて

そんな笑顔でこつちを見ないで!

「私はここにいます。ゆつくりでいいので食べてください」

そう言うともまた横にある椅子に座り私が食べ終わるのを待つていてくれた。

私が食べ終わると雪さんは私の額に自分の額をくつつけた。

え？近っ！

「熱は昨日よりはマシになったみたいですね。よかったです。」

雪はまるで自分の大切な人のように扱つてくれた。

顔が近づいて分かった、目元に薄っすらとくまがあることに。

「夜、寝ている間ずつとついててくださってたのですか？」

「え？ええ、ほつとくわけにもいかなかつたですし。だいたい良くなつたので今レミリアさんを呼んできます」

私は部屋を出て行くこうとしている雪さんの袖をとつきに引き、ベットから立ち上がり雪の腰のあたりに腕を回した。

「咲夜さん？」

腕を回したところまでは良かったが、足の力が抜け、膝から崩れ落ちる。

「(ハハ)……(うて)」

なんでこんな事を？

これはきつと風邪のせい

「すぐに戻ってきますので」

優しそうな笑顔を浮かべた雪さんに優しく撫でられ、抱えられてベットに横になつた。

# 十五話 本当に勘弁して



今日も体がだるい

でも起きなければ仕事が

私は重い体をおこし、いつものメイド服に着替え、厨房に向かった。

下拵えはすでにしてある。

私は調理を開始した。

あとは簡単焼いたり蒸したり、完成したらテーブルに並べて主人を起こしに行くのだ。

「お嬢様、お早うございます」



「ああお早う」

着替えも終わらせ朝食に。

他の住人の様子を見に廊下を歩いてみると雪さんにあつた。

私は彼女が嫌いではないが苦手だ。

見た目は完璧である！が…：なんかねゝ

「お早うございます」

「お、お早うございます」

挨拶も（いちおう）したし、厨房へ戻ろうと歩き出すと雪さんに呼び止められた。

「最近、元気がなさそうに見えるのですが」

なぜ？

絶対ばれないと思つてたのに

メイドとして主人のお世話やその他雑務、自分の健康管理も仕事のうち。

メイド長である私が体調が悪いのを知られるようなことがあつたら…：メイドの恥だ。

勘？それとも何かを感じ取つた？

「私なら大丈夫です。…心配ありますがどうぞございます」

ヤバイ…かも、なんかふらふらする

急いで厨房に戻り主人達の食事を見届け、食器類の片付けと昼食の下拵えをやつとこゝ

さ終わらせた。

「お、終わっ………た」

バタツ

~~~~~

「咲夜！」

「…あ、お、嬢…様。」

気がつくとき、お嬢様が見下ろしていた。

「何があつたの？咲夜！美鈴！急いで来て！」

「お呼びで…って咲夜さん!?!どうしたんですか？」

「部屋に運んで！私はパチエを！」

それから私は美鈴に抱えられて自室へ運ばれた。
運んでる間、美鈴が励ましの言葉をかけ続けてくれて美鈴の新しい一面を発見するこ
とができた。

ベットに寝かされると、パチユリー様達が入って来て何やら話している。

「私もよくわからないけど……おそらく」

「わ、私は……大丈夫です。ゴホッ。」

これ以上ご迷惑をかけるわけにはいかない。

自分の体に鞭を打ってでも起きなければ。

「大丈夫なはずないでしょ！パチエ、おそらく何なの？」

「咳と熱……風邪かしら？雪はどう？」

なぜ客人にそんな事を聞くのか、私は理解ができない。

お嬢様がなぜ妖獣風情に一目おくのか？

・・・風邪？

この私がそんなものにかかるなんて

ああだるい、

頭も痛いし、

関節も痛い。

もう誰でもいいから治してよ

「じゃあ咲夜、ちゃんと寝るのよ」

え？

まって！

一人にしないでよ

風邪のせいなのか分からないけど

なんか心細いんですよ

お嬢様！

次の日

カチャカチャ

ん？なんだこの音は？

だるいんだから静かにしてよ

「う……」

声が出せないほどに喉が痛い

こんなのは生まれて初めての事だ

どうしていいのか分からない

「咲夜さん？」

「雪さ、ん？」

声！ガツラガラ

「あつ、起こしてしまいましたか？すみません。朝食を持ってきたのですが食べられますか？」

雪さんはベットの横に座りお粥をすくったスプーンを差し出してきた。

「口、開けて下さい」

客人に食べさせてもらうなどそんなことは出来ない。

「自分で食べれます」

スプーンと横の台に置いてあるおかゆの入った皿を自分のところに置いた。

「そうですか」

雪さんはなぜか残念そうに肩を竦ませた。

あなたみたいいな美人にそんな顔をされるとこつちが変な罪悪感に襲われる。

そのあと雪さんは立ち上がりキッチンワゴンを押して部屋を出ようと…

「あの一！」

雪さんは小首を傾げてこちらを見ている。

「わ、私が食べ終わるまで…そこにいてください」

なんでこんな事を!?

私は自分が言った事を理解できなかった。

なぜこんな事を言ってしまったのか私は自分の事がわからなかった。

「分かりました。咲夜さんは…案外甘えん坊さんなんですネ」

やめて

そんな笑顔でこつちを見ないで!

「私はここにいます。ゆつくりでいいので食べてください」

そう言うともた横にある椅子に座り私が食べ終わるのを待っていてくれた。

私が食べ終わると雪さんは私の額に自分の額をくつつけた。

え？近づ！

「熱は昨日よりはマシになったみたいですね。よかったです。」

雪はまるで自分の大切な人のように扱ってくれた。

顔が近づいて分かった、目元に薄っすらとくまがあることに。

「夜、寝ている間ずつとついててくださってたのですか？」

「え？ええ、ほつとくわけにもいかなかったですし。だいたい良くなったので今レミリアさんを呼んできます」

私は部屋を出て行くこうとしている雪さんの袖をとつきに引き、ベットから立ち上がり雪の腰のあたりに腕を回した。

「咲夜さん？」

腕を回したところまでは良かったが、足の力が抜け、膝から崩れ落ちる。

「ハイハイ……いて」

なんでこんな事を？

これはきつと風邪のせい

「すぐに戻ってきますので」

優しそうな笑顔を浮かべた雪さんに優しく撫でられ、抱えられてベットに横になった。

十六話

甘え

↳ 咲夜の部屋の前　　↳

「フウ…焦った」

咲夜さんがあんな事をしてくるなんて

—————

「(トク)に…いて」

—————

それにあんな事も言うんだから

私はキツチンワゴンを押して厨房に戻った。

「どうでしたか？ 咲夜さん」

「熱は昨日よりかはマシになってました。今からレミリアさん達に報告して咲夜さんのところに帰ろうと思ってます」

「じゃあ報告は私がしておきますので、雪さんは咲夜さんの所に行ってください」
報告をお願いして、私は咲夜さんの部屋に向かった。

その途中メイド妖精にあつた、けど私を見るなり固まって動かなくなりました。
どうしたんだろ？何か変だったかな？

「失礼します。咲夜さん」

あれ？寝てる

寝顔もかわいいな

つい咲夜の頬に手を当ててしまった。

でも、すぐに薄っすらと目をあけたので急いで手を離れた。

「ん…んあ？雪さん。うう」

目を開けたと思ったら顔を歪めた。

「大丈夫ですか？どこか痛いところでも？」

「いや、ちよつと頭が痛いだけだから」

「そうですか。だいぶ良くなったのでこのまま悪化しなければ良いのですが」

「大丈夫よ」

咲夜さんに惚げな、でも優しい笑顔を向けられてつい目をそらしてしまった。

「咲夜！」

「レミリアさん、お静かに」

バンツと、勢い良く部屋に入ってきたレミリアさんに、人差し指を立て口まで持つてきて見せた。

「ごめんなさい。咲夜もう大丈夫なの？」

「悪化しなければ……ですけど」

「レミリアさん、気をつけてくださいね。人間がかかる病気と言っても妖怪にとつて無害とは言い切れませぬので。風邪の様な症状がレミリアさん達にも出てくるかも知れませんので」

「じゃあ咲夜、もし何かあったら遠慮なく言うのよ」

レミリアさんは部屋を静かに出て行った。

「また起こしますので、そろそろ寝てください。あと、雪で良いですよ。呼び方」

「分かったわ雪……でも」

「私ならずとここにいますので」

咲夜さんは安心したように布団に潜る。

私も寝るか、昨日は看病で寝てないんじゃないかと（ほぼ看病だったけど）調べてたりしてたから。

眠い！

だるい！

横になりたい！

「おやすみなさい」

目を開けると外は薄暗く、夕飯の準備をしないといけない時間になっていた。

「失礼します。雪さん夕飯ってどうしますか？」

「ごめん今まで寝てた。夜はレミアアさん達の好きな物でいいと思います。咲夜さんは…お粥？」

「じゃあ準備しますので雪さんは寝てください…昨日もあんまり寝てないんですよ？」

美鈴さんにはお見通しだったみたい。

私はお言葉に甘えてもう少し休む事にしたが、休むと言っても椅子に座って机にうつぶせの状態なので結構きつい。

「…お嬢様…」

ん？

寝言かな？

寝言でもお嬢様って、どんだけだよ

少ししたら美鈴さんが部屋に入ってくる。

「持ってきましたよ雪さん。電気つけますか？」

「いや、そのままにしておいて」

「じゃあ失礼します」

持ってきてもらったキッチンワゴンを押し、ベッドの横につけた。

「咲夜さん、起きて下さい」

「ううん、もう朝？」

「何寝ぼけてるんですか？夜ですよ、さあ起きて夕飯を食べてください」

「いただきます」

ぐううー

その時盛大にお腹が鳴った。

「そういえばあな…雪は朝も昼もご飯食べたの？」

「・・・咲夜さんが倒れた日から何も食べてないです」

「じゃあ食べてきなさい」

「でも……………わかりました。じゃあすぐ帰ってきます」

私は急いで厨房に向かった。

く 厨房にてく

「あれ？咲夜さんの所にいたんじや」

「ええ、私咲夜さんが倒れた日からずっと食べていなかったものですから、食べてきなさいと」

私はご飯と卵、ケチャップとバターを冷蔵庫から取り出し調理を開始した。

フライパンにバターをひいてご飯を投入。

パラパラになったらケチャップを入れる。

完成したら形を整えてご飯にのせる。

次に、卵を溶き入れてトロトロ口感を残しながら薄く焼いていく。

それをご飯にのせて完成

「料理できるんですか？」

「え？ああ鬼教官からこのオムライスの作り方は叩き込まれたからこれは作れるんですよ」

「鬼教官……空さんのことですか？」

「はい、皆さんが好きかわからなかったので、口に合わないものを作ってしまったら、と思います」

私は美鈴さんに言うとおムライスにがつついた。

これだけはすごく美味しい。

何も食べていなかった後っていうのもあるかも知れないけど美味しい。

「一口ください………旨っ」

「有難うございます。ごちそうさまでした」

「早っ！」

「では咲夜さんの所に戻ります。」

咲夜さんの部屋の前まで来るとあれが来た。

そう、食べた後に来るあの脇腹の痛み！

「失礼します。咲夜さん」

また寝てる

このまま起こすのもあれかな

私は静かにキッチンワゴンを厨房に戻し、部屋に戻りベットの横に座って咲夜さんの寝顔を眺めながら眠りについた。

十七話

ごめんなさい！



目を開けると夜明け前でまだ薄暗かった。

私の体はまだ熱っぽい

体を起こし、隣にいる雪の顔を覗き込むと、嫌な予感が過った。

汗をかいていて呼吸の仕方がいつもと違う。

これはやばいかも

「雪？」

呼びかけると目を開け少し咳き込む

「ケホツ…ちよつとだるいので、少し休ませてもらっていいですか？」

嫌な予感が的中した。

介抱をしないといけないと思ったが、自分の体がすごく重く感じる。私も少し悪化してしまっているようだ。

「雪、なんか欲しいものある?」

「……じゃあ水を持って来ていたでもいいですか?」

いつもの透き通った声からは想像できない酷い声、その声には焦りを覚え、部屋から出て厨房へ向かった。

急がないといけないのだが、能力を使うと体力を消耗するため歩きで向かう。

厨房に備え付けられている水道の蛇口をひねり、コップに水を汲んだ。

部屋に戻り、雪の額に手を当てるもなにも感じる事はできない。

自分の体温と同じくらい高いのだろうか。

水囊でも持って来ればよかった

頭が痛くてうまく回らない

「雪、水を汲んできたけど」

声をかけると頷くものの、飲む力なんて残っていないみたいで、すぐに目を閉じてしまった。

この水を飲んでしまおうか

また汲んでくれればいいよね

ゴクツ…ゴクン

汲んできた水を飲み干しても全然喉の渇きは治らない。

「咲夜さん」

後ろから呼ばれて驚き振り向くと、雪は目を細め、口角を少し上げた。

「具合悪かったんですね。申し訳ありませんでした。」

「私は……」

「具合悪いのであれば、横になって休んでください」

そしてまた目を閉じた。

うつしてしまったのは私なのに、謝ろうと思っても声が出なかった。

出なかったというより出す事が出来なかった。

「はやく横になってください」

雪はフラフラと立ち上がり、私の肩に手を置き、寝るように催促する。

「貴方の方こそ寝なさいよ、私はだいぶ良くなったから」

雪は結構です、と言って元いた椅子に腰掛ける。

熱で体が思うように動かないのか、座った後もとてもだるそうだった。

「早く横に」

雪の事を静かに抱えて静かにベッドに寝かせる。
物凄く軽くて一瞬びっくりしてしまった。

雪は私のしようとしている事に気付いたみたい。

「咲夜……さん」

でも軽く肩を押されただけで、大きく抵抗はされなかった。

その力も残っていないかったのだろう。

「ありがとうございます」

優しいその言葉に泣きそうになってくる

ベットに移動させた後、雪が座っていた椅子に腰掛けた。

十八話　　ああ医者よ……空？

「雪さー…あれ？咲夜さん？」

扉が開いて顔を出したのは美鈴だった。

美鈴に雪の事を伝え、また横になることにした。

「美鈴さん美鈴さーん！」

騒がしいな

廊下は静かに歩いてくれないと

病人がいるんだから

「どうしました？そんなに慌てて」

「先程、永琳さんがいらっしやいまして、咲夜さんに合わせてと」
ん？

永琳？

「今はどこに？」

「お嬢様のお部屋に」

美鈴と小悪魔は部屋から飛び出して行ってしまった。

暇になり、少し呼吸の荒い雪に目を向ける。

最初はお嬢様の信頼も厚くて。

私がここに来る前からの関係だとしたら仕方ないが、私を救ってくださったお嬢様を取られたような気がした。

ふふっ、私は子供か

それからは辛く当たってしまったたり、相手が不快になるような態度で接してしまっ
た。

「ごめんなさい」

私の目からは涙が…

「なぜ…泣いてるのですか? そんなに辛かったですか?」

いつの間にか雪は目を開けていて、いつもの優しい笑顔でこちらを見ていた。
い、いつの間に起きた?!

ゆつくりと大量の包帯が巻かれた腕を伸ばしてきて、指で私の涙をぬぐった。

その後子供をあやすように頭を優しく撫でる。

泣いていたのを見られて私は窓に顔を向けてしまった。

「咲夜さん…ゴホッ」

「寝てなさいよ、妖獣だろうがなんだろうが体調崩したら寝てるのがいいわ」
「失礼するわ」

部屋に永琳が静かに入ってきた。

手には薬箱。

「風邪らしいじゃない咲夜。あら？雪も？」

「私は、大丈夫です。私はいいいので咲夜さんを見てください。まだ熱と咳ですが違う症状が出てくる前に治さないと…命に、関わる」

永琳は咲夜の診察を始めた。

風邪みたい

「大丈夫なの？」

部屋には紅魔館の住人全員が揃っていた。

「まあ風邪だと侮らないほうがいいわ」

「永琳さん…ゲホッ、紅魔館へは何用でいらっしやっただんですか？」

永琳はキョトンとした顔になる。

「永遠亭に手紙が、紅魔館に風邪の患者1名って。貴方が出したんじゃないの？」

チリン

不意に外から鈴の音が聞こえてきた。

「なんの音？」

「これは……」

窓を開けた。

自身の手足の変化を解き、獣の物に変え、窓の外に飛び出し壁を駆け上っていった。

「「え？」」

戻ってきた雪は口に黒い炎で作られ、首の所に鈴が付いている狐のような幻獣をくわえていた。

「雪さん？くわえていらっしやるのは？」

「うわ！つい癖で、すみません」

雪は恥ずかしそうにくわえていた幻獣を美鈴さんに渡した。

「空の使う幻獣です。これがいるってことは近くに空が……」

雪は立っているのも辛かったのか窓枠に腰掛けた。

すると煽るような風が吹いて、そのまま頭から……

「雪！」

レミリアは落ちていく雪を止めようと窓から飛び出したが、窓枠に羽が引っかかりレミリアもバランスを崩す。

「キヤア！」

「お嬢様！」

咲夜の声とともに、美鈴の持っていた幻獣が窓から飛び降りる。くるくると回転して一瞬人型になる。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

全員が耳を塞いだその時、雪の音が紅魔館に響いた。

「空あー！」

音が止み、全員が窓の外を見ると、雪は森の方に向かって叫んでいて、レミリアは赤い羽織の上に寝かされていた。

雪はフラフラと立ち上がり森の方へ歩いていった。

森の奥へと歩いていく人影を追った。

雪には確かに見えていたのだ。

人影の腰のあたりに生えている、《八本》の大きな尻尾を。

十九話 キャー鬼よ、鬼が出たわ

「さあ！探しに行くわよ！」

都に神器探しに行く準備が終わり早速向かう。

母はなぜかとても楽しそう。

「あのく、なんでそんなにハイテンションなんですか？」

「目的はあれだけど都に戻れるんでしょ！」

母の言葉を聞いた瞬間、心がチクリと痛んだ。

なぜかは分からないけど、母を都に連れて行っていいのだろうか、考えてしまう。

「橙はお留守番する？」

聞くとこつちを向いて頬を膨らませた。

「行きたいです！」

「危険かもしれないのよ？空……駿がもしも槍を取りに来てたら」

橙はビビリ気味だったが行く気は満々だ。

霊夢も連れて早速都に向かう途中、門に続く一本道を歩いて行くと、あの時の光景がフラッシュバックして来て頭を押さえしやがみこむ。

私があの時、人間に捕まったりしなければ

私があの時、人間なんて助けなければ

私があの時、落とし穴に気付ければ

私があの時、空姉の言う事を聞いていれば

私があの時、駄々をこねなければ

私があの時………

私………

「無理なら帰きなさい」

いつもの脳天気でふわふわとした声色ではなく、落ち着いていつもよりも低い声色で発せられたその一言に背中にぞくりとする感覚が。

母なりにいろんな気持ちを含めて言ったのだろう。

「いえ、大丈夫です」

トラウマの一本道を歩いて行く。

都に着くと異様な雰囲気にもまれる。

「これは、一体」

あの時と同じなのは粉々になった塀や門、抉れた地面、地面から突き出る氷柱、ところどころ破壊された屋敷。

だが明らかに違う点、それは、

「死体が消えてる？」

ところどころには血痕はあるものの、肝心の死体が見つからない。

こんな短期間で妖怪に食べられるような量じゃなかったし

どういう事だ？

あたりを警戒ついでによく観察すると、屋敷の奥に大きな石碑が建てられていた。

母はその石碑に近づき、刻まれていた文字を指でなぞる。

「亡くなったみんなの名前が」

「え?!」

近づいてみると、一番上に父の名前が書かれており、その下からはたくさん名前が書かれていた。

「これは誰が、まさか空じゃないでしょうね」

「まだ分からないわ。けど、空が暴れてからこの都に誰かが侵入した事は確かね」

「善人かもしくは…悪人か…」

紫様が眩くと、それを遮るように霊夢がお札を構える。
「残念、先客…悪人ね」

霊夢の視線の先には黒い霧の塊と八本の尻尾が見える。
どうやら各部屋を漁っているようだ。

霊夢が足に力を込めると、床が軋む音がした。

その音で気づいたのか黒い霧の塊が振り向く。

霧の隙間から角が見えた。

「貴様ら」

二十話 腕痛い



「空あ。おいてかないで」

森の方向を向くと空は居なくて、小さな幻獣が座っているだけ。

「お嬢様！」

雪に歩み寄ろうとするお嬢様を必死に支えながらも、雪に声をかけ続けていた。

「うう…雪！」

「雪」

レミリアがいくら声をかけても、私が腕を掴んでもそれを振り払い森の方へゆっくりと歩いて行こうとする。

すると幻獣がスツと立ち上がった。

「雪」

「喋った!?!」

声を聞いた雪はその場にストンとすわりこんだ。

「こいつが話してるといふ事は、私は都に狐神器を取りに行つてると思う。おそらく藍たちも巻物を解読して向かつてると思う。」

「・・・うん」

「そこで、藍たちと私が接触した時私を止めてくれ。私の弱点はお前がよく知つてると思う。もし藍に術を使ってしまったら、駿に乗っ取られてお前達を殺そうとしたら私を容赦なく殺してくれ」

「そんなつ!」

「これはお前にしか頼めないんだ。この幻獣についていけば私のところに来れるだろう。雪……頼んだぞ」

幻獣が話している最中雪さんはずっと肩を震わせ、泣いているようだった。

話が終わるとその場から立ち上がり、こちらに向き直った。

「雪……行くのね」

「は」

すると雪は近くに落ちていた木の棒を持って来て、地面に何やら難しい魔法陣を書いた。

パチュリー様も首を傾げて見ていた。

「出来た！ 咲夜さん私とここに立ってくれないませんか？」

「え？……は、はい！ いいですけど」

恐る恐る人の中に立つと、雪が貸してくださいと言って、私の左足の太ももの辺りにつけておいたナイフをとった。

「何する気？」

「これは何かを犠牲にして病気や怪我などを100%治す術の陣です。痛いのであまり使いたくはなかったのですが……」

パチュリー様は腕を組み、ここにいる雪以外の全員が思っていた事を質問した。

「何を犠牲に？あと、そのナイフは何に使うの？」

「私の左手首から切り落とします」

全員が硬直する。

この人は今なんて言った？

腕を切り落とす、そんなことできるのか？

ナイフはこれでもかというくらい鋭く研いでるし、これで少し切っただけでもかなり

痛いのに『切り落す』!?

「は？…あなたの手を？」

お嬢様は怒っているようなそんな声色で雪を見る。

その目に怯んだのか雪は説明を加える。

「ああ！大丈夫ですよ。一旦は切り落としますけどその後すぐに再生魔法もかかりますので痛いのは一瞬だけです。本当、これマジ」

雪の追加説明に納得したのかお嬢様は静かに頷いた。

「じゃあいってきます」

美鈴と小悪魔は顔を背け、パチユリー様とお嬢様、永琳は雪を見ている。

・・・バキッ・・・

雪は静かに自らの腕にナイフを入れる。

途中まで切って、骨のところまで止まったようなのでナイフを口にくわえ、右手で骨もろとも折り、引きちぎって地面に置く。

断面からは鮮血がまるで蛇口をひねったように大量に流れ出す。

「雪…大丈…」

「動、かないで。陣が崩…れる」

雪の表情にはさつきとは違う苦痛の表情を浮かべ、ギリギリと歯が割れるほど食いし

ばっていた。

魔法陣から緑と白の混ざったような光が放たれ眩しさに咄嗟に目を閉じた。

「咲夜っ！」

お嬢様の声でゆっくり目を開けてみる。

先程までとは違う元気いっぱい雪と、私の腕を押さえ顔を見上げているお嬢様の姿

が。

「お嬢様……?」

私は手を広げたり閉じたりしてみる。

「まだどこか痛いところありますか? あつたらもう一回やりますけど」

もう痛い思いをさせてはいけない!

「いい! いいから! 本当にだるさとかが消えたからちよつとビックリしただけだから」

レミリアが雪に近づいていく。

「雪、二度とこんな陣描かないで。悪用されるかもしれないのよ」

「私しか使えないチート技ですのでご心配なく」

レミリアは雪のその一言を聞くと、屋敷に向かって歩いて行つた。

「ではレミリアさん私止めに行つてきます」

雪はレミリアの背中に向かって言うが、レミリアは気にせず玄関の扉に手をかける。

「私も行かせてください。空さんに……」

「無傷では済みませんよ?」

雪の声は低く、落ち着いていてまるで威嚇のよう。

・
・

「構いません。よろしいですか? お嬢様」

「ええ」

私は咲夜さんを抱えて幻獣の後を追った。

咲夜さんは自分で走ると言っていたが、ここで体力を消耗されては困る。

理由は、全員が100%の力を出しても勝てない、勝てるかもしれないけど確率は0に近いかもしれない。

戦力はあればあるだけいいが、術にかかってしまえば半数以上が操られて勝ち目はない。

「空さんって狐なんですよね」

「ええ」

「なぜ操られているのでしょうか？強いのであれば操られないのに」

「一時期巫女に封印されまして、そこで封印を解かれた時に一緒にかけられたんだと思います。」

咲夜さんは驚いたようで目が見開かれている。

「封印のきつかけはある人間の女性だったんです…」

二十一話 喧嘩―?!

「里に住んでいた時、寺子屋で教師をしていたって話はしましたよね」

咲夜さんは少し考えた後頷く。

「そこで慧音や美鈴に会ったという話ですよね」

「はい、寺子屋にいた春樹くんという男の子がいたんです。その子はとてもやんちゃな子だと空から話を聞いてて、その春樹くんと秋斗が喧嘩をしてきて…」

雪は悲しそうに表情を落とす。

それを見た咲夜は不思議そうに雪の顔を覗き込む。

「雪？」

「ああ、ごめんなさい。秋斗はもう居ないから思い出すのもちよつとしんどくて」

「こちらこそごめんなさい。変な事を聞いてしまつて」

「いえいいんです。その日からあの悲劇は始まつたんです」



空達が寺子屋から帰ってきた。

「おかえり!」

「ただいま、ご飯は?」

空は帰ったら必ずご飯の献立を聞く。

「さっかな〜!」

「えーまたー? もう飽きた」

秋斗は必ず文句を言う。

これが日課となった。

文句は言わせない

無理矢理にでも食べさせてやる

秋斗の事を引きずって襖を開ける。

「おかえりなさい」

「痛! あれ? 母さん今日は起きていいの?」

「うん、今日は私がご飯作ったから」

「おばさんが!?! 本当?! よっしやー! あのままの料理と一日だけおさらばだ!」
「こーらー! 空っ!」

空を《比較的軽く》叩くと少しよろけてみせて、すぐ座り食べ始めた。

秋斗も空もニッコニコしながら食べている。

料理は苦手だけどそこまでひどい?

「じゃあ私も、いっただけ…」

トントン

誰だよ

今食べようと思ってたのに!

「すみませーん」

「私が出るから雪は食べて。はい、あれ春樹くん?と」

「春樹の姉の小春です。今日、弟がすみませんでした。お詫びと言ってはなんですが…」

何やら紙袋を渡される

「いえ、受け取れませんよ。こちらが悪かったですし、秋! 来い」

「え? ……あ、春樹」

「ごめんね秋斗くん。ほら春樹謝って」

春樹くんはうつむいてむすつとしている。

顔を見ようと空がしやがむと、横を向いてしまった。

「春樹！」

「ごめん…なさい」

「…いいよもう。もう気にしてないよ」

うん、よく言っただぞ秋斗

流石私の教育が生きてるな

「送りますよ暗くなるので。雪、送るからちよつと出てくる。」

空は小春さんと春樹さんと家を出た。

空のご飯、どうしよう

残しとく？

「食べちゃおう！」

「雪、太るよ」

「ぐぬぬ…」

違うお皿に移しテーブルの上に置いた。



夜の商店街は昼間とは大違いで、家の灯りが漏れていたり、楽しそうな笑い声が聞こえてくるようだった。

「あの、先生？」

先生?! 誰だそいつは

ああ、私か

「俺が先生なんてまだまだです。俺は空と言います」

「そうですか。家の灯りを寂しそうに見ていたのでつい気になって」

そんな目で見てたかなあ?

まあ、子供の頃とかは毎日訓練三昧で里に下りてくる事なんて滅多に無かったしな

「気にしないでください。ところでお家は」

「あの角の家です」

小春さんが指差した家の前には、女性が心配そうに立っていた。

「あ! お母さん!」

春樹くんが猛ダツシユでその女性に向かっていく。

「春樹! 小春!」

その母親は私たちが見えると、こちらに歩いてきた。

「遅かったから心配したんだよ」

「大丈夫だよ、先生がここまで送ってきてくれたから」

「ほんとうですか？有り難うございます」

深々と頭を下げられてしまい、慌てて下げ返す。

「小春、あなた今日も向こうに帰るの？」

「うん、帰らなかつたらお父様が心配するから」

ん？どういう事だ？

小春さんもここに住んでるんじゃないのか？

「でも、もう暗いし」

母親が言うと、小春さんは少しうつむき悲しそうな顔をする。

私は諦めて口を開く。

「暗いですし、俺が送りますよ」

うつむいていた小春さんが驚いたように顔を上げる。

母親の方も私の事を見る。

「じゃ、じゃあ小春をよろしくお願ひします」

「はい、では行きましようか」

「…はい」

春樹くん達に見送られ、また歩き出す。

森の近くに来るまで二人とも無言だった。

「あの」

私は無言の空間に耐え切れず、声をかける。

「さっきの迷惑でしたか？」

何の事かわからなかったようで、首をかしげて私を見る。

「送りますよっていったの」

「ああ、いいんです。私はお父様の方にいつも帰るんですけど、母が心配してほとんど毎

日言ってる事なので」

眉が下がる。

「そうですか。その家ってこんなに森に近いんですね」

「はい、もう直ぐ着くと……あ、あそこの家です」

指をさした方に顔を向けると、家と言うよりお屋敷といったほうが似合う建物がドド

ンツと立っていた。

で、でけえ!!

こんなでかい家があったなんてびっくりだ

「お帰りなさいませ」

あまりのデカさに圧倒されていると、門が開き、男が二人出てきた。

一人は深々と頭をさげるが、もう一人は偉そうに仁王立ち。

「遅かったな、春樹の件は終わったのか？」

「お父様、ごめんなさい。春樹の方は終わりました。お詫びをしに行つた際、暗いのでとこまで送つていただいたんです」

父親の方は小春さんの話を聞きながら、あごひげを撫でていた。

「ん、君は？」

私を見た瞬間、目が変わつた。

まるで嫌なものでも見るような、そんな目で私を見た。

「私、里の寺子屋で教師をしております。空と申します」

軽く頭をさげる。

「教師……いつも春樹が世話になつている」

「いえいえ、こちらこそ。では私はこちら辺で」

嫌な視線から逃げるように、今きた道に戻つていった。

二十二話 花火大会のお誘い

送って行った次の日、

寺子屋が終わって、明日の準備をしている慧音先生に、昨日の事を相談する事にした。理由は私よりも色々知ってそうだったから。

「慧音先生、ちよつと相談があるんですけどいいですか？」

「いいぞ！なんの相談だ？」

「春樹と秋が喧嘩したその日の夜に、お姉さんと謝りに来たんですよ」

「そうかそうか仲直りしたか。それで？」

「それで、暗くなってきたので家まで送っていたんですけど、その時にお姉さんに……

~~~~~

春樹くんの家に向かう途中

「あの、空さん」

「ん？どうしました？」

何やらもじもじしながら言葉を続ける。

「教師のお仕事って、お休みとかってあるんですか？」

「あ、ああー、俺はまだ手伝いみたいな感じだから、暇になったり、慧音先生の方から何か言われるまでは休みと言ってもいいですかね」

「そ、そうですか」

~~~~~

「みたいな事がありました」

「よかつたじゃないか！」

慧音先生は私の肩をバシバシと叩く。

「何が良かつたんだろう？」

「休みを聞かれた事が良かつたのかな？」

「どゆこと？」

「何が良かつたんですか？」

「その時男の姿で行ったのだろうか？モテ男は辛いな」

「何がしたいのでしょうか？」

「ちやうど明日花火大会があるから、誘ったらどうだ？」

花火大会？

なにそれ？美味しいの？

花の形の火を飛ばし合つて、それを競い合う大会？

そんな危険な大会に人間の女性を誘うの？

「花火……大会？」

「知らないのか？花火大会は空に火薬の詰めた玉を打ち出して、空に花を咲かせるんだ。とても綺麗なんだぞ」

先生の説明ではよくわからなかったが、最後の「綺麗」という言葉を信じて決意した。「それはいいですね。じゃあ誘つてみようと思います。」

アドバイスをもらつてうちに帰つた。

家の前に着いて開けようと手をかけると、その前に勢いよく雪が飛び出してきた。

「うわっ雪？なにを急いでるんだ？」

「夕飯の買い物忘れてた！」

ドジだなー

「一緒に行くよ。そろそろ買い溜めしておかないと」

荷物を家の玄関に置いて雪と商店街に向かった。

男の姿のままで行つたので商店街の人達に、「お似合いだね」と言われた。

雪は言われたことの意味がわからなかったみたいで、キョトンとした顔でこつちを見してきた。

数十分後

「後は、お肉」

「お肉屋さんには…」

「空さん？」

向かいのお店に居た小春さんが走つて来た。

小春さんも買い物をしていたようで、重そうな荷物を持っていた。

「あれ？小春さん？…あつ！小春さんに言いたい事があつたんだ！」

「私お肉買つてるから言つて来な」

私は小春さんに花火大会の事を話しをする事にした。

「小春さん。明日花火大会があるつて慧音先生に聞いたので、一緒にどうかかな？」

「本当ですか？ぜひ！」

「こんなに嬉しそうに

花火大会

そんなに楽しいのかな？」

「じゃあ夜に家まで迎えに行きますので」

「はい、じゃあこれで」

「その荷物重いでしょ？持ちますよ」

私は小春さんの手から少し強引に荷物を取る。

「いいですよ、雪さんのところに戻らなくてもいいんですか？」

後ろを向くと、雪はお肉屋さんの前で人里の人と話し込んでいた。

「ああなると時間を忘れて話し込むから大丈夫！行きましょう」

歩き出すと後ろの方をスタスタとついてきた。

「着きましたね。では私は戻ります」

「空さん明日は一人ですか？」

一人？

やっぱり男の人とは怖いのかな？

「雪は人混みとか苦手だから明日は俺と二人だ。嫌だったら雪も連れてくるけど、やっぱり二人は嫌かな？」

小春さんは私がそう言うど慌てて否定して家に入ってしまった。

荷物を外に置きっぱなしで中に入ってしまったので玄関の前に置いて商店街に戻った。

二十三話 料理

商店街に戻ると雪がお肉屋さんでまだ話しこんでいた。

「ただ話盛りが上がっているのやら」

「そうですね」

「でしよ？雪ちゃんもそう思うでしょ？」

「雪、そろそろ帰るぞー」

「うふふ、じゃあ私もこれで」

その人が帰っていくと、雪が持っていた荷物の半分以上を渡してきた。

かなり荷物が重くて手が痛くなった。

お米とかも買ったから右手にお米、左手に野菜とか魚とかを持っていて、バランスが取りづらくフラフラした。

「重っ！雪もちよっと持って」

「嫌だよ、私も持つてるもん」

雪が持つてるのはお菓子とか油揚げなど中でも軽いもの。

「私油揚げより重いもの持てないもん！」

「お前槍とか普通にもつてたじゃん」

雪が黙り込む。

都合が悪くなると黙るところ変わらないな

そこがいいんだけどね

「着いたー」

「急いで作らないと。今日は生姜焼きにしよう！」

「私が作るからお前は座ってる。お前が作ると生姜焼きが可哀想だ」

雪は、「可哀想つてなによ！」と、怒っていたが大人しく買ってきたものをしまい込

でいた。

まず、

生姜をすりおろし醤油と味醂を混ぜて作ったつけ汁にお肉をつける。

フライパンを中火で熱してから油を入れる。

お肉を広げて焦げないように焼く。

「次はお味噌汁とご飯」

煮干しで出汁をとり、豆腐とワカメを加え、味噌を溶かす。

お米を研いでおかまに入れる。

火にかけて火の強さを調整しながら炊く。

「雪、そろそろできるからおばさん連れてきて」

「ほーい」

「ただいま！」

「秋お帰りー。もう出来るから運ぶの手伝ってー！」

「分かった」

秋は素直に手伝ってくれた。

誰かさなら「後で何かくれるんでしようね」って、何か自分に得が無いとなにもやってくれないのに、本っ当に”弟”なのかなー？と思ってしまう。

「じゃあいただきますーす」

「いただきます」

「頂きます」

全員がほぼ同時に料理を口に入れる。

するとなにも言わずにパクパク、ポンポンと口に料理を入れていき、あっという間に全部なくなってしまった。

「私が片付けるから秋の事運んでやって」

雪は渋々秋をおぶって寝かせに行つた。

私は片付けと明日の準備をして部屋に向かつた。

部屋に入ると、丁度布団に入るところだった。

「なあ雪、明日の花火大会な」

「なに？小春さんと行くの？」

「え？ああ、慧音先生にいつてきたら？つて言われたからさ」

「行つてらつしやい」

雪は興味が無いのかなんなのかわからないけど、なんかそつけない。

私は、そろそろ寝ようと思つててそれを邪魔されたのが嫌だったのかな？と解釈し布団に入って寝た。



かなり走つたかな？

それにしても紅魔館から都までどんだけ離れてるんだよ。

咲夜さんも疲れてきたみたい。

「咲夜さん大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

「もう直ぐ着くと思うので」

後五分、五分あれば着く

藍：もしももう空に会ってたら

後五分だけ耐えて

お願い

二十四話

駿との接触



「空姉？」

思わず声をかけるも、こちらを振り向くこともなく白い箱を開けたまま硬直している。

「ちよつとあなた、良い加減にしなさいよ」

「チツ…邪魔をするな博麗の巫女」

霧が消えて姿が露わになる。

私の語彙力では表現出来ない禍々しい黒い体に赤黒い角が二本見える。

『『罪符 灼熱地獄』』

その鬼から発射された弾幕は都全体を囲う様にを包み込み、都のあらゆるところに火をつけた。

火の中から人の形をした何かがたくさん出てきて、一人一人が弾幕を発射している。

「……小春さん」

「おい、なにぼーつとしてる！」

「私は藍とは戦わない」

そうはつきりと口にした空の瞳は澄んでいて綺麗な色だったが、鬼が手をかざすとみるうちに瞳は紺碧色に変わっていく。

「妹だろが邪魔をするなら殺す」

「絶対に殺させない」

「空、邪魔するな」

「駿こそ、藍に触ったら許さない。この変態……ド変態！」

「誰が変態だ！お前の方こそ気持ち悪いんだよ！シスコンか！」

空姉の瞳が左右でコロコロと変わって、まるで一人二役で喧嘩をしている様。

空姉の方は私達を守ろうとして、駿とか言う方は殺そうとしている。

最後の方は守る殺す関係なくなっただけだ。

「藍！」

振り向くと雪さんが咲夜を抱えて立っただけで、咲夜さんを下ろしてこっちに走ってきた。

禍々しい奴を見ると目を見開き硬直した。

「あれ何？紫あれ分かる？」

「いいえ、全然」

「私にも鬼だとしかわからないわ。でも鬼ならなんでここに？」

雪は周りを見回す。

「それはそれとして、この火の量だと自分が燃えちゃうかも。私が空を止めるから紫と霊夢さんは、あいつと周りのやつを」

「分かったわ」

「私も空姉を止めます」

私達は大量の弾幕を避けながら敵へと向かう。

空は喧嘩を続けているけど、駿でいる方がだんだん長くなっていった。ついには完全に駿になってしまった。

「やつと全て奪えた。さあ！始めようか」

「藍、スペルカードを捨てなさい。」

私がスペルカードを取り出すと雪さんにぶんどられる。

「どうしてですか？ スペルカードを捨ててしまったら戦う術が」

「ここからは全て近接戦よ。片手がスペルカードで使えなかったら死ぬ。こいつにスペルカードは通じないし、この炎で能力も弱くなっていて勝ち目が」

咲夜は自分の能力を使おうとするも、数秒しか使うことができないらしい。

紫様も一瞬しかスキマを開けることができない。

「幻想郷のルールは奴には通じない。美しさなんて関係なくあいつは私たちを殺そうとしてくる」

駿が私めがけてすごいスピードで迫ってくるが、駿の鬼気迫っているような表情に動くことができず目を瞑る。

グチュア！

不思議な音が響いた。

目を開けると、雪さんが前に立っていて頬には抉られたような傷が、一方駿の方は顔を覆つてのたれ回っている。

「イア”ア”ア”ア”！」

「はあ、くそっ片方しかできなかった」

「何を……ええ？」

駿は涙のようなものを流していると思った。それは涙ではなく血だった。

雪さんの手は真つ赤に染まっかけていて、持っていたものを地面に落とす。持っていたのは……目だった。

あの一瞬で雪さんが空姉の目を抉ったのだ。

「雪！お前空の目も抉ったんだぞ！わかつてるのか？」

首だけでこつちを向く駿の眼球があつた空洞からは、鮮血が流れ出ていた。

「分かつてるわよ！でも……こうしないと」

泣きながら地面でのたれ回っている駿に向かって叫ぶ。

「空に頼まれたのよ！」

「ア”ア”ア”ア”ア”……雪あと一つ。もう一つ残ってるだろ！早く、早くしないとあ

れが」

「そうか、なら使つてやるよ！雪！」

駿は雪さんに向つて手をかざす。

雪さんの目が紺碧色に変わっていった。

「しゅ……ん。やめっ」

「雪さん！」

私の体はとつさに雪の前に出ていて空姉の顔を見た瞬間、意識が無くなった。

二十五話 主人と式



「藍！」

藍が駿の術に完全にかかってしまう。

目の色が紺碧色になってしまった。

「雪じやないがまあいいか。あの紫色の傘さしてるババアを殺せ。多分あいつが一番厄介だ」

藍はまっすぐ鬼と戦っていた紫に向かって行く。

紫は藍に気づいていなかったようで、藍のよく研がれた長い爪が紫の腹に吸い込まれていく。

紫の口から血がつーと溢れ出た。

「紫ー！」

「よそ見をするとは」

鬼の太い腕が当たり霊夢が吹っ飛ばされる。

後ろでナイフを投げていた咲夜に霊夢はぶつかり、二人で炎で覆われている壁に当たる。

「キヤアアアア!!」

「ア”アアアアア!!」

叫び声をあげる。

壁側にいた咲夜の方が重症だ。

「藍……主人に逆らったことを後悔させてあげるわ。しかも泣きながら攻撃してくるなんて」

藍は涙を流しながらも攻撃を続ける。

紫は慣れた手つきで攻撃を流すが、最初の一発が効いてきたのかフラフラし始めた。

紫達の事を見ていると、正面から声が飛んでくる。

「俺の相手はお前だよー！」

右、上、左、後ろとあらゆる方向から攻撃が降ってくる。防御するのが精一杯で反撃

できない。

「あんたなんか私に私が負けるとでも思ってるの？」

「思ってるから、攻撃してるんだが？」

くっそ、あの煽り口調むかつく！

時々攻撃が緩む瞬間が出てきた。

空が奪い始めているのだろう。

パツパツ、と目が戻る瞬間がある。

それに合わせて反撃すれば…

駿の腹に手を当て波動を飛ばす。

同時に駿も雪の顔めがけて拳を当てる。

「アガツ…やるじゃねーか。肋骨ほぼ全部バキバキに折れちまったじゃねーか」

「私も…おかげで頬骨砕けました」

笑顔を作るも骨が砕けているので片方の口角が上がらない。

私と駿の攻撃はどちらも激しくなっていき、どちらも昔の戦いの感覚を思い出し出てきた。

「これだよこれ！これがしたかったんだ！」

「ええ本当に楽しいわ！これよこれ！この感覚！」

私もつい夢中になってしまっていた。



「つ、霊夢 私が一瞬あいつの動きを止めるから、時間が進んだ瞬間、封印を」
「あんたその背中大丈夫なの?!それ」

メイド服も所々焦げ、背中の方は完全に焼け落ち、背中はひどくただれていて血が流れ出ていた。

咲夜の息も荒い。

『『幻世 ザ・ワールド』・・・霊夢!』
「死ね」

声にならない悲鳴が上がる。

咲夜が儂げな笑顔を浮かべたまま地面に向かって落ちていく。

地面に勢いよく叩きつけられて周りには尋常じゃない量の血の海が…

そのまま咲夜が起き上がることはなかった。

二十六話

封印

2人の犠牲

「もろい！もろすぎるぞ人間！先代あんなに硬くて強かったのに！」

「咲夜！」

こいつ、かなり強い

鬼だからか？

萃香や勇儀より少し強い？

いや、二人よりも圧倒的に強い。

あの時よりも私は強くなったが、私以上にこいつは強い。

「博麗の巫女よ。なぜ邪魔をする？我はこの幻想郷に迷惑はかけていない。」

「あんたの存在が目障りなのよ……は？」

不意に視界に入った雪達の異様なほどの戦い方に目が離れなかった。

鬼もそつちを向いて固まっていた。

お互い狂った笑みを浮かべ、爪で斬りあったり牙で噛みあったりとかではなく、自分の全てを使って相手の目や腕、足などを切り取ろうというような戦い方だったのだ。

あいつも固まってる
今だっ！

『神技 八方鬼縛陣』

「ぐああああああ！」

『霊符 夢想封印』『夢符 二重結界』

鬼の身体を何重にも結界が張られる。

「くそっ！俺を封印したらお前も死ぬぞ！博麗の巫女おおお!!」

封印完了！

え？

私は体から力が全て抜けていくような感覚に襲われ完全に動けなく。
動かなくなつた。



「かなり…きついわね」

腹の回復が間に合わない。

このままだと、

「これだけは使いたくなかったんだけど、我慢しなさいよ藍、ハアツ!!」
「アアアアアアアア」

藍はゆっくり地面に向かって落ちていく。

私は急いで藍を抱えて地面に下ろすと藍が目をゆっくり開けた。

「紫……様？」

「もう少し休んでいなさい」

「紫様、申し訳ありませんでした」

小刻みに震えていて泣いているみたいだ。

「いいのよ……うう」

回復が追いつかない

深くまで行ってしまったみたいね

力が……はいら、ない

「紫様！しっかり」

藍の肩を借りて立つのがやっとだ。

雪達の戦闘はどんどん激しさを増していき、両方ともものすごい怪我を負っている。

「もつと……もつとよー！」

「ああーもつとだー！」

その表情はもうこの世のものとは思えないものになっている。

これが戦狐の戦い方？

下手したら藍もこうなっていたのね。

「雪さん！空姉！」

「ア？ア？」

「……藍！他の心配をしなさい！咲夜さんは？霊夢さんは？あなたの式の橙は！」

藍が声をかけても駿は邪魔をするなど言わんばかりの視線を飛ばすだけ。

雪は正気を取り戻したみたい。

そういえば戦っていた霊夢達の姿が見えない。

橙は母上と屋敷の中に入って行ったけど、鬼と戦っていた霊夢と咲夜がいなのはな
んでだ？

鬼がいないってことは二人が倒したか？

鬼がいたところに目をやると倒れている霊夢の姿が、近くには咲夜も倒れていた。

「霊夢！咲夜！」

「紫様!?!」

藍の支えてくれていた手を振り離し、霊夢の元へと駆け寄った。

霊夢らはすでに息絶えていて、いくら呼んでも体を揺すってもいくら声をかけても、
再び、

凛々しい笑顔を紫に向けることはなかった。

二十七話 ガチギレ

「橙！どこだ橙！」

「藍！こつち！」

呼ばれて屋敷の入り口を見ると、今にも死にそうな母と母におぶわれている橙の姿が見えた。

かなり重症のようであの母がかなり息があがっている。

「橙！母上！何があつたのですか？」

近づいて橙を背負うのを代わると、私の顔を覗き込んだ。

「屋敷の中に槍とかあるかなって探したら、案の定罨が仕掛けられてね。元壺番隊長の頃の力を出せなかつた」

優しい笑顔を向けられる。

母の腕の骨はバキバキに折れているようで、母が動くたびに一緒に揺れ動いていた。

「橙は？なぜ」

「狐神器は見つけたんだけど、その時屋敷の天井の張りが降ってきて、私を守るために橙ちゃんが」

「そんな」

私は涙をこらえるだけで精一杯だった。

背中に柔らかい重さを感じながら、紫様の元へよろよろと近づいていく。

母は覚束ない足で雪の元へ向かった

「雪ちゃんー」

母が扇を投げる。

扇は美しい曲線を描いて雪が挙げた手の中に収まる。

雪がそれを取るところから一帯の空気が変わった。

重々しくなり歩こうとすると、何やら波動のようなものが出ているのか、ゆっくりにしか歩けなかった。

「雪お前、それを使ったらどうなるかわかっているのか？」

掌を向け前傾姿勢になり、暴れる雪をなだめるように語りかけていた。

「おい、落ち着け……な？」

「分かっている……分かっているわよ！これを使ったらここら一帯、この炎の結界の中は地

面が抉られ地面にいる藍達は死ぬかもしれない」

駿の制止も聞かず、ただ淡々と喋り続ける。

雪さん。

なんてものを持っているのですか？

でも私達が耐えれば駿は死ぬ

「雪さん使つて下さい。私達は大丈夫です。早くしないと完全に取り込まれる」

「藍…分かったわ」

「空も死ぬんだぞ！」

決心を決めた雪に対し苦し紛れに叫ぶと、雪さんの動きが止まる。

扇を使うのをためらい始めた。

「紫…生きてる?！」

「…なんとかね…でもあと少しで」

雪が紫の元へと駆け寄って行く。

それを追うように駿も動き出したので母と私で行く先を塞ぐ。

「どけよー！」

「行かせない！」

「空起きなさい！いつまで寝ているの」

「うるさい！この体は俺のものだ！やつと手に入れたんだ、簡単に手放すわけにはいかない！」

駿は私の顔に向かって拳を飛ばす…が、スレスレのところでもう片方の手が伸びてきた手を掴み抑え、拳が目の前で止まる。

「藍ニ触レタラ許サナイト言ツタダロウ？私ノ妹ニ触ロウトスルナンテ良イ度胸ダナ駿」

「空」

「雪ダツタライイカナ？ト思ツタケド藍ハ許サナイ」

その時の声は昔一度だけ聞いたことのあるガチでキレてる、激怒している声だった。

空は片方の手で目を潰した。

グチャ

「コレデ完全ニ見エナクナツタナ」

二十八話 人格の目覚め 2



「紫！」

「(ハ)(ハ)…ト」

紫は咲夜と霊夢、橙を横に寝かせ、力なく座っていた。その辺りには血が広がっている。

「紫、最後一回だけスキマ開けられる？」

「ええ、本当の最後になりそうだけど？」

冗談と言えない冗談を言う紫の肩を掴む。

「扇を振って能力が発動したら数秒間この炎の結界が緩む、だからその時全員連れて外に出て、人里にある元々私達が住んでた家に入ってた」

「あなたは？あなたも巻き添えに」

「私はいいの。この…幻獣について行って」

幻獣を創り出し紫の手に乗せ、すぐに駿の元へ戻る。

紫が何か叫んだようだったが聞いていない暇はない。

「おばさん、藍」

駿を見ると雪がその場に止まる。

「どうしてどっちも潰れてるの？」

「空姉が」

「そうか、あなたもう終わったわね。視界を奪われた今のあなたは私に勝てない」

雪は扇を使う隙を作るために攻撃する。

視界が奪われている駿はがむしやらに拳や術を使ってるが、雪は弱点を正確に突き体力を削っていった。

私達は紫様達の元へと駆け寄っていく。

「母上…そもそも駿って誰なんですか？」

「空のもう一つの人格よ。あなたの前、空と雪ちゃんの代でその秘術は禁じたんだけど、もう一つの人格で戦うことによつて情を捨て、完全に戦闘に打ち込めると言うものなの」

「じゃあ雪さんにもっ？」

「雪ちゃんの方は駿よりも強いもう一つの人格を持っている。」

「それを出せば……」

「強力な分、飲み込まれるのも早いだよ。空は時々正気に戻っていたけど、雪だと数十分

……いや、数分で飲み込まれる」

顔を俯かせ考え込む母の上から声が飛んでくる。

駿のとても明るい声だった。

「雪！ そうだよ悠を出せ！」

悠？ それが雪さんのもう一つの人格？

「出せよ！ 悠！ 起きろ！」

「やめて！」

駿が怒鳴るように催促をすると、雪さんが自ら勢いよく地面に向かって落ちていき、大きなクレーターができた。

その中心で頭を抱えながら地面にうつ伏せになる。

「いやああ!! ああ！」

自分の頭をぎりりと締め付けるようにして必死に抑える。

力が強いせいか抑えてるところから血が流れていた。

クレーターの中を、まるで水から出た魚のようにのたうち回り頭を抑え叫び続ける。

「藍！行くわよ！」

「行くつてどこに?!」

「アレから離れるのよ！」

アレつて雪さんでしょ？

なんで雪さんは地面に寝てるの？

駿はなぜニコニコしているの？

雪さんはクレーターの中心で動かなくなっていた。

でも、かすかには動いていて生きていることは確かだ。

するとゆっくりと立ち上がった。

「まだ眠いんだけど」

その人は確かに雪の容姿をしていたが、雰囲気は全く違う。

雪さんは凛々しさの中にどこか幼い部分を感じられるが、今の雪さんから感じるものは、純粋な恐怖。

近くにいたら殺されるのではないかと思えるほどの殺気で満ち溢れていた。

「なあ悠、お前は私の味方だろうな。戦おうぜ、そしてお前のそれと私のこの体を完全に自分のものに…」

駿の言葉が終わる前にあくびをしながら話す。

「戦うのはいいよ？ふぁーあ、あと……100年くらい寝てても良いでしょー。あーねっむ。これだから戦は嫌いなものよ、睡眠妨害もほどほどにしてよねー」

悠が体を伸ばすため体をねじると、後方にいた藍と目があう。

興味津々な様子で藍に近づいていく。

「…天？大つきくなつたねー！」

「この子には近づかないで」

急に近づいてきて私の顔を至近距離から見つめてきたため咄嗟に離れる。

そうすると悠と私の間に母が立った。

「んー？どいてよー」

悠は満面の笑みを浮かべながら母の腰のあたりを思いつき蹴る。

「うっ」

蹴られた衝撃で吹っ飛んだ母に駆け寄り起こす。

「母上！あなた誰?!誰なのよ！」

「分からない？そっかあちっちゃかったもんねー。しょうがないか、じゃあ…」

少し考えるそぶりを見せ、その後に子供のような無邪気な笑顔を見せ言葉を放った。

「殺してもいいよね！」

二十九話 死の代償

「なーんちゃって！冗談、冗談だって、殺すわけないでしょ。だからそんな怯えないで」
そう言われワシヤワシヤと乱暴に頭を撫でられる。

駿はあり得ないという顔をして悠に怒鳴りかかる。

「は？どういう事だよ！早く殺れ！そいつを殺せば空は完全に戦意を失って、完全に支配できるのに。雪だって！」

「あなた…雪ちゃん？」

「残念ながら悠です。でも私…これ！貫つちやっただからー！」

どこに隠し持っていたのか、悠は駿の身体に付いているべき右肘から先を持って軽快に笑っていた。

「返せ！」

気付いた駿は傷口を強く掴み、悠が持つ腕に向かって飛びかかった。
それをひよいとかわし、ニコニコしながら私たちの方に飛んでくる。

「だって雪が腕取れば『いい』って言ったんだもん！そりゃあ話に乗るしかないじゃん」
駿は痛みに耐えようとじめんに膝をつき、肘のあたりを押さえ悶絶している。

「……や、ばい。そ、らあ！まだ……まだ私は！あ……う」
少ししたらゆっくりと立ち上がる。

雰囲気の変わったその狐はゆっくりと、もう見えることのない目で空を見上げる。

「空姉？ですか？」

「妹にそんな怯えたような声色で話しかけられるほど、私はひどいことをしてしまったのか？」

「空なのね、良かったわ！」

母と私は空姉に駆け寄る。

もう空姉の目にはなにも映らないけど、しっかりと私たちの方を向いてくれた。
「ねえ駿は？」

シリアスな雰囲気をぶち壊すような悠に空は笑いかける。

「もう出てこさせないさ。ありがとうな引き戻してくれて」

「べーつにー、雪がとつたら良いよーって言ったから」

悠は愛おしそうに空の腕を撫でる。

「悠、私の腕がそんなに欲しいのか？」

「うん。でもくれないでしょ」

悠は子供のように拗ねたような表情を浮かべる。

空姉は悠に向けて微笑む。

「それあげるよ」

「なに言ってるの?!それがなかったらあなた腕が再生できないのよ?」

「そうですよ空姉!」

私と母が止めるも聞こうとしない。

「本当に?本当にくれるの?」

「その代わり雪を……雪に変わってくれないか?頼む。今雪が必要なんだ」

悠はニコツと笑って空姉に駆け寄って、空姉の頭もワシャワシャと撫でる。

「良いよ!」

悠は目を閉じて眉間にぐっと力を込める。

すると、空姉の右腕が消えていき、目を開けた時には雪さんに戻っていた。

「空!」

雪さんは空に抱きついてワンワン泣く。

目を奪ってしまったことに対しての罪悪感からなのか、本人にも涙が止められないらしい。

空姉はそんな雪さんを引き剥がした。

「お前が一緒に来ていたメイドさんと今の代の巫女、あの化け猫はどうした？ 気配が感じられないんだが」

残っている空以外の藍、雪、紫、母は顔を伏せるが、空にはそれがわからない。

なおも話を続ける。

「あのメイドは紅魔館から来たのだろうか？ レミリアの匂いと、紅茶のいい香りがかすかに残ってる」

空は懐かしいものでも見るように言う。

咲夜は地面に突っ伏していて、目を閉じていても凛々しい顔だと分かる。

もう目覚めることはないが。

「博麗の巫女はむかつく先代の匂いがする。神社をあまり離れたらダメだぞ？ 境内が汚れてしまう。先代は境内の掃除ばかりしていたからな」

空は旧友の話をするように言う。

霊夢は地面に落ちた衝撃で、顔面の骨が崩れ、あの子どもっぽい所もあるが大人びた綺麗な顔が無残な事に。

「あの猫は藍と同じ匂いがする。匂いはするのに気配がない。何故だ？」

空は疑問を浮かべるように言う。

橙は母を救った時に背中に木材が刺さっていて、抜くと血が大量に出てくるのでそのままにしているの、地面から突き出た木片に突き刺さっているように見える。

「三人は…」

「しかも、今言った匂いに血の匂いが混ざっている。怪我をしているのか？雪治してやってくれよ」

「三人は死んだわ」

雪が言うとうつつすらと微笑んでいた空の顔から笑みが消える。

空は残っている左手で顔を覆う。

「私が殺したのか？」

声が震えていた。

どんな事があっても冷静で、慌てているところもそんなに見た事がないあの空姉の聲が震えている。

「違うわ空、貴方じゃない。あの鬼がやったのよ」

「違くない、私だ。私が巻き込んでしまったから、鬼の言うことに従ってしまったから、私があの時…」

空はフラフラと血の混ざった匂いを頼りに三人に近づき膝をつく。

一人一人、顔の輪郭をなぞっていく。

「私が紅魔館と博麗神社に連れて行くわ」

紫がスキマを開こうとすると、空が制止の声を上げる。

「待ってくれ。母上、私の……この背中の紋章は儀式の紋章ですね」

空は着物を脱ぎ背中を見せる。

「ええ、そうよ。まさか……貴方儀式をやるんじゃないでしょうね!」

「ダメよ空！儀式は、私達が都を捨ててまで回避した災い」

「儀式ってなんのですか?」

空は儀式の説明をしながら、手の感覚だけで陣を地面に書いていく。

「これしか方法がない。母上、私を封印してくれますか?雪は母上が封印し終わった後、

私を封印から解いてくれ。私が復活したら、私の命と引き換えに三人と藍、紫の怪我を

完全に治す」

母上と雪は一度こう言ったら聞かないことを知っているるので、準備を一緒に進めてい

る。

藍は啞然として紫のそばにいた。

三十話 儀式



「雪、そっち終わったか？」

「ええ、これで出来るはず。おばさんそっちの方良いですか？」

「良いわよ」

三人の連携は素晴らしい。

私は儀式を知らないから、紫様についていることしかできない。

紫様は私が負わせてしまった傷に苦しんでいて。

そばにいたことさえも出来なくなるような、そんな事をしてしまった罪悪感に押しつぶされそうになる。

霊夢や咲夜も私が駿に操られなければ、紫様と戦って命を落とすことなく、今この場

所で一緒に入れたかもしれない。

橙も私が一緒に行つていれば、死ぬこともなかったであろう。

あの時私が…

「藍、それ以上自分の事を責めるのはやめなさい。後、支えてくれるのはいいんだけど。そろそろ横にしてちょうだい」

「はい…紫様」

ゆっくりと下ろし紫様を膝枕する。

この時、橙がいたら変わつてくれと言うんだろうな。

「その顔、やめてちょうだい」

見下ろすと紫様は笑っていた。

何故笑っているのか分からない。

「何故笑っているのですか？」

「何故かしらね。わからないわ」

「準備完了よ」

儀式の準備が終わったみたいで、3人は私たちのもとに集まった。

この儀式が終わったら空姉にも、雪さんにも、母上にも会えなくなる。

そんなことを考えて涙がこぼれてしまった。

「藍、泣くな」

空姉が私に喝を入れる。

涙声で私が紫様と話していたのが聞こえたのだろう。

あの時の雪さんのように指で涙を拭われ、あの時の雪さんと違って叱られる。

「お前が泣いて何になる？お前はしゃんと構えて笑っているよ」

「ちよつと空」

なだめようとした雪さんの手を払いのける。

「雪は黙ってる。藍、私は今お前の顔が見えない、けどな、お前が泣いている表情が

はつきり感じられる」

「空姉……」

叱られてるので下を向いていると、ぽんつと頭に手が置かれ、優しく撫でられる。

「そんな声をされると私が死を今よりもつと怖く感じる。私は恐怖に満ちた心で死にた

くない。できれば笑って死にたい」

「空貴方……」

紫様も心配そうな声を出す。

「死ぬのは誰しも怖い。でも、今まで私は姉として何もできていない。だから……」
空姉は私にしか聞こえないほど小さな声で呟いた。

「最後までいい、姉らしく妹の事を笑顔にしてあげるようなことをさせてくれよ」
「もう行くわよ」

母が陣を展開して空姉を待っていた。

雪さんの肩に手を置き立ち上がり、背を向け、歩き出す。

「なあ雪」

「何?」

「私は姉らしい事何か出来たかな?」

「私が姉として出来なかつた事、貴方は出来たんじゃないかしら?」
「また藍に2人で一緒に会えるよな」

雪さんはその問いかけには答えなかつた。

空姉は陣の上に立つ。

雪さんは空姉に背を向け、歩いてこちらに来る。泣いているようだ。

空姉に涙を見せないようにしているのだろう。

「藍」

私の前に膝をつき、私の胸に顔を埋め肩を震わせる。

陣の上に立つ空姉は笑顔でいるので、雪さんを起こして笑顔を向ける。

「そうよね、こんな顔見せられないわね」

私達が笑顔を作ると、封印の陣から走馬灯のようなものが出てきて、私達の頭の中に入ってきて：

走馬灯 episode

あの日の思い出



体を揺さぶられて目が覚める。

「空さん！」

目の前には秋がいた。

「秋？はよー」

寝ぼけながら起き上がると、着物を渡された。

少し慌ててるようだ。

「さつき春樹のお姉さんが来てて、居間で待ってもらってるんですけど」

「嘘!?今行くから！」

今まだお昼前だろ？

夜だったよな？約束

「起きたー？」

雪が顔を出す。

「もう来てるよー。早くねー」

急いで布団をしまつて、寝巻きから男物の服に着替え、自分に変化をかける。

みるみるうちに姿が変わりあつという間に男の姿に。

部屋から走つて居間に向かう。

「小春さん！」

息を整えながら小春さんの前に座る。

「空さん、勝手に来てすみません。どうしても一緒に来ていただきたいところがありました」

「なんですか？」

「えつと、そのー」

小春さんはチラチラとこつちを見ながらも、もじもじしていて、一向に話す気配が無い。

「あー、空？外で話したら？買ってきて欲しいものもあるし、それに」

雪は小春さんと私を交互に見て、買ってくるものが書いてある紙を渡してきた後、私

にしか聞こえない声で呟いた。

「外のほうがいいかもだし」

その言葉の意味が私には理解できなかった。

「…?じゃあ小春さん行きましようか」

「は、はい!お邪魔しました」

「いってらーっしやい」

玄関を開けて外を見ると、いつも以上に人が沢山居て、お祭りの屋台の準備をしているようだ。

そんなにお祭りって楽しいものなのかな?と思ってしまった。

周りの雰囲気を見るに、子供からババ・・えー、お年寄りまでもが楽しみにしているみたい。

まだ開く前の屋台に『茶』や『お団子』と書かれたものがあつた。

小春さんは持っていた小さな巾着袋の中を漁っていたが、忘れ物をしたようでオロオロしていた。

「えっと、お財布を家に…」

来た道に戻ろうとしていたので、急いで手を掴んで止める。

「お財布ですか?落としたりした訳じゃないですよね?」

「そうなんですけど…」

まあ、お金は私なんか適当なものをお金に見えるようにして払うだけだね。

「じゃあ大丈夫です。行きましようよ、丁度食べてみたいものを見つけました」

「何ですか？」

「あそこに書いてあるお団子っていうのです」

お団子と書いてある屋台を指差しながら言うと、小春さんは驚いた表情になった。

「お団子食べたことないんですか?!」

え!?

なんでそんなに驚くの? 変なこと言った?

食べたことないから食べたいって言っただけなのに

じゃあ…:と言つて私の手を引いて小春さんは商店街の外れの方へ引つ張つていった。

連れられてきたのは小春さんを送り届けた時に来た屋敷。

小春さんの家だった。

門の前に着くと何人か人が出てきて、中に入ると一斉に頭を下げ、

「おかえりなさいませ」と、言った。

なんかびびって一瞬入るのを躊躇った。

「ただいま。お父様いる?」

「はい、書齋にいらつしやいます。お荷物お持ちします」

「ありがとうございます」

屋敷の中は、私が作った家の中の空間よりも少し大きいくらい、うちよりも綺麗だ。

「どうぞ座っててください」

「は、はい」

客間のような部屋に通され、小春さんは部屋を出て行ってしまった。

何してよう

暇だ

えーつと

何もねえ

「失礼いたします」

先程、門のところにいた人の一人がお茶と、お餅のようなものが串に刺さっているも

のを2人分置いてった。

「あ、ありがとうございます」

どうしようかと迷っていると、小春さんが戻ってきた。

「あ、空さん、どうぞ食べて下さい。お団子食べたいんですね」

「これがお団子ですか？美味しそうですね」

お団子を口に運ぶ、もちもちしていて、初めて食べたが、とても気に入った。

「ふふ、そんなに美味しいですか？」

「はい！美味しいです！初めて食べたのですが、ほんのり甘くて美味しいですね」

私が食べているのを見ていた小春さんは、静かに自分のお団子を差し出してきた。

「これも食べて下さい」

「小春さんは食べないんですか？」

聞くと、クスツと笑った。

「あんなに美味しそうに食べるので」

そんなに美味しそうに食べてたかな？

普通に食べてなかった？

「じゃあ遠慮なく頂きます」

差し出されたお団子に手を伸ばす。

食べるとさっつきのようにもちもちしてた。

「ここつて小春さんの家ですか?」

「え? ええ、まあ。春樹は母の家にいるのでここにはいませんが」

「…そうですか」

私はそれ以上深くは聞かなかつた。

お団子を食べっていると、小春さんが真剣な表情で私の方を見ている事に気付いた。

「ん? 顔に何か付いてます?」

「いえ。あの、一つお願い良いですか?」

「俺に出来ることなら」

真面目な顔で見てるのでどんな真面目な話かと思つたら、

「少しの間だけ彼氏の”ふり”をしてくれませんか?」

ん?

えーと

「彼氏の”ふり”?」

「はい、こんなこと頼めるのは空さんしかいないんです。お願いします」

よくわからない

人間の女性は男性に自分の彼氏のふりをさせるのが『普通』なのか?

なら、

「…良いですよ?」

「本当ですか?! 有難う御座います!」

さつきとは打って変わって、いつもの小春さんのふわふわとした雰囲気になった。

「良いんですけど、具体的には何をすれば良いのでしょうか?」

「えっと、私の話に合わせてくれれば」

「分かりました。でも、ふりをして何をするんですか?」

「父と母にあつてほしいんです」

小春さんは私に、

父親のせいで両親が離婚してしまったこと、母親と弟さんとほぼ離れ離れの暮らしのこと、昔のように家族みんな一緒に暮らしたいという思いを話してくれた。

その話を聞いて、何故自分に頼ってきたのか、自分がここでうまくやれば、この家族は幸せな方向に向かうと事を察し、小春さんに協力しようと思った。

「そろそろ父が来ると思いますので、空さんは…」

「小春さん、空さんって言うの止めませんか? 付き合ってる風なんですから。ね、小春」

一瞬小春さんがびっくりしたような表情になる。

「えっと、空」

「はい」

「私が彼氏を連れてこれれば、もう一度やり直すことを考えてもやらんこともないぞ、つて父に言われているので」

なんて勝手な父親なのだろうか

「母もそれが出来たらもう一度つて言つてくださつたので、私の彼氏のふりをしてほしいんです」

女性が小春さん呼び何やらヒソヒソと話しているので、お茶を飲みながら自慢の聴覚（ただ狐だから人よりきくだけ）を使い話を盗み聞く。

「あの方が」

「ええ、お父様は？」

「準備を完了しております。いつでも」

「お父様はなんでこんな事をさせるのかしら？お父様と寺子屋に春樹を迎えに行つた時、空さんの事を見ていきなり私の彼氏の良いんじゃないか？なんて」

「旦那様の何かお考えがあるのではないのでしょうか？では、私はこれで。……」

その女性が最後に言つた言葉「狐のためにお嬢様まで」

狐だということがばれただと？

なぜ分かつた

私の変化を見破るほどの妖力は感じられないのに、何でだ？

「空お待たせしました」

「小春、帰ろう」

「え？でもお父様に…」

「いいからっ！」

私は強引に小春さんの手をとって家の玄関に向かって走る。

玄関のところに居た人に止められそうになったが、振りはらい私の家に向かって走る。

追っては、来てないな

それにしてもあの女の人どういう事だ？

「空さん？あの」

「もう少しで家に着くので待ってください。ついなら説明しますので」

私達は家々の裏を全速力で走った。

走馬灯 episode 家出 逃走

やっと家に着いた。

小春さんに無理をさせてしまったようで、呼吸がすごく荒い。

「大丈夫ですか？」

「だ、ハア……大丈夫、です。空さんは？」

「平気です。あと、これからは空でいいですよ。ただいま！雪！荷物！」

玄関を壊すように勢いよく開ける。

シーン

いないのか？

クソツ……このまま逃げるか？

いや、私一人だったら平気だが小春さんは人間だから、無理をさせたらダメだ。

人間は脆い。

このまま小春さんを連れて行くか？

私1人が囿に…

「空、どうして家から」

「えっと、その…あー」

どう説明していいかわからない。

小春さんは気づいていなかった。

いや、気づかないように育てられていたのか？

おそらく小春さんの一族はかつて狐の種と戦った事があるのだろう。

その戦いから生きて生還すると、狐の種が分かるというが…

でもこれは私と雪の代で終わった秘術の副作用のようなもの。

私達の前の代の誰かが人間と戦い、その人間が生きて帰ったけど？

そんなバカみたいな事をする狐がいるのか？まして、相手の死を確認しないままその

場を離れるなんて……ん？

あ、

それ私だけ。

やっべ

あの時だよ

そうだよね

天を助けた時だよね

ヤーツベヤツベ

「空？」

「あつえー、えつと」

ずっと硬直している私を不思議に思ったのだろう。

小春さんが私の肩を揺らす。

「小春の先祖で妖怪と戦った事のある方っている？」

「え？ええ、ひいお爺様が、妖狐と戦って傷だらけで帰ってきたって話を聞いた事が……」

おーあたりー!!

はい、私です

「逃げよう。小春」

机の上に雪たちに当てる書置きを残し、小春さんの手を引き里を離れるために走る。

「へ？あつ、ちよー！」

く数十分後く

「そ……ら、空！」

「……はい」

「ちよつと、止まって……ください」

「あご、ごめんなさい」

掴んでいた手を離す。

無心で走っていたので、魔法の森に入ってしまったことに気づかなかつた。

そうだ、人間は体力がないんだつた

茸の胞子は人間には害になるのか

「少し……あの家で休ませてもらおう」

向こうにある白い建物に小春さんを抱えて向かう。

トントン

「あの一。誰かいませんか？…いないみたいですわね」

背中の小春さんは顔色が悪くなっている、呼吸も荒くなっている。

どうすればいいかわからなかったのも、布を小春さんの口と鼻にあてておく。

抱えながら家の前に座る。

胞子は妖怪にも効くのだろうか。

私まで気分が悪くなってきた。

「貴方達、ここで何してるの？」

顔を上げてみると、人形のような綺麗な顔立ちで、周りに人形を漂わせている女性が立っていた。

「私は空と言います。小春を少し休ませてほしいのですが」

「彼女は人間？なぜここまで連れてきたの？…まあいいわ、入りなさい」

中に入り小春さんを寝かせると、その女性は手慣れた様に薬を調合し、小春さんに飲ませる。

小春さんはそれでだいぶ良くなったらしい。

「あなたは平気かしら？」

「はい、有難うございます…えっと」

「ああ、私はアリスよ」

「アリスさん、ありがとうございました」

アリスさんはこの森に住む魔法使いらしい。

「彼女を連れてどこに向かったの？」

「バレてしまったので里から離れようかと、追つても来てますし」

アリスさんは少し考えると、スツと立ち上がって奥に入ってしまった。

少しすると紙を一枚持って戻ってきた。

「この妖狐ってあなただったのね」

渡された紙には私に似た顔と小春さんの顔が描かれてあり、見つけたら賞金が出るみたいな事が書かれていた。

「もうこんなもので、早いなあ」

「彼女には？」

「まだ言つてません」

アリスさんは「はあ」と短いため息をつき、私の向かいに座った。

「この紙その子の父親が出したものね、娘も巻き添いにして殺そうとしてるなんて」

「だから里から離れようと走ってきたんですが、行くあてがなくて、そこらへんに家でも作りますかなー」

テーブルに手をつき立ちあがる。

「空、が…妖狐？」

声を聞いた瞬間頭が真っ白になる。

「小春…さん？」

ゆつくりと後ろを向くと、こつちを怯えた様に小刻みに震えながら小春さんがこつちを見ていた。

「本当ですか？その話」

「あ…えあ」

頭を抱える。

やつちやダメだ

やつちや…

殺つちや…

頭をフル回転させ今の状況を打破する方法を考える。

その思考を妖狐の正体がばれたら殺すという本能の様なものに邪魔され、なかなかい案が考えられない。

「っー」

「空!?!」

私はアリスさんの家を飛び出した。

走馬灯 episode 小春の思い



空が走って行ってしまい、私はアリスさんと2人になった。

空が妖狐と分かった時なぜか震えが止まらなくなり、空を怖い存在として見てしまった。

「起きてたのね」

アリスさんは立ち上がり、私の方にきて隣に座る。

「あの、空は」

「彼…いや、彼女相当重いものを背負ってるわよ。一生離されない呪縛をね」

「彼女？ってことは女の人？」

アリスさんの言っていることはよくわからなかった。

2人が見ていた紙を見せてもらうと、手配書に私の名前と空の特徴など、捕まえる気満々の文章が書かれていた。

「あなた、これからどうするの?」

「え?」

「彼女、まだ若いから未熟で、正体が隠しきれていなかった。だからあなたの父親にばれたみたいね。でもなかなかのレベルね。これならまあまあの大妖怪とかにもならないと詳しくは探れないわね」

私はアリスさんの話を聞いて、これからどうしようかと考える。

このまま里に帰っても元の生活に戻れる保証はない。

お父様は私ごと殺そうとしているから、今戻ったら何を言われるかわからない。

かと言って、このまま空と一緒に隠れて生活するのも限界がある。

このまま空を探して一緒に逃げたほうが私としてはいいのだけど、空は私に正体がばれたと思つて何をするかわからない。

「空を探すのを手伝っていただけませんか?」

空の接し方から見てこの人ではないだろう。

今は人間以外の種に頼るしかないのだ。

「ええ、もう探させてるわ、あら？ 見つけたみたいね。再思の道にいたって」
「案内してくれませんか？」

「乗って」

アリスさんは箒を持って家の玄関に。

私は「本当に箒で飛ぶんだ」と思いながら恐る恐るまたがる。

箒は本当に浮き上がりまっすぐ飛んでいく。

「彼女…空だっけ。空とは走ってここまで？」

「はい」

「大変だったわね、妖狐の体力はそんなでもないって聞いたから。飛んだほうが楽なの
に、よほど正体を知られたくなかったのね」

空はそんなにはれたくなかったのか、でも、私は空と一緒にいたい。

お父様にばれない様に隠れて暮らしたい。

「空さんはなんで知られたくなかったんでしょうか」

「あなたの家柄がそうだからじゃないからかしら」

「家柄ですか。私の家って何か他の家と違うのですか？」

質問するとアリスさんは勢いよく振り返る。

「あなた自分の家のこと知らないの?!」

「え？いや、なんで大きい家なのかな？とかは思っていましたけど。何かあるんですか？」
「あなたの先祖で狐と会って血だらけで帰ってきた話は聞いてるわよね。今はもう無いかもだけど、戦って生きて帰ると狐の種が分かるようになるみたい」

「分かるって、種族が識別できるってことでしょか」

「そうね。あなたもわかるのかと思ったけど、あなたの代で血は薄れて識別できなくなっただけだね」

自分の家の事を知り、父親が恐ろしく思えてきた。

狐を恐ろしい存在として語り継がれていたのだが、私にはそうは思えない。

空がそうだからというわけでは無いが、今まで戦って帰ってこなかったから私の家が有名になったってこと。

傷だらけにしたとしても、殺さずに返してくれた。

そんなに優しい狐がいるのなら、私は恐ろしい、憎いなどとは思えない。

「そろそろ着くわよ。あれじゃないかしら」

アリスさんの指差す方には真っ白な尻尾のようなものを持つ人が。

「あれが空？」

「そうかもね、もう少し近くわ」

ゆつくりと箒が降下していくと、その白い生き物がはつきりと見えてくる。

それは人型の白い九尾の狐。

いや、八本だ。

空さんの服を身まとい、あたり一面に咲く彼岸花を眺めている。

「空」

私が声をかけると空らしきその狐は、私たちがいる方を見上げ、手を横に振り霧を出現させる。

その霧が晴れると空の服を着た、白い長い髪、透き通る様な綺麗な肌、整った顔立ちと、全てが完璧な女性が立っている。

頭には耳がびよこつと生えていた。

「空、さん…ですか？」

「はい、私が空です」

「本当に？」

アリスさんも私と同じく驚きを隠せないよう。

「はい。アリスさんありますがどうぞいます。ここまで小春さんを連れて来ていただいて、戻ろうと思ったんですけど道がわからなくて」

空は照れた様に頭をかく。

男の時の空にも、何か魅せられる様なものがあつたのだが、今の空にはそれがさらに

増した様な、異様な雰囲気か漂っていた。

「小春さん、アリスさんと里に帰ってください。帰ったら私の話をしているのよ」

「どうして…ですか？」

「もう私には小春さんを守れる自信がなくなりました。あなたが私の正体を知った時震えてたから…」

「あの時は！びっくりしたただけで」

「でも怖かったですよ？」

私は何も言えない。

怖くなかったと言えば嘘になる。

でも、怖かったのは確かだが空と一緒にこれからもいたいという意味は変わらない。

「空さんは私と一緒に居たくないってことですか？」

「ち、違います！」

「じゃあどうして」

「恐怖を覚えた相手といっしょに過ごす辛さを私が知ってるから…」

空さんは右手で左腕をさすりながら目を伏せる。

「私は空さんとこれからも一緒に居たいです。森まで走ってきたのも私を父から守るためだったんですよね」

「私……と？……でも、私は追手から逃れるためにあなたの家族を殺してしまいかもしれない。なので帰って……」

空は帰らせようと私に一步近づく。

それでもひるまずに言葉を続ける。

「私には残念ながら、そのいうことを聞けない悪い人間なんです。恐怖とかはどうでもいい、私は空さんのそばにいたい」

空が硬直する。

それを見かねてアリスさんが口を開く。

「こう言ってるし」

「そうですね。じゃあ改めて、小春さん私と共に逃げてくれますか？」

「はい、喜んで」

走馬灯episode 逃亡生活

里から少し離れたところで、二人が暮らすのに丁度いいくらいの家を建てた。

目立ってしまうかと思っただがそうでもなく、自然な感じに仕上がったのでよかった。

「買い物とか外に出る事全般は私がやるので、家の中のことをお願いします」

「分かりました」

「もしも誰かここを訪ねてきたら、この扉に入ってください」

私は家の奥に作った扉を開けてみせる。

そこはもう一つの部屋があり、布団や食料など、長い間中に入ってもいいように、色々なものを詰めておいた。

「この中に入っていればばれませんので。普通の人にはただの壁にしか見えてないの
で」

「分かりました」

「じゃあ私は買い出しに行ってくるので、待っていて下さい」

小春さんを残し、家を出る。

走って里に行き、素早く買い物を済ませて家に戻る。

戻る途中に私たちを探している連中を見たが、私たちの居場所はまだつかめていないらしく、血眼で探している。

「おー怖っ、急がないとな」

家に戻ると小春さんは掃除をしていた。

私が帰ってくるのが見えると、私に大きく手を振ってきた。

「空さんー」

「ただいま戻りました」

私達は食材をしまい、これからの話をする。

私は妖狐の事を話した。

「そんな儀式があるんですね。その槍っていうのもなんかすごいんですね」

「こういうのではか狐を殺せない世代だったんです」

自分が戦場で駆け回った頃を思い出す。

小春さんが思い出したように手を叩いた。

「そうだ、博麗の巫女って知ってます？」

「いえ、聞いたこと無いですね」

小春さんから博麗の巫女の話聞く。

「たぶん私達が見つかつたら動いてくると思います。妖怪退治専門の巫女です。妖怪が出た時にはとても頼りになったのに、今はとても恐ろしいです」

博麗の巫女はとても強くて、そこら變の妖怪は目があつただけで一目散に逃げ出し、里の人からはとても慕われているが、一部の人たちからは「怪物」や「人間じゃ無い」などと言われているらしい。

でも、全てが万能というわけでも無いみたいで、感知はまあまあ優れていないらしい。「きつと巫女様も空さんの変化には気付かないと思うので大丈夫です。さあ、夕飯の準備しましよ」

無理やりテンションを上げて夕飯の準備に取り掛かつていった。

博麗の巫女か、厄介そうだな

里の人間からも恐れられるなんて、かなり強いと見える。

だが…

「空さん。ご飯とかお願いしていいですか?」

「は、はい!」

小春さんに呼ばれ、急いで台所に行く。

割烹着姿の小春さんはとても可愛く、よく里の男どもが放つておいたなと考えてしま

う。

まじまじと見てみると、視線に気づいた小春さんに声をかけられる。

「空さん？大丈夫ですか？」

「え？…は、はい。ご飯ですよね」

やばい、見入ってしまった。

雪並みに可愛い人間がいたのか

私は米をときながら小春さんの料理の手際に目が釘付けになっていた。

魚の捌き方から切り方など、ほぼ料理人並みに上手だった。

「料理、上手なんですね」

「そうですかね？お口に合うか心配で、妖狐って何を食べるんですか？」

「普通に人が食べるものを食べますよ。後は…これは言わないでおきますね」

「え？なんですか？」

「聞かないほうが、だつて人の…」

「あー！！言わないでください！」

小春さんは私の言おうとした言葉を察して、言葉を遮る。

そう、私達妖狐が食べるのは、普通に人間が食べる肉や魚の他に、人肉なども食べる

ことがある。

こんなことをしている間に準備が終わった。

「じゃあ食べましょ、いただきます」

「いただきます」

めっちゃうまい！

口に入れた瞬間に解けるように崩れる魚、味噌汁は口の中にふわつと香る出汁の香りが素晴らしい。

「美味しい」

「ありがとうございます」

「雪のまっずい料理しか食べてなかったから、余計に美味しく感じます」

「フフフツ、雪さんは料理苦手なんですか？」

「ええ、そりやもう秋斗のほうが上手ですよ。でも、嫌いになれないんですよ」

小春さんは笑いをこらえきれなくなって、箸を置いて笑い始めた。

「こんなに笑ってるのは初めて見た。」

「小春さん笑いすぎですよ」

「ごめんなさい、フフツ。そうだ、空さんはこれからも今みたいに男の人の姿で生活するんですか？」

「はい、その方が不自然じゃ無いし、もし2人でいる時に客が来ても怪しまれないで

しよ」

小春さんは納得したような顔をした後、心配するような顔に変わった。

「もし、巫女に見つかってしまつたら…」

「大丈夫です、私があなたを守ります」

そう言うと、顔を赤らめて目をそらされてしまった。

前にもこんなことがあったので私は小春さんに聞いてみた。

「あの、どうかしましたか？」

「ああ、いえ、なんでも無いです。ごちそうさまでした。先片付けますね」

小春さんは素早く食器を重ねて台所に行つてしまった。

ただ聞いたただけなのに…

なんでだ？

部屋を出る小春さんの背中を呆然と見つめるしかなかった。

走馬灯 episode 巫女との対面



「大丈夫です、私があなたを守ります」

その言葉を聞いた瞬間、空さんの顔をまともに見れなくなつた。
耐えられなくなり目をそらす。

「あの、どうかしましたか？」

「ああ、いえ、なんでも無いです。ごちそうさまでした。先片付けますね」

まじか、無自覚なの?!

こういう恥ずかしい事をサラッと言うなんて。

私が食器を洗い始めると、食べ終わった空さんが横から手を伸ばしてきたので、びつくりして一歩下がる。

「驚かせてしまいましたか？大丈夫…」

「あ、いえ！私が勝手にびっくりしただけなので！食器は洗っておくので、空さんは休んでてください」

空さんは少し困った顔をしたが、おとなしく部屋に戻っていった。

「ふー、これからどうしよう」

皿洗いも終わり部屋に戻ると空さんの姿が見えなかった。

少しすると、腕まくりをしたままの空さんが部屋に入ってきた。

「小春さん。お風呂ってどうしますか？」

「お先どうぞ」

「そうですか？じゃあお言葉に甘えて」

空さんがお風呂に入りいき、部屋には私一人になったので、縁側に座ってお茶を飲むことにした。

外はもうすっかり暗くなり蝉が鳴いている。

ここは里から離れていて森に近いので、蛍がチラチラ見えるし、森から下りてくる心地よい風で風鈴が綺麗な音を奏でている。

「巫女様。強いんですよね」

「小春さん、お風呂どうぞ」

ボソツと呟くと、後ろから空さんの声が。

びっくりしてお茶をこぼすところだった。

「は、はい！空さん早かったですね」

「あまり入っていると変化が解けてしまいますので」

浴室に向かう。

私はお風呂に入るために服を脱ぐ。

私の背中には大きな傷跡がある。

この傷は妖怪につけられた傷で、その時に巫女様に助けられた事があったのだ。

巫女様は紅白の巫女服に身を包み、艶やかな長い黒髪を一本に結わえ、お祓い棒とお札を持っていた。

横顔がとても綺麗だったことを覚えている。

「痛っ……いつまでたっても慣れないなあ」

湯船に浸かり、傷にお湯が触れるとズキッと痛みが走る。

この痛みを感じるたび、あの時巫女様が妖怪に向けた、親の仇でも見るような鋭い眼光が蘇ってくる。

あの人は本気で妖怪が嫌いなんだ。

体を素早く洗い、お風呂場から出て寝巻きに着替える。部屋に戻ると空さんが縁側に座って空を見上げていた。

「あ！小春さん！早く早く」

「え？」

空さんが縁側から呼んでいた。

夜空を指差し、キラキラとした目で私をみつめていた。

横に座ると、里の方から光の筋が上がり空に大きな花を咲かせる。

そうだ、今日は花火大会だった。

「小春さん、花火ってこんなに綺麗なものなんですね」

「え？はい、花火は私の一番好きな物なんです」

「そうなんですか。あ！大きいのが上がりましたよ」

空さんは子供のようはしゃぎ、妖狐の面影など全く感じさせられないような感じだった。

だんだんと花火の上がる数も減ってきて、そろそろ終わりなのかと寂しいような気がしてきた。

「空さん。あれ」

「小春さんは下がっててください」

大きなヒューという音を立て、高く高く夜空に上がる大きな花火の光を背に、こちらによろよると近づいてくる人影が森の中から歩いてくるのが見えた。



小春さんの指差す方に人影。

花火が逆光で影になり顔が見えない。

「小春さんは下がっててください」

まずは小春さんを下げる。

戦闘になるかもしれないからな。

「あの方は！」

小春さんが後ろから飛び出し、その人影に向かっていく。

小春さんが何やらその人に言い、肩を支えてこちらにゆっくりと歩いてきた。

「空さん、横になってもいいように布団かなんか敷いてください。水と救急箱もお願いします」

「は、はい！」

訳も分からず小春さんに言われた通りに準備をする。

小春さんがその人を寝かせると、私は硬直し目を見開いた。

ハツとして小春さんの方を見ると、小春さんも私が考えていたことがわかったのか、大きく頷いた。

そこに寝ている人は紅白の巫女服に包まれていたのだ。

意識がないようだが強い『気』を感じる。

「い、小春さん」

私は情けなく、微かに震えた声で小春さんと呼ぶ。

「ええ、空さんは初めて見たと思いますが、この方が博麗の巫女様です」

こんな細くて弱つそうな身体してんに巫女？

身長は高い方だが私より少し小さいか

「空さん、巫女様の傷が回復するまでここにおいてもいいでしょうか？」

は？

何言ってるんだ？

こんな危険人物、弱ってる時にさっさと殺しておくべきだろう

いつときの情が今後の危機を降らせるかもしれないんだぞ？

「ダメ……でしようか？」

「それは！……はあ、分かりました」

ここの里に巫女がいると断れないのが私の悪いところだな。

「この里に巫女がいるっていうこと自体危険極まりない事なのに、家に置くなんて。私はあまり近づかず、距離をとって接しよう。」

「では私が巫女様についていきますので、空さんは休んで下さい」

「寝ずにずっとですか？」

「はい、夜中に目を覚まされたらびびくりすると思いますので」

促されるまま寝床につかされる。

巫女の所に1人でいさせられる訳もなく、私は縁側に座り夜風に吹かれながら、目覚めるのを待つことにした。

走馬灯 episode

巫女との同居？

庭に大きな防術の陣を書いてその中心に立ち、ゆっくり時間をかけながら術を創る。

これを創る理由は、もし私と巫女の戦闘が始まるとき小春さんに危害を及ぼす事がないようにかけるものだ。

まあ、こうして待つて間に眠くなって寝てしまわないようにするのも理由の一つだけど

私ならこのような術は数秒あれば簡単にできるが、ゆっくりと時間をかけることで緻密に、簡単に解かれる事のないように、簡単に術が崩れて小春さんが傷ついてしまわないように出来る。

「はあっ！」

体から勢いよく放出された黄色い光は、私が手をかざすと手元にお札という形で具現化された。

「これを小春さんに貼れば」

縁側から家にかかる。

小春さんは巫女が寝ている布団に伏せて寝てしまっていた。

小春さんの腕にお札を貼り付けると、腕に染み込むように消えていった。

そして掛け布団を引っ張り出して小春さんにかける。

「よし。これでいいや」

また縁側に座ると、術を創り上げた後の疲れに襲われ眠ってしまった。

「お……おーい」

「ん、んあ?」

誰かに肩を叩かれた。

目を開けると巫女が立っていた。

「おはよう」

「お、はようございます」

いきなり話しかけられたのでびっくりにした。

「小春が起きたら、ありがとうと伝えておいてくれ」

巫女はそう言うのと足を引きずりながら去ろうとしたので、一瞬迷ったが引き留めた、
「待て、怪我がまだ完治していない」

「こんなのかすり傷だ」

見た感じは大丈夫に見えるが、彼女の足のけんはずぐに切れて歩けなくなるほどの激痛が走るだろう。

それに巫女自身も気付いてない。

「その足」

巫女は意味がわからないようで、首を傾げている。

ため息をついて説明を始める。

「…腕とかはまだ浅い傷だったが、その足のは程度が違う。あと少しでも運動したら確実にけんが切れる」

やっと分かったみたいで自分の足を見つめている。

「だから、もう少しここで休んで行け。足のが治るまで」

「巫女様！」

小春さんがやっと起きたみたいで、巫女に駆け寄り腕を引く。

「巫女様、まだ寝ててくださいい！」

「いや私はまだやる事が。しかも、まだ妖怪が残ってるかもしれない。このまま放っておけば里に下りてくるかもしれない」

「巫女様がこのまま歩けなくなつて戦えなくなつたら誰が里を守るんですか?!」

巫女は小春さんに引かれおとなしく戻つて行つた。

私もそのあとに続いて戻る。

「…っ！」

やばい！消したはずなのに術陣が少し残ってる?!

消し忘れたか

「空さん? どうかしましたか?」

「え? ああ、なんでもありません」

足でさりげなく消し、庭全体をもう一度確認して家に戻る。



（1日前）

里で妖狐の話が出回っているらしい。

私は生憎、感知には優れていないから気配や妖気を感じる事が難しい。

「来たわよ〜」

「紫？何をしに来た？」

「そんなこと言わないの。ただお茶もらいに来ただけよ」

仕方なくお茶を準備して紫に出す。

八雲 紫

スキマを操る妖怪だ。

「あ、そうそう最近里で話題になってる妖狐だけど」

「ああ人間の娘を連れて消えたそうだな」

その娘の父親が血眼になって妖狐を探しているらしい。

「それは置いといて、今森で暴れてる妖怪のことだけど。見つけたわ」

少し前から、大きな妖怪が森から降りてきて、人を攫っていくという噂を聞いた。

「今夜にでも狩るよ。準備があるからお茶飲んだらさっさと帰ってくれない？」

紫は面倒くさそうな顔をした後、重そうに立ち上がりスキマを開く。

一度こちらを振り向いてスキマの奥に消えていった。

1人になった神社で夜の準備を進める。

何人か里の人も襲われたということも耳にした。

暇つぶし程度に狩った妖怪どもの話だと、かなりの手練れで、数々の修羅場を通ってきたような沢山の傷があるという。

「今のうちに巡回済ましとこ」

準備を後回しにし里の巡回をすることにした。

私は時々里を巡回し妖怪の被害をいち早く把握して、被害が広がらないようにしている。

まあ、私が妖怪とかの気配を感じられないから、里や他の妖怪から聞くことしか出来ないからだけど。

「あら、巫女様」

「最近妖怪の被害はあるか?」

「いえ、今のところは大丈夫です」

茶屋の娘はぎこちない笑顔でそう答える。

ざっと里を回り、最後に寺子屋に向かう。

「やあ!巫女、今日は巡回の日か?君も真面目だな」

上白沢 慧音

寺子屋の教師をしている半人半獣。

里に被害は出さないようで、しかも里を妖怪からある程度守ってくれている。

「ここらには例のあの妖怪しか出ていない」

もうこんなに近くに来ていたのか

今夜に狩るのは決定だな

「分かった。ありがとう」

寺子屋では10人程度の子どもが遊んでいた。

鬼ごっこをしていた子供が私の方に後ろを向きながら走ってきていた。

「うわっ」

「おっと、危ないぞ」

転びそうになったので優しく受け止める。

「ありがとう！巫女様！」

「コラー！前見て走れー！」

その子は慧音から逃げるようにまた鬼ごっこに入り、キャツキャとはしやぎ楽しそうにしていた。

神社に戻り準備の続きを始める。

まあ準備と言っても武器を磨いたりするのはいつもやっているし、札はいつも持っているし、特にやる事がないので夜まで寝ることにした。

「お休み」

誰にというわけでもないがそう呟き布団をかぶった。

走馬灯 episode 巫女の強さ

グオオオオオオオオオオオオオ!!

腹の奥に響いてくるような大きな雄叫びで目がさめる。

「目覚め最悪」

この神社は里からまあまあ離れている。

里にはここよりも雄叫びは少し大きく聞こえていると思われる。

準備していたものを持って神社を出る。

声の出処はおそらく森の方。

あそこは霧が深く視界が悪いから戦いづらい。

「(ハッ)をまつすぐ進めば」

進んでいくと、通り過ぎる木々に沢山の傷が付いているのを発見した。

おそらくその妖怪がつけたものだろう。

グオオオオオオ

近くにいる。

武器として持ってきた大幣を構え周囲を見渡し、足音を聞き逃さぬように呼吸を止めて耳を澄ます。

サクツ：サクツ

妖怪の足音がだんだんと近づいてくる。

音は北から、やはり奥の方だったか

近くの木の上に登り、武器を構え直して、その妖怪が木の下を通るのをじつと待つ。

サクツ：サクツ、サクツ

歩くのが早くなつた

私の匂いに気づいたか

サクツサクツ：ジャリツ

その妖怪は木の下に来ると上を向き私を捉える。

顔のパーツがバラバラで薄気味の悪い顔が私を見ている。

私は顔を歪めて木から飛び降りる。

大幣の幣の部分を引きくと、それが鞘のようになっていて、中から鋭く研がれた刀が見える。

「かかってこい。この私が直々に殺してやるよ」

グオオアアア!!

妖怪は私に驚いたのか来た道を走っていく。
私も後を追いかける。

大きな木が倒れていてそこで妖怪は止まった。

追いついた私を見据えると、口を大きく開けて襲いかかってきた。
少しかすってしまっただが、それを地面に叩きつける。

地面を這うように首を伸ばし私の足に噛み付く。

「痛 あ!!」

急いで足を引くと、噛んでいた牙の数の分皮膚は引き裂かれ、肉が横に抉れる。

妖怪の脳天を突き刺し殺す。

持ってきた荷物の中から包帯を取り出し、応急処置としてきつく足に巻きつける。

泣き叫びたいくらいの激痛はあるが、神社に戻るまで足がもつてくれないと困るので
歯を食いしばり耐える。

グオオオオオオ!!

背後から雄叫びが聞こえた。

さつき殺したやつに似ている妖怪が2、3匹こちらに向かってきていた。

1体じゃなかったのか?!

突撃してきた妖怪を避けつつ、隣のやつに刀を差して、それを軸に回転し背後を取る。着地するときに足を着いてしまい、痛みで一瞬よろけてしまった。

その隙に妖怪がこちらに飛んできて身体に鋭い爪を立てると、巫女服に赤い染みが広がる。

これじゃあ

『紅白の巫女』じゃなくて

『紅の巫女』かな

噛まれていない方の足に力を込めて地面と水平に飛び、妖怪どもの足を切っていく。

ふくらはぎの部分にあたるところを刻んだので、地面に膝をつき倒れる妖怪ども。

私に向かつて土下座をしているようなその体勢を見ているのはとても良いものだったが、一体を苦しめるようにゆっくりと首を切っていく。

首に刃をかけ、力を込めると叫び声をあげる。

半分まで行くとさすがに耐えられなくなるのだろう、私を捕まえようと残していた腕をバタつかせ始めるが、それを華麗に避けて首から刃を抜く。

半分だけ首が切られ悶え苦しむ妖怪。

それを見て怯える他の妖怪。

叫び声が響く森。

それを聞いて自分の体を抱くように腕をさする。

最っ高！

そそる〜!!

叫び声がなくなった。

死んだようだ。

私はその一匹でまあまあ満足したので、その他は脳天を突き刺し殺す。

「ああ、やばい、森から出なきゃ」

刃を鞘にしまい立ち上がる。

足が使えないので大幣で体を支え、ふらふらと歩き始める。

血が多く出すすぎたのか頭がふらふらしてくる。

薄い意識のまま森から出ようと歩き続けていくと、向こうに灯りが見えた。

それに向かって歩き続けると、灯りの方から人が走ってくる。

その人に支えられると私の足は限界を迎え、意識も飛んでいった。

走馬灯 episode 巫女の足



小春さんが巫女を引き止めたその日の夜、嫌々巫女の足を診ることにした。

なぜボロボロでここまで来たのか、誰にやられたなどの詳しい理由は聞いていないので分からないが、傷の位置や形状、大きさなどで妖怪にやられた傷であることはわかる。「包帯外しますね」

足には血でベツタベタになった、真つ赤な包帯が乱雑に巻かれていた。

血で包帯が皮膚や傷口にくっついていて、それをとっていくと巫女が顔を歪める。

丁寧に外していくと、2、3本横に肉が抉れている傷があつて、目を覆いたくなる。「空さん、これ治りますか？」

眉間にしわを寄せながらそんなこと言われても…

「ん〜。まあとにかく傷は乾かさないうほうがいいですね」

巫女を抱え上げ縁側に座らせると、何が何だかキョトンとした表情をしていた。

傷が見えるように袴をあげさせる。

「小春さん、桶に水を入れて持ってきてくれませんか？あと新しい包帯も」

「?…:はい、分かりました」

意味がわからないという顔だったが、井戸へと走って行った。

小春さんがいなくなると巫女が口を開いた。

「小春はあなたの妻なのか？」

「ふえっ?!」

何聞いて来るんだこいつは?!

まあ、普通の人ならそう思うのは当たり前かもしれないが…

真顔で聞かれると改めてビビる

「いや、自分達は…」

巫女が私達を夫婦と想っていることを訂正しようとする、ナイスタイミングで小春

さんが戻ってくる。

「空さん持つてきましたけど」

「あ、ああ…:はい。有難うございます」

水の入った桶と包帯を受け取り、庭に出て巫女の足元にしゃがむ。

巫女は驚いた様子で私を見る。

「何をする気だ？」

「今から傷口を洗います。かなり痛いと思いますので我慢してください」

まあ、水に再生させる効果のある術をかけたから、洗うついでに治つちやうんだけど立て膝にして巫女の足を膝に乗せ固定する。

巫女の手を自分の肩に置き体を安定させ、小春さんに巫女の肩を押さえてもらう。

「いきますよ。少しの間だけですから」

水を少しずつ傷口にかけていく。

「痛 ああああ!!!」

悲鳴のような声をあげながら、痛みに耐えようと私の肩を力を込めて掴んでくる。

いーだだだだだだだだだだ!!

痛い痛い痛い痛い!!!

肩が、肩がああ!

水をすべてかけ終わり、傷口じやないところを軽く拭いたあと作っておいた塗り薬を布に塗り、それを当てて包帯をきつめに巻く。

「終わりました」

「巫女様大丈夫ですか？」

小春さんが少し震えた声で問いかける。

「…ええ」

「じゃあ上げますね。ある程度傷がよくなるまでなるべく足は使わないようにしてください」

足を拭いて巫女を抱え上げ布団の上に戻す。

巫女はそのあと何かすることも無く、おとなしく寝てくれた。

こうして寝顔だけ見るとかわいいところもあるんだけどなあ

水で濡れてしまった服を着替えようとする小春さんに呼び止められる。

「あの、ちよつといいですか？」



痛かった。

あの後、布団の中でただ純粹にそう思った。

空と言ったか？彼は

空の手際はとても良く、医者をやっていたのかと思えるほどだった。

私は職業柄怪我などは日常茶飯事なのだが、私の処置が悪いのか、怪我をした後数日は痛みが治まらない。

でも今は、痛いっつちや痛いがいつもの傷よりも深いものはずなのにそこまで酷くはない。

さて、神社に戻らないといけないな。

2日も掃除をしないと神社がえらいことになる彼の言うことは聞いておいたほうがいいのか？

「空さん、ちよつと」

小春が空を庭の方に連れて行く。

「空さんあの……………ぬ……………」

なかなか聞き取ることができない。

家から少し離れたところで話しててるのだろう

「私…術で……………」

術？人間が術という事を話すとは珍しいな

空、何者だ？

・
・
・

まあいつか
寝よう。



小春さんに連れられて、家から少し離れたところにある石段のところ座る。

「空さんあの時塗った薬って」

「ああ、私が術を練って作ったものです」

「それって大丈夫なんですか？それが元で巫女様に空さんが妖狐だつてことがバレるつて事は」

私の事を心配してくれていたみたいだ。

「かなりの大妖怪が巫女の近くにいなければ、ばれる事はまずないと思います」

「大妖怪…ですか？」

「そう。私程度の妖怪の作ったもの、大妖怪にとっては簡単に見破られてしまいます」
でも妖怪嫌いの巫女の周りに妖怪がうろついている事はありえないだろう。

ほとんど妖力を使わずに作ったから、一部を除いてすべての妖怪に見破られる事はない。

感知に優れてない巫女にも分からないだろう。

「小春さんはそろそろ休んでください」

「はい、ではおやすみなさい」

小春さんを先に家に戻して石段に座り込む。

少しの間空を眺めてから家に戻り、布団を敷いて寝る。

走馬灯 episode

神社へ

眠れない。

「んー」

伸びをして布団から出る。

小春さんの様子を見るために隣の部屋に行くと、すうすうと寝息を立てていた。

やっぱり寝てるかー

散歩でもしてくるか

気晴らしに外の空気を吸いに行く。

庭に出て深呼吸をすると、ここらに漂ってきてはいけない匂いがする。

「なぜこんな匂いが？」

匂いのする方へ近付いていくごとにそれが濃くなっていく。

「やっぱりか」

そこに広がるは血の海。

散らばってる肉塊の状態からして少し前に殺られたのだろう。

大型の妖怪が2、3匹ここで殺されたのか

ここらでそんなのを倒せる奴なんているか？

妖怪同士の喧嘩とも思い難い

肉の形からして武器は何か鋭いもの

元の形がわからなくなるほど食い散らかされている

「汚い。もつと綺麗に片付けてくれてもいいのに、まあしょうがないか」

足下に陣を落とす。

すると血が広がっているここら全域に陣が伸びていった。

指を鳴らすと、血や肉塊、骨などがその陣に吸い込まれ、地面に沈んでいった。

「やっぱ便利だなーこれ」

この吸い込んだ後は、いつもの場所へ送る。

「また今日も良いことしたなー」

いつもの場所とは、森の奥の方にある洞窟。

妖怪の中には、人の他に同じ妖怪の死肉を漁る輩もいる。

そんな奴らの溜まり場の洞窟に送れば、こちらにとつても、相手にとつても良いこと

しかないからな。

夜空を見ようと視線を上げると、木の枝に何か白いものが引っかかっていた。

とつてみると神社などでたまに見る幣だった。

「なぜこれがここに？・・・まさかつ！」

そこで私は気付く。

大型の妖怪を数体も倒せるほどの強い力。

妖怪の血の中に混ざっていた少量の人の血。

神社で使われる幣。

極め付けは、現に今私の家にボロボロでやってきて休んでる者。

「これをあの・・・巫女が？」

これほどの力量とはな

私も危ういな

明日には出て行ってもらう

持っていた幣を捨て、家に戻る。

巫女が寝ているその横に座り、起こさないように細心の注意を払いながら足に巻いている包帯を外す。

再生は始まっているが遅い。

このままじゃ小春さんは巫女を神社に戻らせないだろう。

「ふうー」

指に息を吹きかけ傷に当てると肉が再生し、傷が少し小さくなる。

「後は薬を塗り続けければそれでなおるだろう」

よーし、寝るか

気分転換もしたし

寝られればいいなー

自分の部屋に戻って布団に潜り込み眠りについた。

目がさめる。

体を起こし周囲を見渡す。

まだ夜明け前で薄暗い。

「朝ごはんでも作るかな」

台所に行くと巫女が水を飲んでいた。

「巫女さん、お早うございます」

私が声をかけると、巫女は大きく肩をビクツとさせて私の方を見る。

「驚かせてしまいましたか？」

「いえ」

何だ？

何かそわそわしている

「これから朝ごはんを作ろうと思うので、巫女さんはもう少し休んでてください」

巫女がいなくなつて朝ごはんを適当に作る。

何日も作つていなかつたので、一瞬忘れてしまったが、作つてるうちにだんだん思い出してきた。

作り終わる頃には外は明るくなつていた。

皿に盛り付けて部屋に持つて行く。

小春さんはまだ起きてこないな

まだ寝てるのかな？

ご飯をいったん置き、小春さんを起こしに行く。

「小春さ……あれ？起きてましたか」

「はい、おはようございませす空さん」

小春さんは着替え終わって使っていた布団を片付けているところだった。

それから戻り朝ごはんを並べる。

「おー!!今日は空さんが作りましたか」

「早く目が覚めたもので。いただきますす！」

「いただきます」

「いただきます」

3人で食卓を囲む。

雪と秋とご飯を食べているような感じがして、何だか楽しかった。

2人は特に会話もなくパクパクとご飯を口に運んでいる。

自分で作ったご飯は久しぶりだなー

「ごちそうさま」

「空さん、ご飯食べるの早いですね」

雪からも言われていたのだが、私はご飯を食べるのが早いらしい。早く食べているつもりはないのだが

自分の食器を持って台所に戻る。

使った鍋やら食器やらを洗い場に置く。

少ししたら2人も食べ終えたようので食器をもらいに行く。

「食器もらいますね」

「あ、空さんいいですよ、私がやりますので」

「私も手伝おう」

小春さんと巫女が台所に行って、私は1人部屋に残された。

走馬灯episode 家事力

〇〇〇

巫女さんと一緒に洗い場に立つ。

思ったよりも緊張するな

何か粗相のないようにしないと

無言もきついけど話しかける内容が思い浮かばない

「ねえ」

「は、はい?!」

「これはどこに置いたらいい?」

何を話そうかと考えていると、拭き終わった数枚の食器を持ってこちらを見ていた。

「えっと、そこに置いておいてくれれば後から今洗ってるのも一緒に片付けますので」

「……そう」

一瞬寂しそうな顔になり、また真顔に戻った。

「あの、巫女様は」

「様はやめてください、割に合わないの」

割に合わない？

「えっと、巫女さんは料理とかがつてするんですか？」

「ええ、神社では一人ですから。時々紫が来るのですが、紫というのは……私の知り合いです」

そのあとも神社の事やその紫という人の事も話してくれた。

こんなに生き生きと話している巫女さんを見るのは初めてだ。

里にいた時は、近寄りがたいオーラが出ていて、そんなに話しかけようという気も起きなかつたのに。

「小春」

「空さん？なんですか？」

空さんが玄関から呼んでいた。

お皿も洗い終わったので、巫女さんを置いて空さんのところへ行く。

「ちよつと里の方に行って買いたいものがあるので、家を空けたいのですが」

「はい、じゃあ留守番しておきますね」

「では行ってきます。すぐ帰りますので」

空さんを見送った後、巫女さんの話の続きを聞く事にした。

「巫女さん……あれ？」

台所にいると思っただけじゃない。

家から出て周りを見渡すと、庭の隅の方に立って地面のある一点を見つめていた。

近づいてみると人間のものではない、とても大きな足跡がそこにあつた。

「巫女さん、その足跡は？」

聞くと少し考えた後に口を開く

「何か獣の足跡か、こんなに大きな獣なんているのか？」

その言葉を聞いて、なぜか一気に変な汗が噴き出てくるように感じた。

そういえば空さんは狐の姿になった時、手足も狐のものになっていたような

じゃあこれは空さんの？

でもここで変化を解くなんて、そんな自殺行為するのか？

巫女は感知が優れていないと言っても、家に近い庭なんかで解いたらさすがにバレる

と思う。

私の事を訝しげに見る巫女さん。

「小春？顔色が優れないけど、どこか具合でも悪いですか？」
「いえ、何でもありません」

動揺を隠せずフラフラと歩き出す。

空さんの正体がばれて殺されると考えると、足元がおぼつかず目線も定まらない。
そんな私を危なかつしいと思ったのか、巫女さんが肩を支えて縁側に座らせてくれた。

「すみません、ありがとうございます」

「本当にどうしたの？急にフラフラと。何かあの足跡に心当たりでも？」

「え……あ、いえ、特に何も」

俯いていた私の顔を覗き込む。

前にしゃがみ、顔を見上げる。

「そういうば、私は過去にあなたを妖怪から救ったことがあったわね」

「覚えていたんですか？」

「小春の背中に傷があるだろう？それで思い出したんだ」

背中の傷、確かにこれは巫女さんに助けられた時に、妖怪に付けられたものだ。

なぜ背中に傷があることを？

確かあの時は、巫女さんは私が襲われた妖怪を倒したらすぐにいなくなつたはず。

「もし、あの時の妖怪のことを思い出してしまったんじゃないかと思ってね」

確かにあの妖怪は獣のような四肢で、顔は鬼の様なものだった。

「いえ、あの時の妖怪はもういないじゃないですか。現に巫女さんに倒されてるんですから」

この心配されている状況から早く脱したいので、いつもよりも明るく振る舞い、縁側を立つ。

私が動揺してたのとはちよつと理由が違ったけど、心配？してくれたのかな？

ちよつと優しい一面もあるんだなー

残った巫女さんは縁側に正座をし、空を見上げていた。

走馬灯 episode 里の変化

小春さんにああ言って出てきたけれど、本来の目的は買い物ではなく情報収集。敵の動きの偵察も大切だ。

里に降りて周りを見ると、私達を探している奴らが貼った張り紙がいたるところにある。

アリスさんが持っていたものと似ていた。

「最近物騒になりましたね」

「ええ、なにやら狐が出たとか」

お店の前でおばさま方がそう言っていた。

広がるの早すぎ！

まだ3日も経ってなくない？

影響力やばすぎ

「急ぐか」

誰にと言うわけでもないが、そうつぶやいて小春さんの家に走った。

~~~~~

「やっとついた」

かなり見回りの人がいて、くねくねと回り道したから結構時間がかかってしまった。そつと中の様子を見る。

「まだ見つからんのか」

「申し訳ありません。おそらく、里の外に行つたのかと」

「範圍を広めるか……だが、人が足りない。森の中で襲われたりでもしたら」

へえ

仲間のことも考えてるのか？

自分の娘は殺してもいいのに？

小春さんの父親が部屋からいなくなると、部下の人が小さな声でなにやらつぶやく。

「自分しか狐を見つけられないんだから、少しは外に出て探せばいいのに」

それはそうだ

この様子じゃ、まだまだ私達を見つけるには程遠いな  
部下の目を頼っているようじゃね

私達にたどり着くための情報はまだ無いと判断し、家に帰ることにした。  
途中で、雪の姿を見つけたが、事情を説明してる暇ない。

おばさんや秋を巻き込んで変な心配をかけることもできない

もし、雪たちにまで疑いがかかってしまつては

少し下を向き、他人のふりをしてすれ違う。

一瞬こちらを向く雪だったが、すぐに前を見て行つてしまった。

くそ！

走つて里を出る。

くくく

「戻りました」

「お帰りなさい」

家に帰って最初にいたのは巫女。

なにやら縁側に座り、空を眺めていた。

私が声をかけると、家の奥から小春さんが出てくる。

「お帰りなさい！」

小春さんへ簡単に里のことを話した後、巫女さんを呼ぶ。

「そろそろ足も大丈夫かと思えますので、神社に戻られてはどうですか？」

「足はもういいのか？」

「はい。私の作ったこの薬を毎日塗ってもらえば。傷跡は残ってしまうと思いますが、痛みは無くなっていつも通り生活できると思いますが」

説明が終わると、巫女さんを里まで送る準備を始める。

巫女さんの方も帰る支度ができたようなので、小春さんには留守番してもらい、巫女と家を出る。

うっそうとした森の中を巫女と2人並んで歩く。

とうとうこんな日が来てしまうとは思わなかった。

自分を殺しに来るであろう相手、私の生命を脅かす者と、戦いの時以外で会うというのは初めてのことだった。

しばらく歩くと神社に続く長い階段が見えてきた。

人は見当たらず、葉っぱなどが散らばっている。

「2、3日でこれか」

巫女はだるそうにそう呟いた。

階段を上がつていくと、下よりかはまだ綺麗な境内が見えてきて、1人の青年が賽銭箱の前に座り込んでいた。

「お帰りなさい。2日もどこに行っていたのですか？」

私たちの姿が見えるとその人は立ち上がり、その場で巫女に問いかける。

「霖之助君？あなたこそ、珍しいですね」

「巫女様だって、神社を開けるなんて珍しいじゃないですか」

私に気が付いたのか、霖之助と呼ばれた青年は、私に視線を移す。

「巫女様彼は？」

「ああ、彼は空だ。開けていた二日間彼の家に居てね、怪我の治療をしてもらったんだ」

「初めまして」

軽く会釈する。

「空。彼は森近霖之助と言ってな、私の友人だ」

「どうも」

紹介が終わると、霖之助君は巫女が神社にいるかの確認をしに来ていたみたいで、こ

うして話した後、すぐに帰ってしまった。

白っぽい髪に眼鏡と、まあまあ珍しい人だとは思ったが、  
なんだ！

人間じゃないじゃん！半々じゃん！

なら納得！

「君はどうするんだ？」

1人で納得していると、巫女に呼びかけられて我に帰る。

「巫女さん、これ」

前に塗った塗り薬を巫女に渡す。

受け取った時はなんなのかと首をかしげていたが、蓋を開けてみて分かったみたい  
だった。

「包帯は汚れたら変えて、それを塗ってください。痛みとか化膿するのを抑えられると  
思うので」

「分かった」

「では私はこれで」

戦場で会おう

「ああ、色々ありがとうな」



巫女を背に神社を出る。

神社が見えなくなると、全力ダッシュで家まで戻る。

途中、何匹かの妖怪にあったが、瞬時に切り刻み、排除する。

「ただいま帰りました」

玄関の戸を開ける、中は漁られ物が散乱している。

瞬間、嫌な汗が額を流れ落ちる。

敵？

人間の方は私達にたどり着くにはまだ遠かったはず。

その他の妖怪か？

私の張った薄い境界を破るほどの強者がここらにいるか？

いたとしてもこの周辺ではないはず。

奥の部屋！

部屋に散乱している物と物の隙間に足を入れて、踏まないようにしながら奥の部屋に向かう。

おそらくここ扉があるだろう、というところをノックする。

ゆつくりと見えない扉が開く。

「空さん…」

震えながら小春さんが出てきた。

すぐに何があつたのかを悟る。

里の連中か？

しかし、そんなそぶりはなかったはず

ここまでの間で家の場所まで突き止めるとは

「怪我はありませんか？」

不意に小春さんに抱きつかれる。

「っ!?!小春さん?」

ものすごく怖かったようで、私を抱きしめている間も震えが止まらない。

時折声が聞こえる。

どうやら泣いているようだ。

こうやって泣きつかれる事もなかったため、こんな時どうすればいいのかわからない。

「え、えっと」

一旦はがし、涙を拭く。

よく見ると腕や足に切り傷や擦ったような傷がある。

「小春さん、誰が来ましたか？」

「里の…おそらく父の」

やっばりか

まさかここまで荒らすとは

山賊かよ

「あつ！空さん！」

小春さんが指差す方には窓。

突然人の腕が出てきて何かを投げ込まれる。

バンツ！シューー

煙?!

煙幕か！

小春さんを抱え壁を突き破る。

抱えたまま森に向かい飛ぶ。

後ろを振り向き家を見ると、庭に何人かの人間。

里の見回りの奴らと同じ格好をしている。

「このまま逃げますよー！」

「え？は、はい！」

これから逃げ切れるだろうか？  
そんな不安と小春さんを抱え、どこにつくかもわからないまま森の奥に向かって飛んだ。